

愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第236集

# 名古屋城三の丸遺跡X

2026

公益財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団  
愛知県埋蔵文化財センター

名古屋城三の丸遺跡X

愛知県埋蔵文化財センター調査報告書  
第236集

愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第236集

なごやじょうさん まるいせき  
名古屋城三の丸遺跡 X

2026

公益財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団  
愛知県埋蔵文化財センター

## 序

愛知県埋蔵文化財センターによる名古屋城三の丸遺跡の発掘調査は、今回で第10次となります。この広大な遺跡には名古屋城が築かれた江戸時代ばかりでなく、それ以前の室町時代から戦国期の屋敷地の遺構、さらに古くは奈良時代、古墳時代、弥生時代それぞれの時期の建物跡からなる集落跡が確認されており、陶磁器、土器、金属製品や石器などの出土遺物とともに各時代の人々の暮らしのありようが調査のたびに鮮やかに立ち現れてきます。

今回の調査でも重要な発見がありました。戦国時代に造られた幅約12メートル、深さ4.5メートルもの巨大な堀が、土塁をともなって100メートル以上続くことが確認されたのです。明らかな防御施設が、しかも人力による非常に大規模な造成工事として広範囲で進められていたことに驚きます。これを戦国期の城下を囲むいわゆる「惣構」の遺構とすると、まだまだ謎の多い戦国期那古野城に関連する有力な情報の一つとなったことは疑いようがありません。名古屋城三の丸遺跡においても、調査成果の蓄積により地点ごとの歴史はしだいに面となり、その都度再評価の機会を得て継続的な文化財保護活動に繋がっています。

調査におきましては関係諸機関、周辺地域の皆様から多大なご協力をいただきましたことを深く感謝申し上げます。今回の調査成果が、地域の歴史理解と埋蔵文化財研究の一助となれば幸いと存じます。

令和8年3月

公益財団法人 愛知県教育・スポーツ振興財団

理事長 佐藤正美

## 例言

1. 本書は、名古屋市中区丸の内に所在する名古屋城三の丸遺跡（県遺跡番号 007027）の発掘調査報告である。
2. 名古屋城三の丸遺跡の発掘調査は、国土交通省中部地方整備局の名古屋第4地方合同庁舎整備等事業に伴う事前調査として、株式会社佐藤総合計画より愛知県民文化局文化部文化芸術課文化財室を通じて委託を受けた公益財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団 愛知県埋蔵文化財センターが実施した。
3. 調査期間は令和6年1月から3月、調査面積は 3,344 m<sup>2</sup>である。
4. 発掘調査は、武部真木（主任専門員）・梶田真由（調査研究主事）が担当した。
5. 発掘調査にあたっては、次の各関係機関のご指導とご協力を得た。  
国土交通省中部地方整備局 愛知県民文化局文化部文化芸術課文化財室 愛知県埋蔵文化財調査センター  
名古屋市教育委員会 名古屋城調査研究センター 株式会社佐藤総合計画 大成建設株式会社
6. 名古屋城三の丸遺跡 23B 区の発掘調査については、株式会社島田組（現場代理人：田中崇宏・林 那智 調査補助員：安孫子雅史 測量技師：竹村一真・前田芳孝）より調査業務全般の支援を受けた。
7. 報告書作成にかかる整理作業において、出土遺物の接合・抽出作業の一部を株式会社アーキジオ、実測・トレース業務を株式会社アコード、自然科学分析を株式会社パレオ・ラボ、出土遺物の写真撮影を有限会社写真工房 遊 にそれぞれ委託して行った。
8. 発掘調査、報告書作成の過程で、次の各氏からご指導、ご協力を得た。  
赤羽一郎 井上喜久男 岩淵 寛 梅本 博志 岡田圭司 岡本直久 小澤一弘 金子健一  
久保禎子 小島章弘 佐藤公保 柴垣勇夫 清水芳昭 城ヶ谷和宏 鈴木とよ江 鈴木正貴  
仲野泰裕 丸山 宏
9. 本編の執筆と編集は武部真木が担当した。なお、第5章1・2 は（株）パレオ・ラボ分析結果を武部がまとめて編集を行った。
10. 遺構番号は原則として発掘調査時に用いたものを踏襲した。なお、使用する遺構記号は以下のとおりであるが、厳密な統一性はない。  
SK：土坑 SI：竪穴建物 SB：掘立柱建物 SD：溝 SE：井戸 NR：自然流路  
SX：その他不明遺構
11. 発掘調査および本書で使用した座標は、国土座標第Ⅶ系に準拠した。ただし、表記は新測地系（世界測地系）による。
12. 海拔表記は東京湾平均海面（T.P.）の数値である。
13. 本編で使用する土層の色調については、『新版標準土色帳』を参考に記述した。
14. 発掘調査の記録（実測図、写真等）は、公益財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センターで保管している。なお、名古屋城三の丸遺跡の略記号は「2NS」である。
15. 出土遺物は、愛知県埋蔵文化財調査センターで保管している。  
〒498-0017 愛知県弥富市前ヶ須町野方 802-24

### 発掘調査現地作業スタッフ

（発掘作業員）加藤雄二 山本 學 坂井隆三 服部勝敏 奥 淳一 大西信成 水谷久子 奥野基史  
山本敏男 中神京子 濱崎弘三 鷗飼伸夫 平岩暉司 佐々木隆夫 関 敦子 木村光之 後藤秀夫  
森 清司 平野武邦 福井清治 北村泰一 大嶽友美 青山隆生 戸松康樹  
（重機オペレーター）伝代賢治 川島貴志 駒村大輔 福田健二 南山昌彦 佐藤剛士  
（現場代理人）田中崇宏 林 那智  
（調査補助員）安孫子雅史（測量技師）西尾唯史 前田芳孝 竹村一真

### 整理作業スタッフ

阿部裕恵 一柳純子 梅本陽子 唐木美早 川添奈穂美 鈴木好美 瀧 智美 時田典子  
永井智子 堀田祐美 前田弘子 山田有美子 山本孝枝

# 目次

第1章 調査の経緯・経過	1
1 調査理由	
2 調査の経過	
3 整理作業の経過	
第2章 遺跡の位置と環境	2
1 地理的環境	
2 歴史的環境	
第3章 遺構	6
1 調査の概要	
2 時期区分と主要遺構の概要	
3 溝 (SD)	
4 井戸 (SE)・土坑 (SK)	
5 その他	
第4章 遺物	21
1 戦国期以前の出土遺物	
(1) 古墳時代・奈良時代	
(2) 戦国期	
2 江戸時代以降の出土遺物	
a. 土器・陶磁器類	
b. 瓦類	
c. 金属製品	
d. 鍛冶関連資料	
第5章 自然科学分析	35
1 名古屋城三の丸遺跡出土の動物遺体	
2 放射性炭素年代測定結果	
第6章 総括	44
1 戦国期区画溝と「惣構」	
2 鍛冶関連遺物の分布	
3 武家屋敷内の空間利用	
付表 遺構一覧表 1・登録遺物一覧表 1～4	
図版 基本平面図 1～6	
写真図版 1～8 (遺構・遺物)	

## 挿図・表 目次

図 1 名古屋城三の丸遺跡の位置	1
図 2 名古屋城三の丸遺跡周辺の地質図	2
図 3 名古屋城三の丸遺跡調査地点 (縮尺 1/5,000)	4
図 4 23B 区主要遺構配置図 (縮尺 1/600)	6
図 5 315SD 断面図 (横断面, 縮尺 1/50)	8
図 6 23B 区 315SD I 層下平面図 1 (S=1/200)	9
図 7 23B 区 315SD I 層下平面図 2 (S=1/200)	10
図 8 315SD 底面平面図 (縮尺 1/100) および下層埋土の縦方向断面図1 (縮尺 1/50)	11
図 9 315SD 下層埋土の縦方向断面図 2 (縮尺 1/50)	12
図 10 315SD 下層埋土の縦方向断面図1・2 土層注記	13
図 11 320SE,330SK 平面・断面図 (縮尺 1/50)	15
図 12 321SE,328SE,304SE 平面・断面図 (縮尺 1/50)	16
図 13 301SE,302SE,303SE 平面・断面図 (縮尺 1/70)	17
図 14 井戸集中範囲平面図・断面図 1 (縮尺 1/50)	18
図 15 井戸集中範囲断面図 2 (縮尺 1/50)	19
図 16 324SX 平面・断面図 (縮尺 1/50)	20
図 17 土器・陶磁器・石製品実測図 1 (縮尺 1/4, 一部 1/2)	22
図 18 土器・陶磁器・石製品実測図 2 (縮尺 1/4)	24
図 19 土器・陶磁器・石製品実測図 3 (縮尺 1/4, 一部 1/2)	25
図 20 土器・陶磁器・石製品実測図 4 (縮尺 1/4, 一部 1/6)	26
図 21 土器・陶磁器・石製品実測図 5 (縮尺 1/4)	27
図 22 土器・陶磁器・石製品実測図 6 (縮尺 1/4)	28
図 23 土器・陶磁器・石製品実測図 7 (縮尺 1/4)	29
図 24 土器・陶磁器・石製品実測図 8 (縮尺 1/4)	30
図 25 瓦・鉄滓実測図 (縮尺 1/6,1/4)・銭貨拓本 (縮尺 1/2)	31
図 26 瓦印拓本 (縮尺 1/1)	32
図 27 320SE 出土の鍛造剥片	34
図 28 23A・23B 区出土の動物遺体 (貝類)	40
図 29 23A・23B 区出土の動物遺体 (魚類・鳥類・哺乳類)	41
図 30 名古屋城三の丸遺跡の戦国期溝 (堀) の分布	45
図 31 室町時代から戦国期溝 (堀) 断面形状と標高 (縮尺 1/200)	46
図 32 屋敷割の推定範囲と居住者の変遷	47
図 33 武家屋敷内の主要遺構配置図 (23A,23B 区および県三の丸庁舎地点)	47
表 1 名古屋城三の丸遺跡 関連年表	5
表 2 瓦刻印の種類と部位	32
表 3 鍛冶関連遺物と近世以降の金属製品	33
表 4 名古屋城三の丸遺跡出土の動物遺体一覧	36
表 5 動物遺体の同定結果 (1)	37
表 6 動物遺体の同定結果 (2)	38
表 7 動物遺体の同定結果 (3)	39
表 8 測定試料および処理	42
表 9 放射性炭素年代測定および暦年較正結果	42

# 第 1 章 調査の経緯・経過

## 1 調査理由

愛知県名古屋市中区三の丸に計画された名古屋第 4 地方合同庁舎整備等事業にともない、国土交通省中部地方整備局および株式会社佐藤総合計画より愛知県県民文化局文化部文化芸術課文化財室を通じて委託を受け、公益財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センター（以下愛知県埋蔵文化財センター）が調査を行った。

## 2 調査の経過

発掘調査は、(株)島田組の調査支援を受け、愛知県埋蔵文化財センターが現地で管理する体制で行った。令和 5 年（2023）は、まず 5 月から 8 月の期間で建物周囲の 23A 区（調査面積 1,119 m<sup>2</sup>）について発掘調査を行い、現地表面（標高約 12.5m）から掘削を開始した。

本書で報告する調査範囲は、23B 区（調査面積 3,344 m<sup>2</sup>）を対象としている。これは地下駐車場を含む建物基礎構造物等を撤去した後の標高約 8.5m の面より調査を開始している。

令和 6 年（2024）1 月 9 日より重機による表土掘削を開始し、遺構検出・遺構掘削・遺物取り上げなどの人力作業、測量・写真撮影・空撮などの記録作業

を行い、出土遺物の洗浄、整理収納作業を経て 3 月 22 日に現地作業を終了した。

地元説明会は調査期間の終盤の 3 月 9 日に開催した。午前 11 時より開始の現地公開では多数の見学者があった。

## 3 整理作業の経過

整理作業の期間は、令和 6 年（2024）4 月から令和 7 年（2025）3 月の期間である。出土遺物の整理では、土器・陶磁器類の分類・接合作業、報告書掲載遺物の抽出作業補助とそれらのリスト作成は(株)アーキジオに委託して行った。掲載遺物の実測・トレース作業は(株)アコード、掲載遺物の写真撮影は(有)写真工房遊に委託して行った。そのほか、自然科学分析については(株)パレオ・ラボに委託して行った。

出土陶磁器類の鑑定には井上喜久男・岡本直久・金子健一氏らを招聘した。そのほか図版作成・原稿執筆・編集作業は武部が行った。

なお、整理作業完了後、出土遺物はすべて愛知県埋蔵文化財調査センターへ移管されている。



図 1 名古屋城三の丸遺跡の位置

## 第 2 章 遺跡の位置と環境

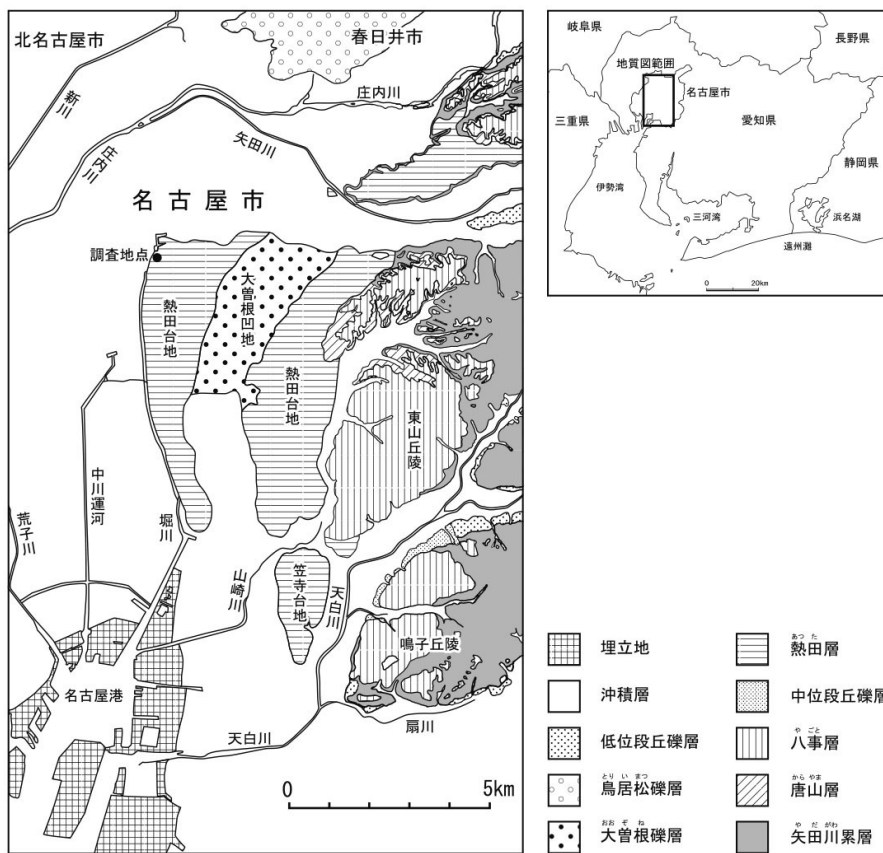
### 1 地理的環境

名古屋市中区三の丸に所在する名古屋城三の丸遺跡は、愛知県の西部に位置する名古屋市では北西部に位置する(図 1)。名古屋駅からは北東に約 1.8km、熱田からは北へ約 7km の距離にあり、熱田台地の北西端に築かれた名古屋城城の南辺をなす「三之丸」が遺跡の範囲である。名古屋城が築かれた台地の周囲には低地が広がり、その標高差は約 10m、北側は湿地環境を利用した外堀と下御深井御庭が配置され、西側には築城時の慶長十六年(1611)頃に整備された堀川がめぐる(図 2)。

名古屋城三の丸遺跡周辺の地下地質について、地層は全体として砂礫・泥互層からなり下位より東海層群(新第三系)、海部・弥富累層(中部更新統)、熱田層下部(上部更新統)、熱田層上部(上部更新統)、第一礫層(上部更新統)、濃尾層(最上部更新統)、南陽層(完新統)などの第四系の累層から構成される。これらのうち中部更新統は丘陵～高位段丘を、上

部更新統は中・低位段丘を、上部更新統最上部～完新統は沖積低地を構成している。名古屋城三の丸遺跡の立地する熱田台地は上部更新統の熱田層により構成されている。

2001 年調査時の深掘りの結果では、標高 7.97～11.20m までに粗粒砂層と粘土層からなる層序が得られており、標高 7.97～8.30m にみられる粗粒砂層中の標高 8.01m の層準から阿蘇 4 テフラ(Aso4:86～90ka(ka は  $10^3$  年前を表す地質年代単位))、その直上の標高 8.18m の層準からは大山生竹テフラ(DNP:80±40ka(木村ほか 1999))とともに斜方輝石および単斜輝石を主体とし角閃石を含む特徴をもつ、岐阜県と長野県との県境をなす御嶽火山起源の御岳-奈川(On-Ng: 約 5 万年前(中村ほか, 1992))も含まれた。黒褐色シルト質粘土層(標高 11.11m～11.20m)の標高 11.15m からはバブルウォールタイプの火山ガラスが認められる始良 Tn テフラ(AT: 約 2 万 4 千年前(村井ほか 1993))が検出され、さらに始良



●が調査地点を示す。地質図は坂本ほか(1984)、坂本ほか(1986)を基に作成。

図 2 名古屋城三の丸遺跡周辺の地質図(『名古屋城三の丸遺跡 VIII』図 4 より)

Tn テフラが検出された層準よりも上位の標高 11.19m のシルト質粘土層の放射性炭素年代が暦年代較正值で 10890-10755cal yrs BP(PLD-1594) を示し、阿蘇 4 テフラの約 9 万年前以降から始良 Tn テフラの約 2 万 5 千年前、放射性炭素年代測定値の約 1 万年前までの地質年代や数値が得られている。

## 2 歴史的環境

名古屋城域で初めて発掘調査が開始されてからおよそ 50 年が経過する。これまでに特別史跡に指定された本丸・二之丸・三之丸の土塁と石垣については名古屋市による調査が、名古屋城三の丸遺跡では名古屋市教育委員会と愛知県埋蔵文化財センターにより 20 地点を超える調査が行われている(図 3)。このほかに近年、愛知県の新体育館建設事業にともない、城域の北側の名城公園遺跡において 27,000 m<sup>2</sup>もの広範囲で発掘調査が行われた。時々の尾張藩主の趣向を反映するかのような整備・改変が行われた下御深井御庭に関する遺構が検出されたほか、江戸時代以前では奈良時代・古墳時代・弥生時代の集落跡、複数の溝や流路跡が検出されている。

今回の 23B 区の調査成果では、戦国期に遡る大型の溝の検出が特に注目された。ここでは戦国期の那古野城について整理しておく。

史料が記す那古野城は、大永年間(1521～1528)に駿河国主今川那古野氏により築かれたとされる。今川氏豊が城主の時、天文七年(1535)に織田信秀が奪取し、これを信長に譲った。その後、信長が清須城へ移ると、城主は織田信光、林秀貞へと代わり、天正十年(1582)には那古野城は廃城になっていたという。

那古野城の実像については明らかでない。

17 世紀末から 18 世紀初頭に天野信景が著した『尾州古城志』には「那古野村 今本丸之地是也、古或謂今市場ノ城 今川左馬助氏豊享禄年中築之、天文元年二月織田信秀奪之信長誕生於此城云々 織田備後守信秀 織田三郎信光弘治元年信長使信光居当城其冬為家臣被殺 林佐渡守信勝 至天正八此後廢城慶長十五年新築大城」と記す。位置は近世名古屋城本丸に比定されている。

正徳四年(1714)までに成立したとされる、尾張

藩士朝日重村・重章の『塵点碌』では、「那古野ノ城今川左馬之介氏豊始而築之、柳の丸と号ス、今の御本丸の西御深井丸ノ所也云々、御本丸ヨリ南山澄氏の家なんとあたり迄今市場といいしとかや」と記され、この時には既に位置は仔細不明となっている。

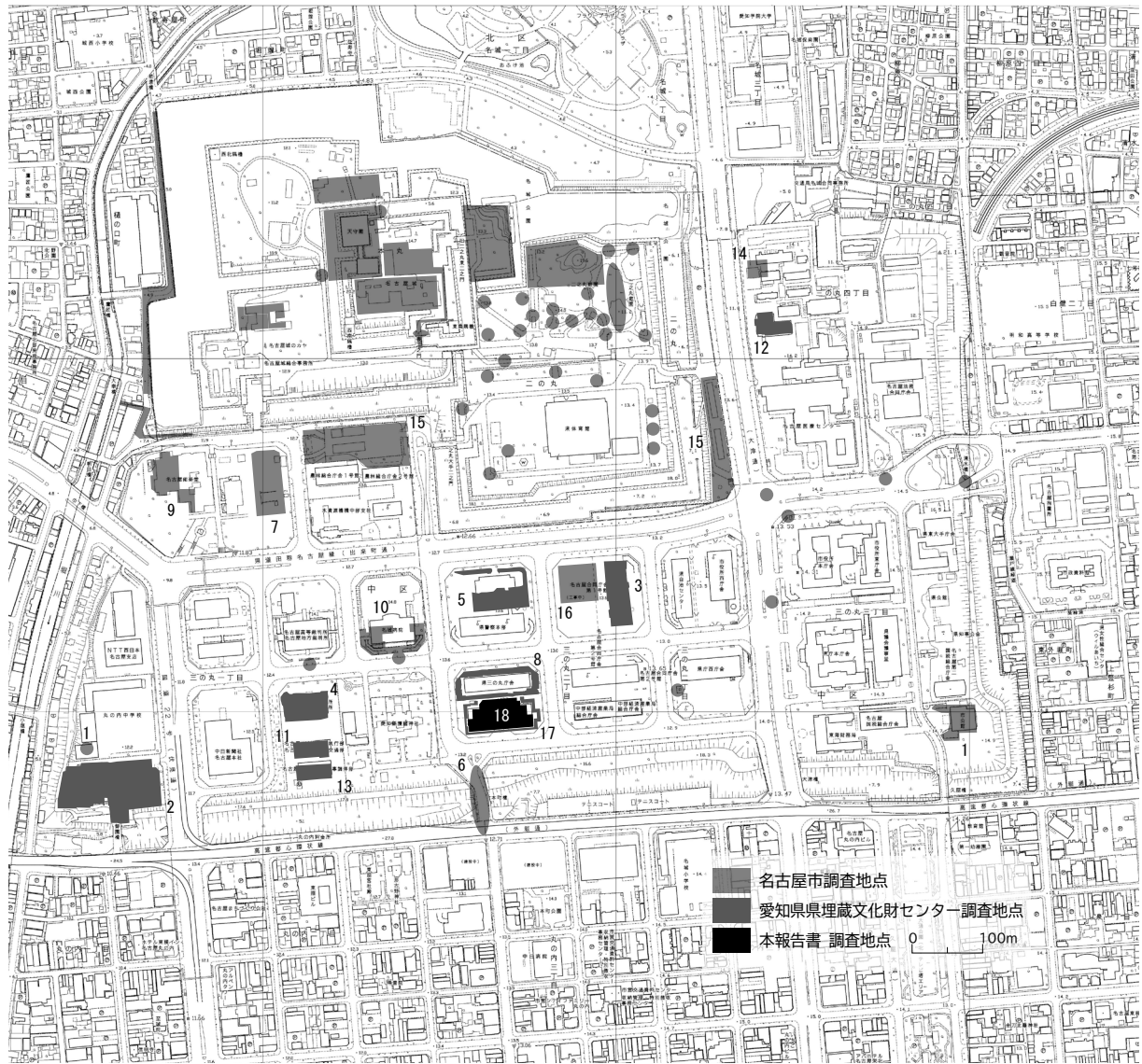
二之丸付近説の根拠は、文化十四年(1817)に写された奥村得義所蔵の「御城取大体之図」と「那古野古城之図」に描かれた「古城跡」が、近世名古屋城の二之丸の位置に相当するところである。

発掘調査により検出された 15 世紀終わりから 16 世紀の屋敷地区画溝については、資料の増加とともに規模・形状・方位を元に展開の傾向が整理されてきた(松田 2002 ほか)。「準方位」の軸線をとる溝から正方位に代わっていくという変遷が認められること、西側の台地縁辺に近い遺構は地形の影響を受けているとして除き、これ以外の範囲の溝群は 16 世紀初頭から「正方位」に更新していく場所と、やや遅れて変化していく地点が確認できる。こうした状況から松田は早い段階から正方位の軸線方向が成立する二の丸の付近が戦国期の中心域であったと推定した。

戦国期の様相は近世武家屋敷の整備の段階とその後の開発でも削平されなかった大型の区画溝群の展開を追うものであり、これまでの調査でも時期を明確に示す資料は多くはない。調査・研究の主要な課題として残されている。

### 【参考文献】

- 尾野善裕,1998,「掘り出された戦国時代の那古野城」『新修名古屋市史 第二巻』名古屋市  
 松田 訓,2002,「遺構からみた那古野城の残影」『研究紀要 3』愛知県埋蔵文化財センター  
 鬼頭 剛,2007,「第1章 2 周辺自然环境」『名古屋城三の丸遺跡 VIII』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 161 集  
 松田 訓編,2003,『名古屋城三の丸遺跡 VI』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 115 集  
 名古屋市,2013,『新修名古屋市史 資料編 考古 2』愛知県埋蔵文化財センター,2023,『令和 4 年度年報』



図中地点番号	調査年	報告書
1 名古屋市公館 (1次・3次) 丸の内中学校 (2次)	1975~1976	『名古屋城三の丸遺跡 -1,2,3 次調査の概要』名古屋市教育委員会, 1989
2 愛知県図書館	1988	『名古屋城三の丸遺跡 I』愛知県埋蔵文化財センター, 1990
3 名古屋第一地方合同庁舎	1988	『名古屋城三の丸遺跡 II』愛知県埋蔵文化財センター, 1990
4 名古屋家庭簡易裁判所合同庁舎	1990~1991	『名古屋城三の丸遺跡 III』愛知県埋蔵文化財センター, 1992
5 愛知県警察本部	1991	『名古屋城三の丸遺跡 IV』愛知県埋蔵文化財センター, 1993
6 本町門	1991	『名古屋城本町御門跡発掘調査概要報告書』名古屋市教育委員会, 1992
7 中部電力地下変電所	1992~1993	『名古屋城三の丸遺跡第 4・5 次発掘調査報告書 - 遺構編・遺物編』名古屋市教育委員会, 1994
8 愛知県三の丸庁舎	1993~1994	『名古屋城三の丸遺跡 V』愛知県埋蔵文化財センター, 1995
9 名古屋市能楽堂	1993~1994	『名古屋城三の丸遺跡第 6・7 次発掘調査報告書』名古屋市教育委員会, 1995
10 名城病院地点	1995~1996	『名古屋城三の丸遺跡第 8・9 次発掘調査報告書』名古屋市教育委員会, 1997
11 地方簡易裁判所庁舎	2001	『名古屋城三の丸遺跡 VI』愛知県埋蔵文化財センター, 2003
12 国立名古屋病院	2002	『名古屋城三の丸遺跡 VII』愛知県埋蔵文化財センター, 2005
13 地方簡易裁判所合同庁舎	2006~2007	『名古屋城三の丸遺跡 VIII』愛知県埋蔵文化財センター, 2008
14 名古屋医療センター職員宿舎	2011	『名古屋城三の丸遺跡 -職員宿舎建設予定地埋蔵文化財発掘調査報告書』名古屋市教育委員会, 2011
15 名城公園宿泊所 二之丸東駐車場	2014	『名古屋城三の丸遺跡 金シャチ横丁事業に伴う発掘調査報告書』名古屋城三の丸総合事務所, 2015
16 名城東小公園	2015~2016	『名古屋城三の丸遺跡 第 12 次発掘調査 (中央新幹線「名城非常口」地点)』名古屋市教育委員会, 2017
17 名古屋第四地方合同庁舎	2023	『名古屋城三の丸遺跡 IX』愛知県埋蔵文化財センター, 2026
18 名古屋第四地方合同庁舎	2023	『名古屋城三の丸遺跡 X』愛知県埋蔵文化財センター, 2026

図 3 名古屋城三の丸遺跡調査地点 (縮尺 1/5,000)

表 1 名古屋城三の丸遺跡 関連年表

年代・年号	できごと
12世紀	小野法印顯恵（1175没）を開発領主として「那古野荘」が成立
1192 建久3	鎌倉幕府はじまる
1338 暦応1	室町幕府はじまる
14世紀	『江家次第』の紙背文書「建春門院法花堂領尾張国那古野庄屋職相伝系図」／「那古野」初見
1364 貞治3	大須真福寺文庫の『弘法大師入定勘決記』写本奥書に那古野荘安養寺で写すとあり
1431 永享3	この頃那古野今川氏が屋敷を構える
1467 応仁1	応仁の乱
1493 明応2	細川政元の政変／この後、今川氏那古野在地の強化
1521～24 大永1～4	この頃、駿河国主今川氏親が「那古野城」を築き、氏豊を城主に置く（別称 柳の丸）
1534 天文3	織田信長生まれる／父、尾張国勝幡城主・織田信秀
1538 天文7	この頃、織田信秀が那古野城攻略／安養寺・天主坊・若宮八幡社など焼失
1555 弘治1	織田信長が清須城に移る／織田信光（後に林通勝）を名古屋城主に置く
1560 永祿3	桶狭間の合戦
1573 天正1	室町幕府の滅亡（織田信長が將軍足利義昭を追放）
1582 天正10	本能寺の変／この頃那古野城廃城
1590 天正18	豊臣秀吉が天下統一
1600 慶長5	関ヶ原の戦い／松平薩摩守忠吉（家康第四子）清州城主に、徳川義直（家康第九子）誕生
1603 慶長8	徳川家康が江戸幕府を開く
1607 慶長12	松平忠吉没する／閏4月26日徳川義直（当時は義利）甲府城から清須城主に移る 伊奈忠次による検地と木曾川改修工事（犬山～弥富間48km「お囲い堤」の完成）
1609 慶長14	徳川家康が名古屋城築城を決定する
1610 慶長15	名古屋城築城はじまる（20大名による石垣普請六月から十二月まで）、「清須越し」はじまる
1611 慶長16	堀川開削（福島（羽柴）左衛門太夫正則普請奉行）
1612 慶長17	十二月天守建築の完成（小堀遠江守作事）、本丸御殿作事開始（作事奉行中井正清）
1614 慶長19	大阪冬の陣／この頃までに築城工事ほぼ終了、本丸御殿大奥作事
1615 元和元	大阪夏の陣（豊臣氏滅亡）／本丸御殿完成、紀州浅野幸長女春姫お輿入れ
1617 元和3	二之丸御殿完成
1620 元和6	二月義直二之丸御殿へ移る
1627 寛永4	二之丸庭園内に聖堂（金声玉振閣）建設
1634 寛永11	將軍家光が上洛に際して本丸御殿に宿泊
1663 寛文3	二之丸南の尾張藩家老竹腰・成瀬の両邸を三之丸へ移し、以後馬場や矢場で構成される向屋敷を整備
1669 寛文9	昨年大破した大天守の大修理（2代光友の代）
1730 享保15	金鯱が金網で覆われる
1751～63 宝暦年間	本丸天守の大修理（2～5階屋根銅瓦葺きに改変、天守台石垣の修理（8代宗睦の代））
1822 文政5	二之丸御殿の大改造（10代斉朝の代）
1836 天保7	天守修理と二之丸御殿改修（11代斉温の代）
1867 慶応3	大政奉還、新政府は発足
1868 明治元	明治維新、幕藩体制の崩壊／前藩主徳川慶勝が佐幕派藩士を処分（青松葉事件）
1871 明治4	廃藩置県／二之丸の大半は兵營に
1872 明治5	東京鎮台第三分營が名古屋城本丸（本部＝本丸御殿）に置かれる／二之丸御櫓取り壊し
1873 明治6	東京鎮台第三分營が名古屋鎮台に改称／二之丸御殿を取り壊し、兵舎を建設
1874 明治7	三之丸全域が陸軍省に移管される
1881 明治14	二之丸庭園の一部を移築（三の丸庭園）
1887 明治20	名古屋鎮台司令部庁舎新築（三の丸）、本丸御殿から本部が移動
1889 明治22	下御深井御庭、小牧山と交換で徳川家から陸軍へ移管
1891 明治24	10月28日濃尾大地震／本丸西南隅櫓崩壊、被害甚大だった本丸等多門櫓を撤去
1893 明治26	本丸・西之丸・御深井丸が宮内省に移管され、名古屋離宮となる
1923 大正12	宮内省による本丸西南隅櫓再建
1930 昭和5	名古屋離宮廃止、名古屋市へ「下賜」
1931 明治6	名古屋城管理事務所の設置と一般公開の開始
1932 明治7	12月12日「史蹟 名古屋城跡」の指定受ける
1939 昭和14	第2次世界大戦はじまる
1945 昭和20	5月14日空襲により本丸天守・御殿など焼失
1945 昭和20	敗戦／名古屋市を中心に米軍第25師団27,000人が進駐する
1948 昭和23	二之丸旧兵舎を名古屋大学校舎に使用
1950 昭和25	戦災免れた隅櫓3棟および表二之門が重要文化財の指定受ける
1952 昭和27	3月29日「特別史跡 名古屋城跡」の指定受ける
1959 昭和34	10月1日天守・榎多門（旧・江戸城蓮池門）など名古屋城再建竣工（1957.6.13～）
1964 昭和39	二之丸名古屋大学校舎移転、二之丸愛知県体育館建設竣工
1975 昭和50	6月23日二之丸東鉄門（本丸東二之門跡に移動）西鉄門を重要文化財に指定
1978 昭和53	本丸不明門の復元、二之丸東庭園公開

## 第3章 遺構

### 1 調査の概要

現地表面の標高は約 13m であり、そこから調査を開始した 23Ab 区において戦国期溝の最も高い位置での検出面標高は 12.0m であった。これは江戸時代以降の整地等で削平された熱田層上での数値であり、少なくとも戦国期の生活面はさらに高かったことになる。

本書で記述する 23B 区は、標高 8.5m を主な検出面とすることが通常の遺跡調査と異なる。一般に、江戸時代以前の工法で造られる 4m 超の深度をもつ人為的な遺構は、井戸を除くと特殊な場合に限定される。そのため、すでに包含層が大規模に削平されていることが明らかである庁舎建物などの下層はこれまで調査の対象範囲には含まれてこなかった。

今回のような調査が計画されたのは、北側に隣接する旧調査範囲（愛知県三の丸庁舎地点、図 3 No.8）の東部にて、南北方向の大型の溝（SD602）が確認されていたことに端を発する。この遺構は、検出面の標高は 11.5m、深さは 4.3m、溝の上端で幅 11.2m と推定された戦国期の遺構であり、その規模や軸線方向が戦国期那古野城との関連性において注目されてきた。SD602 の南側延長部分の確認を企図した調査範囲・工程が 23B 区の調査である。

そして、23Aa 区下層調査中の 6 月 9 日、同遺構

の延長とみられる遺構の一端を確認し、さらにこれが西側へ屈曲する形状も確認されたことで、9 月以降の大成建設（株）による基礎構造物撤去工事はこの遺構の埋土を包含層として残す形で慎重に進められた。23B 区で確認された大溝（315SD）の検出面上端の標高は 10m と高く、調査区内では東西方向に 103m の範囲を確認した。

### 2 時期区分と主要遺構の概要

検出された遺構は戦国期の溝 1 条と井戸が 3 基、江戸時代では井戸と土坑がある（図 4）。

江戸時代については調査区のほぼ中央を境にして東西に 2 つの武家屋敷地が想定される範囲であり、井戸は西側の屋敷地（屋敷地 2）では 8 ～ 10 基、東側の屋敷地（屋敷地 1）では 1 基が見ついている。屋敷地 1 では、土坑や地下室の底面に近い下層部分が確認された。

### 3 溝（SD）

315SD（図 5 ～ 10）調査区北部で検出された大型の溝である。調査範囲内では東西方向に直線状に 103m の範囲を確認した。両端は調査区外へとさらに延びる。検出上端の標高は 10.1m、平均的な底面の

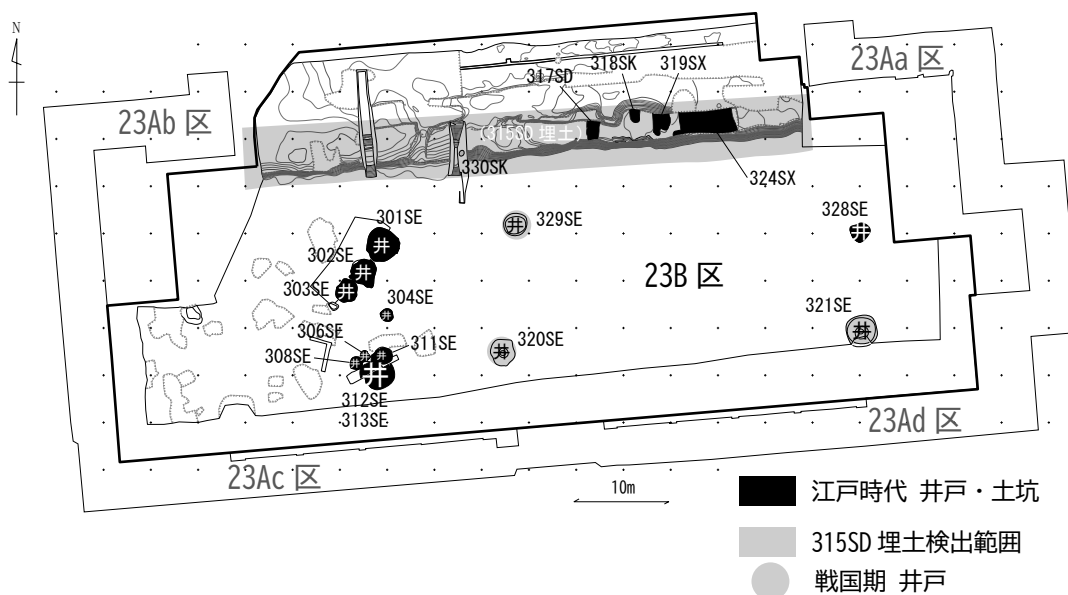


図 4 23B 区主要遺構配置図（縮尺 1/600）

標高は 7.3m、最深部では 6.86m であり、埋土として検出できた深さは 3.24m となる。横断面形状は逆台形を呈し、中心から反転すると上端の幅は検出高の位置で約 11m と推定される。

埋積の状況をまず埋土横断面から検討すると、概ね上から I 層（上層）：灰黄褐色砂質土のブロック状斑土、II 層（中層）：黄橙色シルトのブロックを少量含む斑土、III 層（下層）：黒～暗褐色砂混りシルト、粘土質土の互層、IV 層（最下層）：黄灰褐色砂質土斑土に分けられる（図 5）。

I 層は最も深いところで上端から 2.3m の厚さを測り、埋土の大部分を構成している。層状にブロック状斑土が北側から南側へ傾斜して堆積する状況が認められる（写真図版 1）。締まりは弱く、短期間に埋積した状況は調査範囲のどの地点でも同様の状態で認められた。おそらく、一連の作業として北側に存在した土塁を壊しながら大溝全体は短期間に埋められていった状況が推測される。

II 層は I 層よりもシルト質が多く、固く締まりがあり、大きめのブロック土の間を砂質土が充填している。最も厚いところで 85cm あり、中心よりも南側寄りに厚く堆積がみられる。

III 層は暗褐色の薄い層の互層となっており、縦断面（図 8,9,10, 写真図版 3-11）では、水平堆積の範囲と上下層に攪拌された箇所も所々にみられる。

IV 層は基盤層と同じ黄灰褐色シルトのブロック状斑土で構成されており、底面全体ではなく部分的に凹部としてみられた（図 8）。平面では判別しづらく当初は IV 層直上を溝底面と誤認した。

次に縦断面から堆積状況を検討する。今回の調査では I 層を除去した面で南北方向の土手（畦）状の堆積物を検出した（図 6,7, 写真図版 2-7～10）。幅は 60～80cm、高さは約 15～30cm、長さは II 層上端の幅程度のものが複数が認められ、およそ 3.0m 程度の間隔をおいて確認された。I 層が堆積する以前の最終段階に近い時期の遺構である。

そのほか、溝の下部壁面に貼り付くように置かれた葦簀（よしず）状の繊維質の痕跡を確認した（写真図版 3-1,3,4,5）。縦方向に組まれた葦のような素材とこれを編んだ紐状の痕跡が上下 2 段で側方に延びているのが確認できる。このような痕跡は溝の南側、北側の両方で確認された。また別北側壁面下部では、

壁面に沿うように棒状の木質遺物列が検出された（写真図版 3-6～8）。年代測定の結果、いずれも遺存状況に恵まれず、年代は得られなかった。

315SD は巨大な規模であったにもかかわらず、出土遺物は非常に少ない。I 層から近世の陶磁器片、II 層と III 層から大窯製品と鉄滓(M-2)が出土している。

#### 4 井戸 (SE)・土坑 (SK)

現地表面からの通常の調査では、名古屋城三の丸遺跡の井戸の掘削は一定の深度までに制限されることが多い。今回の場合では底面付近まで調査することが可能となった。

320SE（図 11, 表 3）調査区中央寄りの南部で検出された井戸である。直径約 2.7m、底面の標高は 6.76m である。大量の割石とともに鉄滓と 15 世紀末～16 世紀半ば頃の大窯製品が出土している。埋土より鍛造剥片（図 25）を検出しており、これらは戦国期に付近で鍛冶関連作業が行われていたことを示す資料である。

321SE（図 12）調査区東寄りの南端で検出された井戸である。掘りかたの直径は 3.5m 前後、井戸筒の直径は約 0.85m と推定される。ほぼ底面に近いと思われる標高 6.59m まで掘削した。正確な底面は未確認である。地震の影響を受けているとみられ、埋土堆積層は不自然に波打ち、壁面の崩落土が折り重なる状況も認められる。出土遺物には 2 点の硯が含まれるほか、16 世紀初めの大窯製品がある。

329SE 調査区中央付近北寄りの位置で検出された井戸であり、掘りかたの直径は約 2.4m、底面は未確認である。15 世紀末頃の大窯製品とフイゴ羽口が出土している。

330SK（図 11）大溝 315SD の底面で検出した土坑であり、直径は約 1.0m、深さ 53cm、底面の標高は 6.79m である。15 世紀末から 16 世紀前葉の大窯製品が出土している。315SD 構築以前にあった井戸の最下層と考えられる。

301SE（図 13）西側の屋敷地に設けられた井戸である。ほぼ同規模の掘りかたをもつ 3 基が並ぶ井戸の内では重複関係からみて最も新しく構築されたものである。掘りかたは直径 3.5m 前後と規模は比較的大型であり、内側の井戸筒は直径が約 1.2m、タタキ（三和土）製の井戸枠が用いられている。標高 6.01m

まで掘削を行った。底面は未確認である。出土遺物には瓦やタタキ片が多い。陶磁器類では 19 世紀中葉の瀬戸・美濃窯製品をはじめ、その他の産地製品もあり多彩となっている。近代の廃棄物も混じる。302SE (図 13) 西側の屋敷地に設けられた井戸である。ほぼ同規模の掘りかたをもつ 3 基が並ぶ井戸の内では重複関係からみて最初に構築されたと考えられる。掘りかたは直径 3.3 ~ 2.6m と不整円形を呈

し、井戸筒の直径は 0.9m 前後で構造物は特に認められない。隣の 303SE 掘削範囲の基盤層とよく似た白色の粘土質土で充填されている。標高 5.83m まで掘削を行った。底面は未確認である。注目されるのは、おそらく地震の影響により井戸筒の範囲が検出面と掘削した下方とでは垂直でなくズレが認められ、断面でも掘りかた範囲が上と下では曲がっていることが確認できることである。出土遺物には 17 世紀前葉の

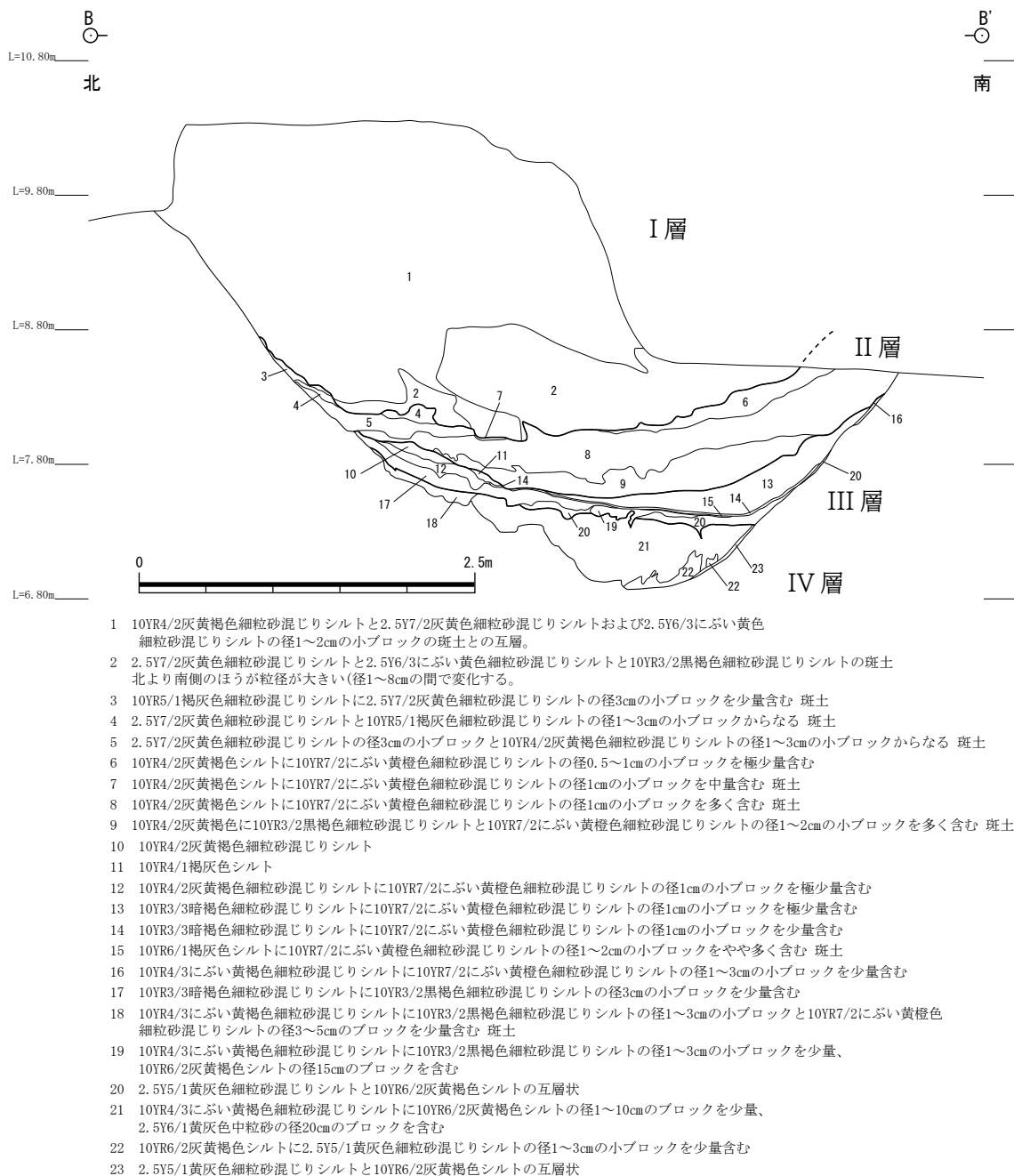
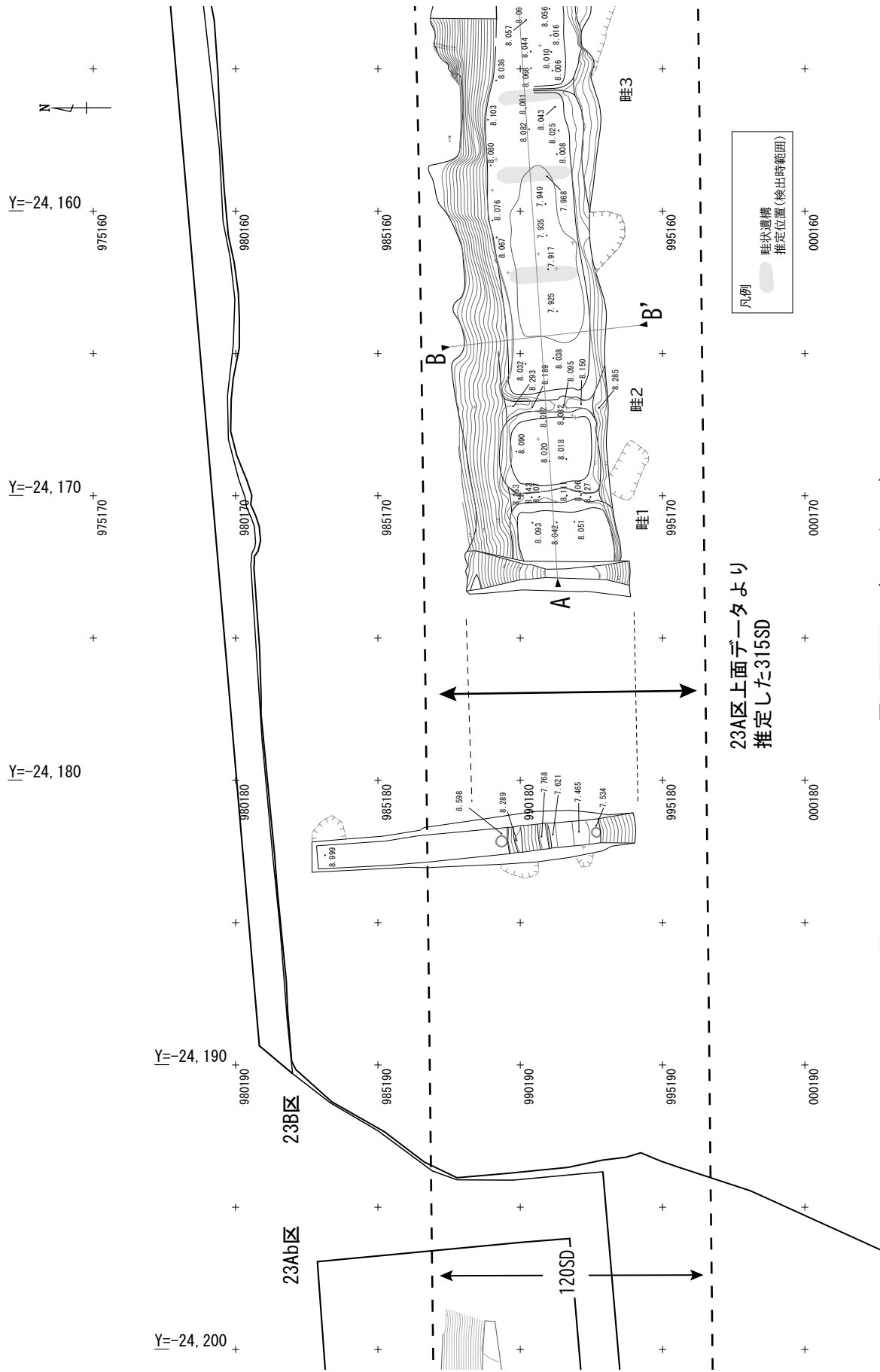


図 5 315SD 断面図 (横断面, 縮尺 1/50)



23A区上面データより  
推定した315SD

図 6 23B区 315SD I層下平面図 1 (S=1/200)

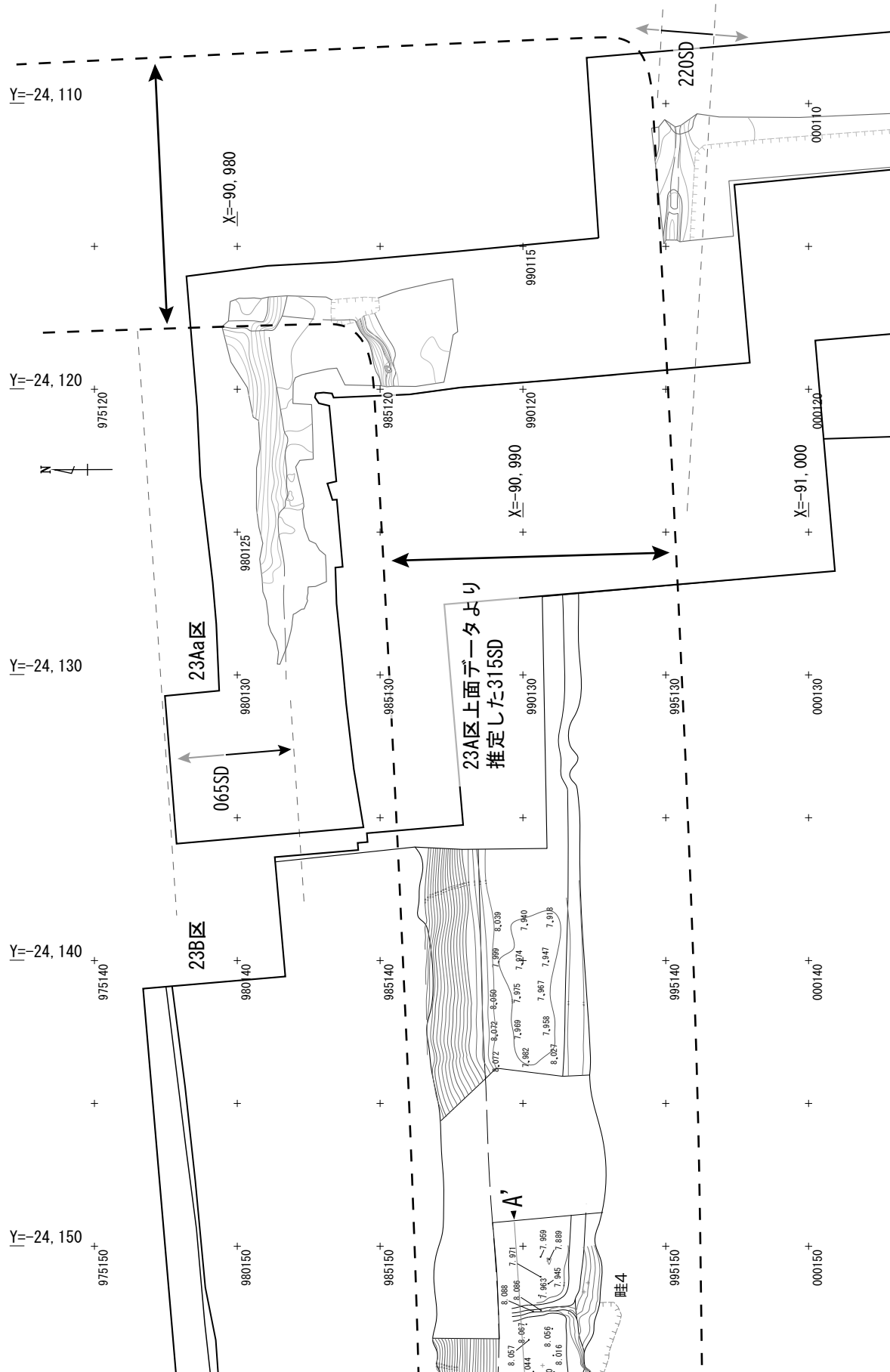


図 7 23B区 315SD I層下平面図 2 (S=1/200)

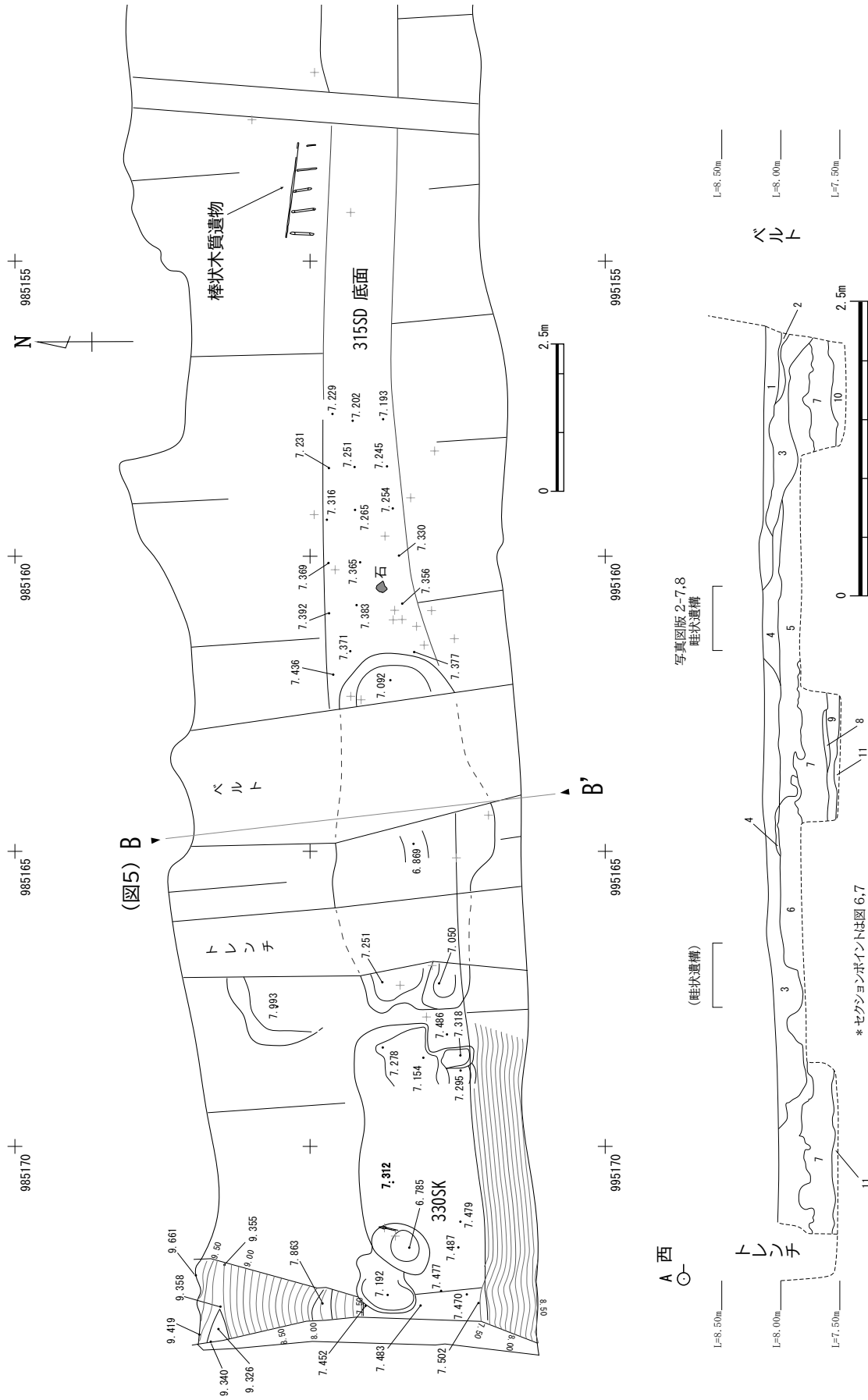


図 8 3155D 底面平面図 (縮尺 1/100) および下層埋土の縦方向断面図1 (縮尺 1/50)

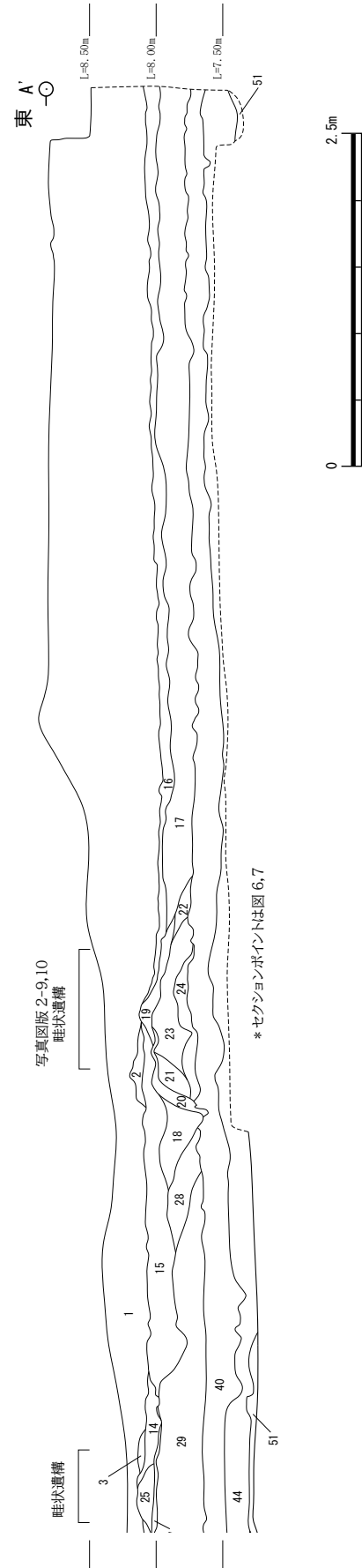
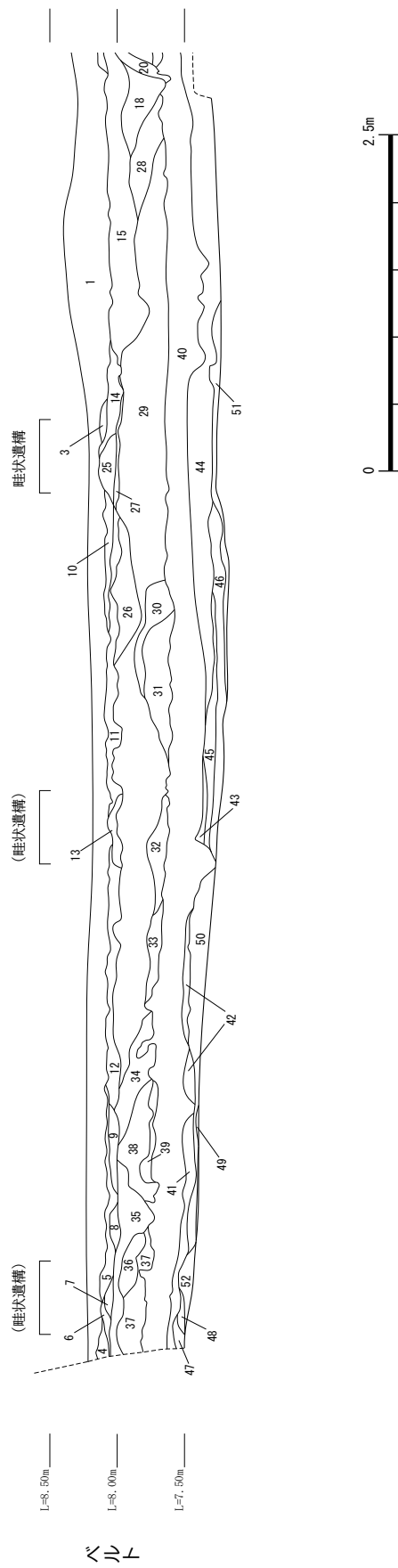


図 9 315SD 下層埋土の縦方向断面図 2 (縮尺 1/50)

縦方向断面図1 (バルトより西側) 土層注記

- 1 10YR4/2灰黄褐色細粒砂混じりシルトに7.5YR6/4にぶい褐色シルトの径1~3cmの小ブロックを多く含む
- 2 10YR5/1灰黄褐色細粒砂の径1~3cmの小ブロックを少量含む 斑土 横断面の1もしくは2層に相当する。
- 3 10YR4/2灰黄褐色細粒砂混じりシルト 上層に10YR6/1褐色シルトの水性堆積層あり
- 4 10YR3/3暗褐色細粒砂混じりシルトに2.5Y7/2灰黄色シルトの径1~3cmの小ブロックを極少量含む
- 5 10YR4/2灰黄褐色細粒砂混じりシルトに10YR3/2黒褐色シルトの径1~3cmの小ブロックを極少量含む
- 6 10YR4/2灰黄褐色細粒砂混じりシルトに2.5Y7/2灰黄色シルトの径10~15cmの小ブロックを多く含む

縦方向断面図2 (バルトより東側) 土層注記

- 1 10YR4/2灰黄褐色細粒砂混じりシルトに7.5YR6/4にぶい褐色シルトの径1~3cmの小ブロックを多く含む
- 2 5Y5/1灰黄褐色細粒砂の径1~3cmの小ブロックを少量含む 斑土 横断面の1もしくは2層に相当する。
- 3 10YR4/2灰黄褐色細粒砂混じりシルトに2.5Y7/2灰黄色シルトの径10~20cmの小ブロックを極少量含む
- 4 10YR4/3にぶい黄褐色シルト
- 5 径1~2cmの小ブロックを少量含む 斑土
- 6 10YR4/3にぶい黄褐色細粒砂混じりシルトの径1~2cmの小ブロックを極少量含む
- 7 10YR4/3にぶい黄褐色細粒砂混じりシルトの径1~2cmの小ブロックを極少量含む
- 8 10YR4/3にぶい黄褐色細粒砂混じりシルト
- 9 7.5YR4/2灰黄褐色細粒砂混じりシルト
- 10 10YR4/2灰黄褐色細粒砂混じりシルト
- 11 10YR4/2灰黄褐色細粒砂混じりシルトに10YR6/2灰黄褐色細粒砂混じりシルトの径1~5cmの小ブロックを少量含む
- 12 10YR4/2灰黄褐色シルトに2.5Y7/2灰黄色細粒砂混じりシルトの径1~5cmの小ブロックをやや多く含む
- 13 2.5Y6/1黄灰色中粒砂の上層に10YR4/2灰黄褐色細粒砂混じりシルトに2.5Y7/2灰黄色シルトの径3~5cmの小ブロックを含む層が存在する。
- 14 10YR4/2灰黄褐色細粒砂混じりシルト
- 15 10YR4/2灰黄褐色細粒砂混じりシルトに10YR6/2灰黄褐色細粒砂混じりシルトの径3~5cmの小ブロックをやや多く含む
- 16 10YR3/2黒褐色細粒砂混じりシルトに2.5Y7/2
- 17 10YR4/2灰黄褐色細粒砂混じりシルトに10YR4/2灰黄色シルトの径3~5cmの小ブロックをやや多く含む
- 18 10YR3/2黒褐色細粒砂混じりシルト
- 19 10YR4/2灰黄褐色細粒砂混じりシルトに2.5Y7/2灰黄色シルトの径1~3cmの小ブロックを少量含む
- 20 10YR4/2灰黄褐色細粒砂混じりシルト
- 21 10YR4/2灰黄褐色細粒砂混じりシルトに2.5Y7/2暗褐色シルトと2.5Y7/2灰黄色シルトの径1~3cmの小ブロックを少量含む
- 22 10YR4/2灰黄褐色細粒砂混じりシルト
- 23 10YR4/2灰黄褐色細粒砂混じりシルトに10YR3/3灰黄色シルトの径1~3cmの小ブロックを極少量含む
- 24 10YR3/3暗褐色細粒砂混じりシルト
- 25 10YR4/2灰黄褐色細粒砂混じりシルトに10YR6/2灰黄褐色細粒砂混じりシルトの径5~10cmの小ブロックを多く含む
- 26 10YR4/2灰黄褐色細粒砂混じりシルトに灰黄褐色シルト混じり中粒砂の径10~30cmの小ブロックを少量含むの径10~30cmの小ブロックを含む
- 27 10YR4/2灰黄褐色細粒砂混じりシルトに10YR6/2灰黄褐色細粒砂混じりシルトの径1~5cmの小ブロックを少量含む

- 7 10YR4/3にぶい黄褐色細粒砂混じりシルトに2.5Y7/2灰黄色シルトの径10cmの小ブロックを少量含む
- 8 10YR3/2黒褐色シルトと10YR5/3にぶい黄褐色細粒砂混じりシルトの互層に
- 9 10YR4/3にぶい黄褐色細粒砂混じりシルトに2.5Y7/2灰黄色シルトの径1~3cmの小ブロックを多く含む
- 10 10YR5/2灰黄褐色細粒砂混じりシルトと10YR5/1褐色シルトの互層
- 11 10YR7/3にぶい黄褐色シルト 地山
- 28 10YR5/2灰黄褐色細粒砂混じりシルトの径10~20cmの小ブロックに10YR6/2灰黄褐色細粒砂混じりシルトの径10cmの小ブロックを少量含む 斑土
- 29 10YR4/2灰黄褐色細粒砂混じりシルトに10YR6/2灰黄褐色シルト混じり中粒砂と
- 30 10YR4/2灰黄褐色細粒砂混じりシルトの径10~30cmの小ブロックをやや多く含む
- 31 10YR7/2にぶい黄褐色細粒砂混じりシルトと10YR7/2にぶい黄褐色細粒砂混じりシルトの径3~5cmの小ブロックを多く含む 斑土の間隙に10YR4/2灰黄褐色細粒砂混じりシルトが混じる 斑土
- 32 10YR7/2にぶい黄褐色細粒砂混じりシルトと10YR7/2にぶい黄褐色細粒砂混じりシルトの径3~5cmの小ブロックを多く含む 斑土の間隙に10YR4/2灰黄褐色細粒砂混じりシルトが混じる 斑土
- 33 7.5YR4/2灰黄褐色細粒砂混じりシルトに10YR6/2灰黄褐色細粒砂混じりシルトの径5~10cmの小ブロックを少量含む
- 34 10YR4/2灰黄褐色細粒砂混じりシルトに10YR3/2黒褐色細粒砂混じりシルトの径5~15cmの小ブロックを少量含む
- 35 10YR4/2灰黄褐色細粒砂混じりシルトに10YR6/2灰黄褐色細粒砂混じりシルトの径5~15cmの小ブロックを少量含む
- 36 10YR5/2灰黄褐色細粒砂混じりシルトと10YR6/2灰黄褐色細粒砂混じりシルトの径10~20cmの小ブロックからなる 斑土
- 37 10YR5/2灰黄褐色細粒砂混じりシルトの径10~20cmの小ブロックに10YR6/2灰黄褐色細粒砂混じりシルトの径10cmの小ブロックを少量含む 斑土
- 38 10YR4/3にぶい黄褐色細粒砂混じりシルト
- 39 7.5YR4/2灰黄褐色細粒砂混じりシルト
- 40 10YR3/2黒褐色シルトと10YR5/3にぶい黄褐色細粒砂混じりシルトの互層に
- 41 10YR4/2灰黄褐色細粒砂混じりシルトに10YR7/2にぶい黄褐色細粒砂混じりシルトの径3~5cmの小ブロックをやや多く含む
- 42 10YR4/2灰黄褐色細粒砂混じりシルトに10YR7/2にぶい黄褐色細粒砂混じりシルトの径3~5cmの小ブロックを少量含む
- 43 10YR4/3にぶい黄褐色細粒砂混じりシルト
- 44 10YR4/3にぶい黄褐色細粒砂混じりシルトに10YR7/2にぶい黄褐色細粒砂混じりシルトの径1~3cmの小ブロックを多く含む
- 45 10YR5/2灰黄褐色細粒砂混じりシルト
- 46 10YR5/2灰黄褐色細粒砂混じりシルトに10YR7/2にぶい黄褐色細粒砂混じりシルトの径1~3cmの小ブロックをやや多く含む
- 47 10YR4/3にぶい黄褐色細粒砂混じりシルト
- 48 10YR4/3にぶい黄褐色細粒砂混じりシルトに10YR7/2にぶい黄褐色細粒砂混じりシルトの径1~3cmの小ブロックを少量含む
- 49 10YR4/3にぶい黄褐色細粒砂混じりシルトに10YR7/2にぶい黄褐色細粒砂混じりシルトの径1~3cmの小ブロックをやや多く含む
- 50 10YR4/2灰黄褐色細粒砂混じりシルトに10YR7/2にぶい黄褐色細粒砂混じりシルトの径10~15cmの小ブロックをやや多く含む
- 51 10YR4/3にぶい黄褐色細粒砂混じりシルトに10YR7/2にぶい黄褐色細粒砂混じりシルトの径5~10cmの小ブロックをやや多く含む
- 52 10YR7/3にぶい黄褐色シルト 地山

図10 315SD 下層埋土の縦方向断面図1・2 土層注記

陶磁器類、焼塩壺などがある。

303SE (図 13) 西側の屋敷地に設けられた井戸である。ほぼ同規模の掘りかたをもつ 3 基が並ぶ井戸の内では 2 番目に構築されたと考えられる。掘りかたは直径 2.2 ~ 2.5m、井戸筒部分は直径 1.1m 程度であり、底面の標高は 6.35m である。こちらも地震の影響を受け、検出面と下方とは垂直につながらずズレが認められる。出土遺物には 17 世紀後半から 18 世紀の陶磁器類がある。

304SE (図 12) 西側の屋敷地に設けられた井戸である。303SE から 3.0m ほど南東側に位置する。掘りかたの直径は 1.4m、井戸筒部分は直径 0.85m、底面の標高は 7.35m である。底面は基盤層の白色粘質土層の中で掘削は止まっており井戸として機能していなかった可能性も考えられる。19 世紀前半の染付が出土している。

306SE (図 14) 西側の屋敷地に設けられた井戸であり、308SE と近接して設置されている。掘りかたの直径は 1.4m、井戸筒部分の直径は約 0.75m である。標高 7.28m まで掘削を行った。底面は未確認である。埋土には食物残渣と思われる貝・骨類が多く含まれていたため、この土壌から検出される動物遺体について同定等分析を委託した (第 4 章 1)。出土遺物では 17 世紀代の焼塩壺から土器鍋類、陶器人形や陶磁器類など 19 世紀前半までの様々なものが廃棄されている。

308SE (図 14) 西側の屋敷地に設けられた井戸であり、断面観察では 306SE に先行して掘削されていたことがわかる。掘りかたの直径は約 1.0m、中央が凹む底面の標高は 7.75m である。土坑断面形状からは井戸筒部分は判別できず、井戸としては機能せず、何らかの理由で途中で掘削を断念した可能性が考えられる。埋土土壌には貝類などの動物遺体が含まれるほか、出土遺物には 17 世紀後半から 18 世紀前半の陶磁器がある。

311SE (図 14) 西側の屋敷地に設けられた井戸である。掘りかたの直径は約 2.2m、平坦な底面は標高は 7.19m である。断面では井戸筒の範囲は確認できず、井戸として機能していなかった可能性も考えられる。出土遺物には瓦質火鉢がある。

305SX, 312SE, 313SE, 314SK (図 14, 15) 西側の屋敷地に設けられた井戸群である。検出当初は

大型の掘りかたをもつ 1 基の井戸 (305SX) として調査を始めたところ、複数の井戸が密集して重複して掘られていることが判明した。おそらく地震の影響を受けて検出面と下方は垂直には繋がっていない。かつ周囲の基盤層の壁面が広い範囲で内側へ崩落している状況が認められ、掘りかたと井戸筒の境界さえも不明瞭になっていた。これらは直径 3.3m の範囲の中で少なくとも 3 基が繰り返し掘削された状況を伝えている。312SE では標高 6.64m まで掘削を行った。底面は未確認である。313SE とした土壌から手づくね土師器皿 3 点や 17 世紀代焼塩壺、染付碗などが出土している。また、貝・骨類を採取している。

328SE (図 12) 東側の屋敷地の東寄りの位置に設けられた井戸である。掘りかたの直径は 1.9m、標高 6.51m まで掘削を行った。底面は未確認である。出土遺物では 17 世紀前葉から 18 世紀末頃までの陶磁器類、土器火鉢、ロクロ成形の土師器皿などがややまとまって出土している。

## 5 その他

324SX (図 16) 底面の標高は 9.75m、大溝 315SD が埋められた後、その上に構築された遺構の底面付近である。全体の形状は不明であるが、東西方向に幅は 5.7m、南北方向の検出長は 2.3m、中央にかけて若干凹み南東方向にわずかに傾斜していく底面から壁が緩やかに立ち上がる形状である。埋土は薄く幾層ものブロック状の土の堆積があり、特に下層には戦国期の溝埋土によく似た暗褐色土を多く含む斑土が認められる。出土遺物は 16 世紀末から 17 世紀前葉に比定される時期のまとまりがみられる。遺構の重複関係は大溝 315SD 廃絶後に改めて構築されたことを示しており、三之丸に武家屋敷が整備されていた比較早い段階に造られた地下室などの施設の可能性がある。また、想定される土塁の範囲には 315SD 構築以前の古い時期の生活面が再び地表に現れた段階があり、暗褐色土層の供給源のひとつとして想定される。

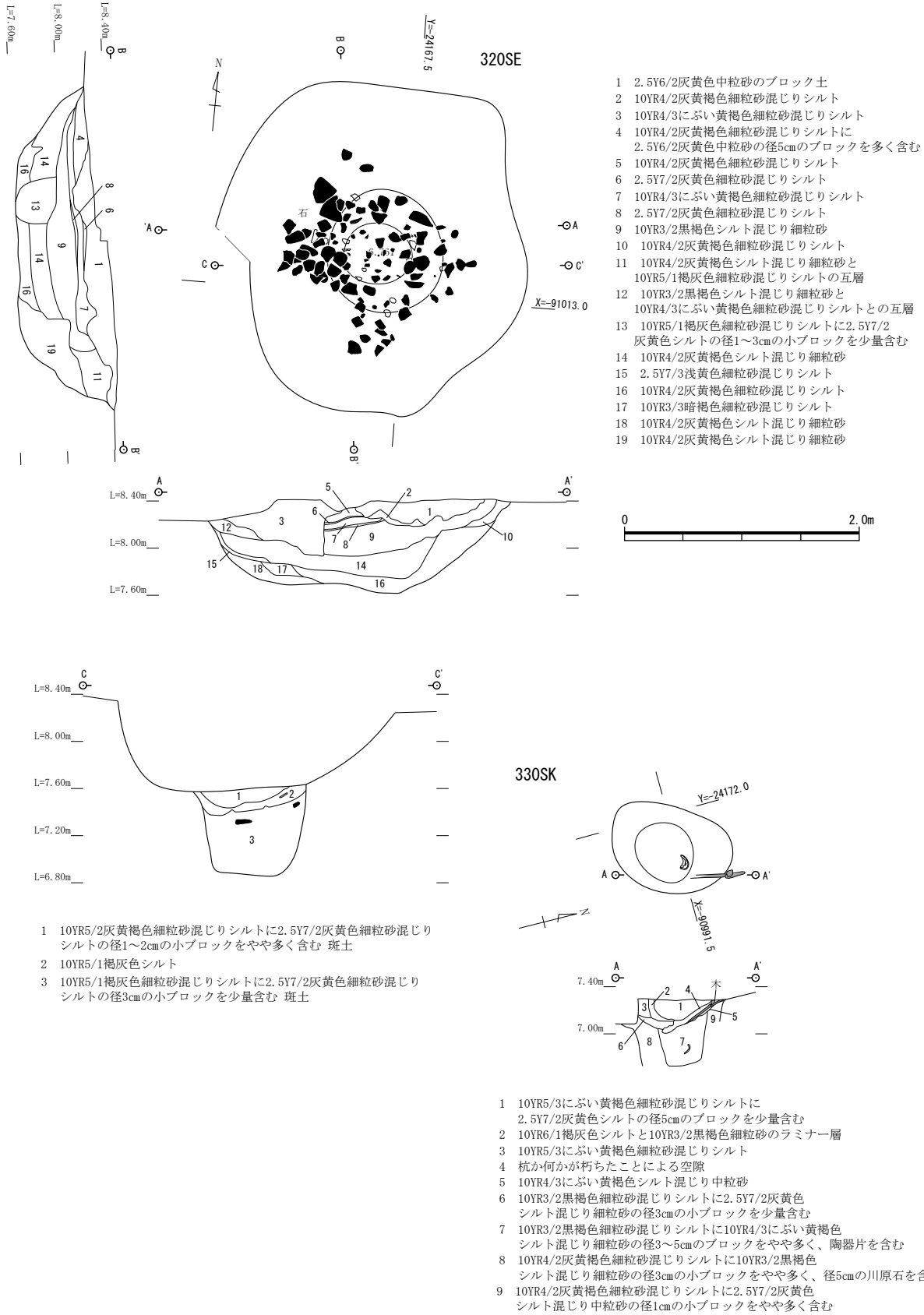


図 11 320SE,330SK 平面・断面図 (縮尺 1/50)



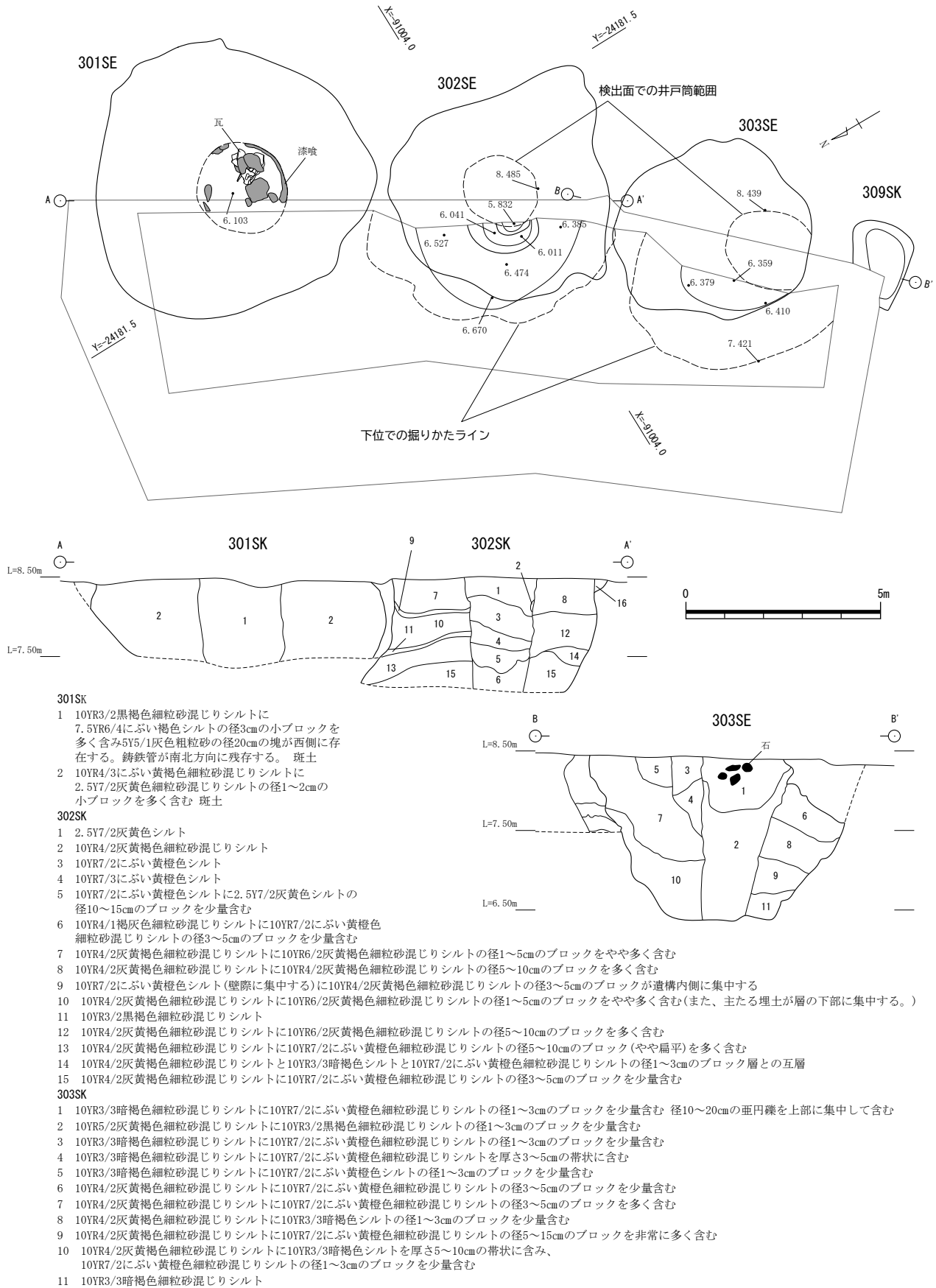


図 13 301SE,302SE,303SE 平面・断面図 (縮尺 1/70)

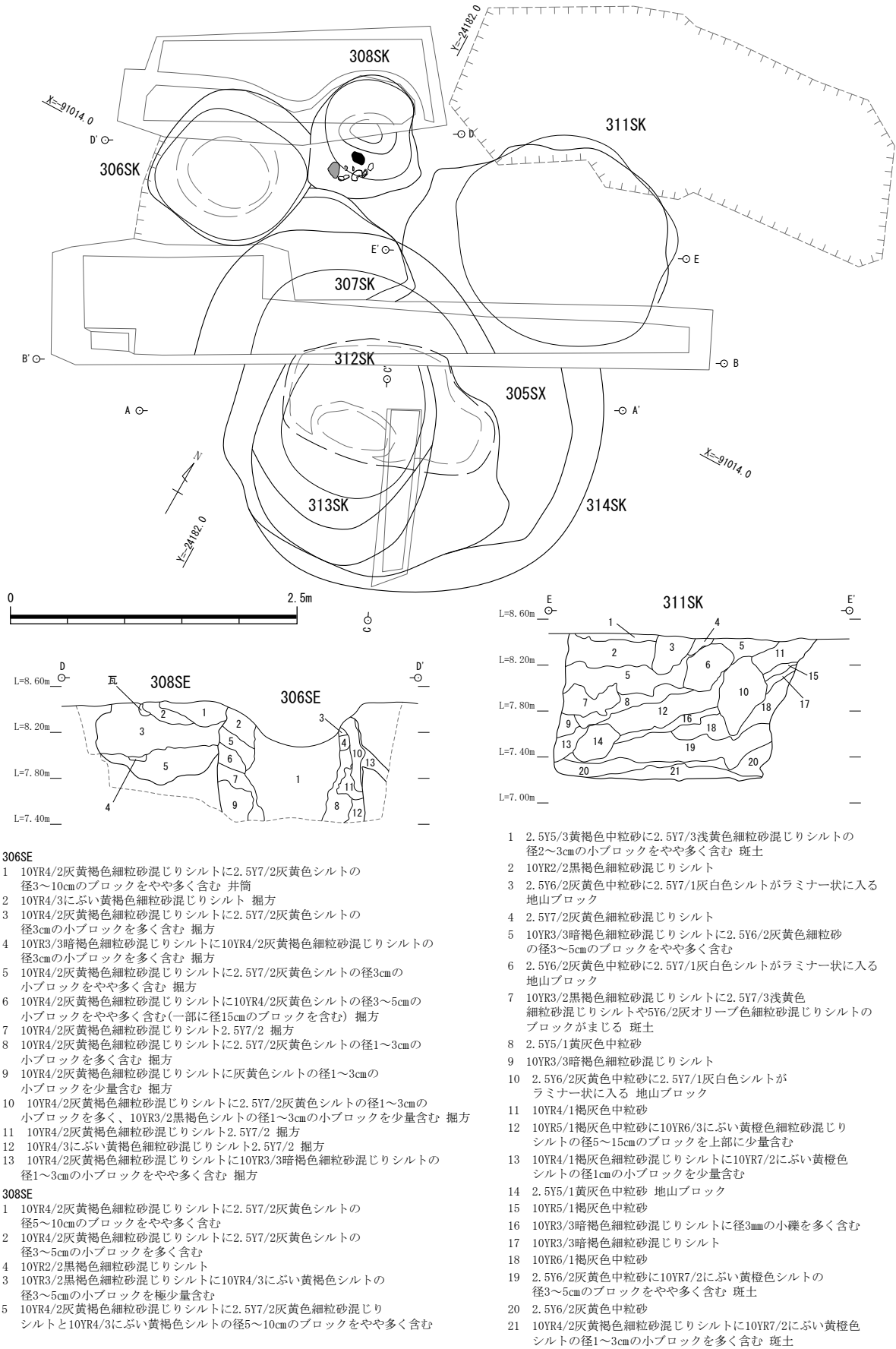


図 14 井戸集中範囲平面図・断面図 1 (縮尺 1/50)

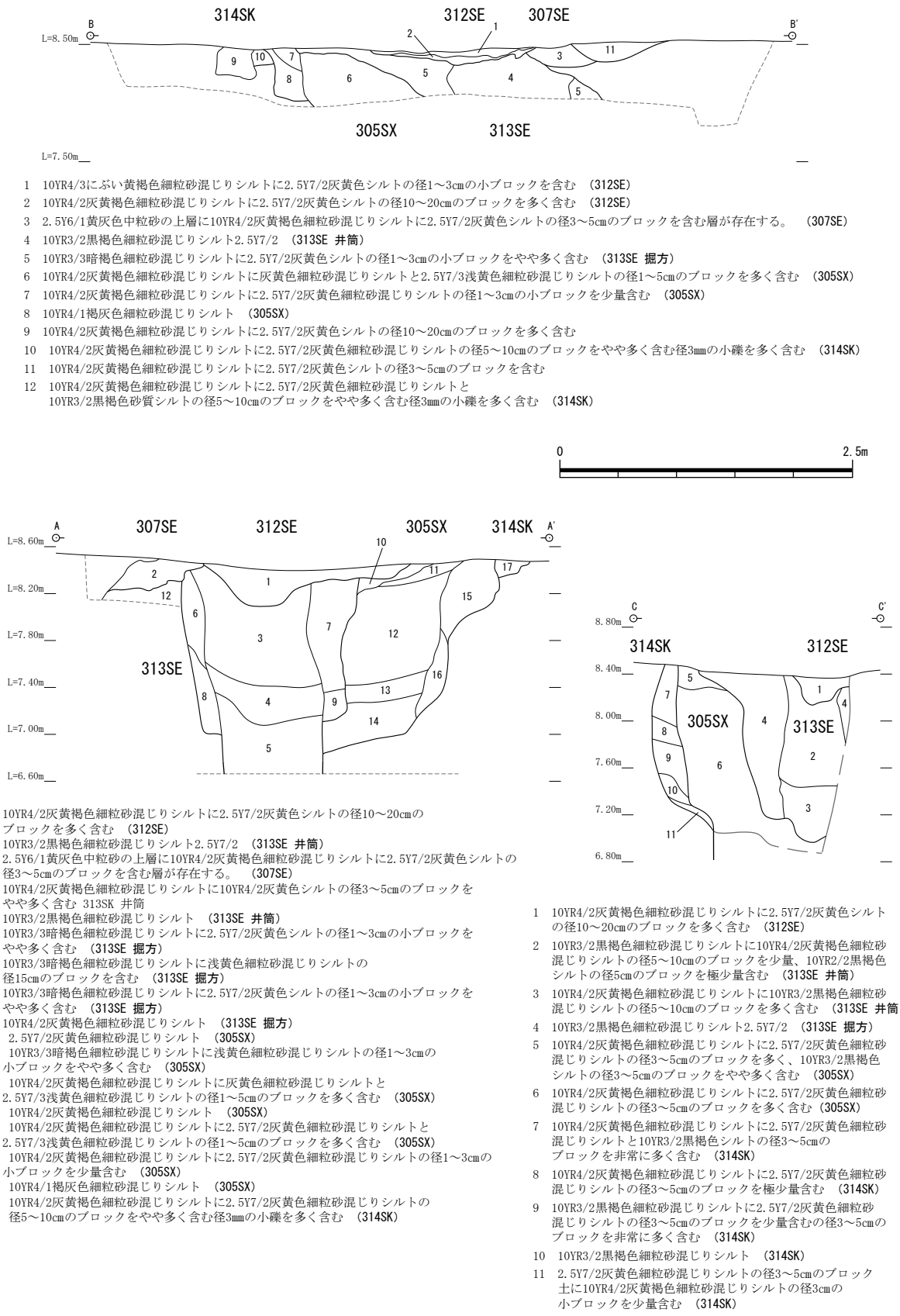
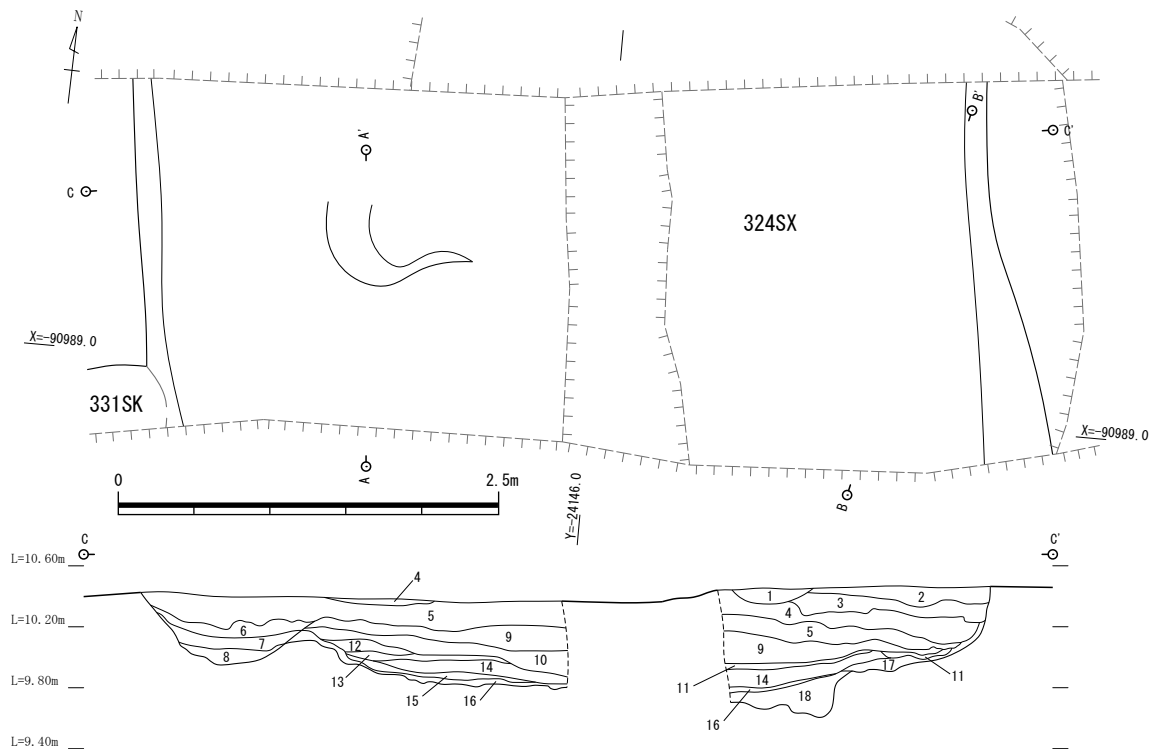
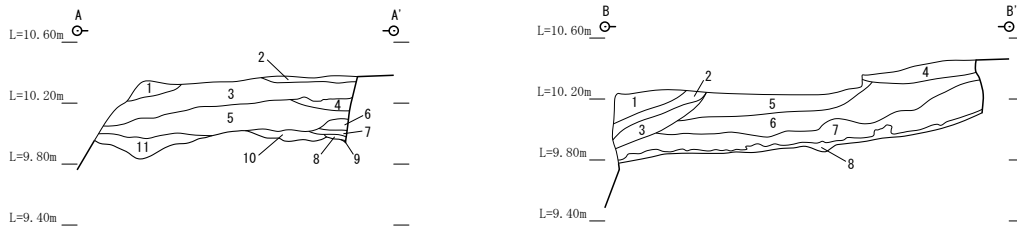


図 15 井戸集中範囲断面図 2 (縮尺 1/50)



- 1 10YR5/2灰黄褐色細粒砂混じりシルトに2.5Y7/2灰黄色細粒砂混じりシルトの径1~2cmの小ブロックをやや多く含む 斑土
- 2 10YR5/1褐灰色シルト
- 3 10YR5/1褐灰色細粒砂混じりシルトに2.5Y7/2灰黄色細粒砂混じりシルトの径3cmの小ブロックを少量含む 斑土
- 4 2.5Y7/2灰黄色細粒砂混じりシルトと10YR5/1褐灰色細粒砂混じりシルトの径1~3cmの小ブロックからなる 斑土
- 5 2.5Y7/2灰黄色細粒砂混じりシルトの径3cmの小ブロックと10YR4/2灰黄褐色細粒砂混じりシルトの径1~3cmの小ブロックからなる 斑土
- 6 10YR4/2灰黄褐色シルトに10YR7/2にぶい黄橙色細粒砂混じりシルトの径0.5~1cmの小ブロックを極少量含む
- 7 10YR4/2灰黄褐色シルトに10YR7/2にぶい黄橙色細粒砂混じりシルトの径1cmの小ブロックを中量含む 斑土
- 8 10YR4/2灰黄褐色シルトに10YR7/2にぶい黄橙色細粒砂混じりシルトの径1cmの小ブロックを多く含む 斑土
- 9 10YR4/2灰黄褐色に10YR3/2黒褐色細粒砂混じりシルトと10YR7/2にぶい黄橙色細粒砂混じりシルトの径1~2cmの小ブロックを多く含む 斑土
- 10 10YR4/2灰黄褐色細粒砂混じりシルト
- 11 10YR4/1褐灰色シルト
- 12 10YR4/2灰黄褐色細粒砂混じりシルトに10YR7/2にぶい黄橙色細粒砂混じりシルトの径1cmの小ブロックを極少量含む
- 13 10YR3/3暗褐色細粒砂混じりシルトに10YR7/2にぶい黄橙色細粒砂混じりシルトの径1cmの小ブロックを極少量含む
- 14 10YR3/3暗褐色細粒砂混じりシルトに10YR7/2にぶい黄橙色細粒砂混じりシルトの径1cmの小ブロックを少量含む
- 15 10YR6/1褐灰色シルトに10YR7/2にぶい黄橙色細粒砂混じりシルトの径1~2cmの小ブロックをやや多く含む 斑土
- 16 10YR4/3にぶい黄褐色細粒砂混じりシルトに10YR7/2にぶい黄橙色細粒砂混じりシルトの径1~3cmの小ブロックを少量含む
- 17 10YR3/3暗褐色細粒砂混じりシルトに10YR3/2黒褐色細粒砂混じりシルトの径3cmの小ブロックを少量含む
- 18 10YR6/1褐灰色細粒砂混じりシルトに10YR3/2黒褐色細粒砂混じりシルトの径1~3cmの小ブロックを多く、10YR7/2にぶい黄橙色細粒砂混じりシルトの径3~5cmのブロックをやや多く含む 斑土



A-A' 断面注記

- 1 10YR3/2黒褐色細粒砂混じりシルト
- 2 2.5Y7/2灰黄色細粒砂混じりシルトと10YR5/1褐灰色細粒砂混じりシルトの径1~3cmの小ブロックからなる 斑土 東西断面の4層
- 3 2.5Y7/2灰黄色細粒砂混じりシルトの径3cmの小ブロックと10YR4/2灰黄褐色細粒砂混じりシルトの径1~3cmの小ブロックからなる 斑土 東西断面の5層
- 5 10YR4/2灰黄褐色細粒砂混じりシルト 東西断面の10層
- 4 10YR4/2灰黄褐色に10YR3/2黒褐色細粒砂混じりシルトと10YR7/2にぶい黄橙色細粒砂混じりシルトの径1~2cmの小ブロックを多く含む 斑土 東西断面の9層
- 6 10YR3/3暗褐色細粒砂混じりシルトに10YR7/2にぶい黄橙色細粒砂混じりシルトの径1cmの小ブロックを極少量含む 東西断面の13層
- 7 10YR3/3暗褐色細粒砂混じりシルトに10YR7/2にぶい黄橙色細粒砂混じりシルトの径1cmの小ブロックを少量含む 東西断面の14層
- 8 10YR6/1褐灰色シルトに10YR7/2にぶい黄橙色細粒砂混じりシルトの径1~2cmの小ブロックをやや多く含む 斑土 東西断面の15層
- 9 10YR4/3にぶい黄褐色細粒砂混じりシルトに10YR7/2にぶい黄橙色細粒砂混じりシルトの径1~3cmの小ブロックを少量含む 東西断面の16層
- 10 10YR4/3にぶい黄褐色細粒砂混じりシルト
- 11 10YR5/2灰黄褐色細粒砂混じりシルト

B-B' 断面注記

- 1 10YR4/2灰黄褐色細粒砂混じりシルトに10YR7/2にぶい黄橙色細粒砂混じりシルトの径1cmの小ブロックを少量含む
- 2 10YR4/2灰黄褐色細粒砂混じりシルト
- 3 10YR4/2灰黄褐色細粒砂混じりシルトに10YR7/2にぶい黄橙色細粒砂混じりシルトの径1~2cmの小ブロックをやや多く含む
- 4 10YR5/1褐灰色シルト 東西断面の2層
- 5 10YR5/1褐灰色細粒砂混じりシルトに2.5Y7/2灰黄色細粒砂混じりシルトの径3cmの小ブロックを少量含む 東西断面の3層
- 6 2.5Y7/2灰黄色細粒砂混じりシルトと10YR5/1褐灰色細粒砂混じりシルトの径1~3cmの小ブロックからなる 東西断面の4層
- 7 2.5Y7/2灰黄色細粒砂混じりシルトの径3cmの小ブロックと10YR4/2灰黄褐色細粒砂混じりシルトの径1~3cmの小ブロックからなる 東西断面の5層に相当
- 8 10YR3/2黒褐色シルト

図 16 324SX 平面・断面図 (縮尺 1/50)

## 第4章 遺物

### 1 戦国期以前の出土遺物

#### (1) 古墳時代・奈良時代 (図 17)

包含層から、または戦国期以降の遺構に混入という形で検出した資料である。円筒埴輪 (7)、須恵器では猿投窯製品とみられる高杯脚部 (8)、蓋 (1)、陶白 (4)、甕または壺の小片 (2,3,5,6,) がある。

#### (2) 戦国期

315SD (図 18) 陶器・土器が II 層、III 層から出土している。天目茶碗 (9 ~ 13) はいずれも 15 世紀末から 16 世紀前葉 (大窯 I 期) に比定されるもので時期的なまとまりがある。数点に被熱の痕跡がみられる。錆釉播鉢では大窯 I 期 (24) のほか 16 世紀の後葉にかかる大窯 III 期 (25,26) の資料が II 層から出土している。大窯 I 期では鉄錆釉甕 (29) がある。皿類では東濃型山茶碗 (20)、ロクロ成形土師器 (21)、陶器皿 (14 ~ 19) では焼締、錆釉灯明皿がある。常滑窯産大窯 (30) は 15 世紀後半 (常滑窯 10 型式)。江戸時代以降の資料は I 層など廃絶時の混入と思われる。そのほか椀型滓など鍛冶関連遺物が採取されている (M-2, 表 3)。

320SE (図 22) 天目茶碗 (143)、灰釉皿 (144)、錆釉播鉢 (138 ~ 142)、焼締灯明皿 (145) など大窯第 1,2 段階に比定される。(152,153) は鉄釉徳利。薄く鉄釉が施された大皿 (151) は、大窯第 3 段階前半に位置付けられる資料である。土師器皿では手づくね (146)、ロクロ成形 (147)、羽付鍋 (148)、内耳鍋 (149,150) がある。土器・陶器の出土量は少なく、この遺構からは鉄滓と鍛造剥片、大量の割石が出土している。これら鍛冶関連遺物は 16 世紀中葉の一括廃棄資料と位置付けられる。

321SE (図 23) 総釉の鉄釉丸皿 (154)、錆釉・鉄釉二重掛けする徳利 (155)、錆釉播鉢 (156) がある。15 世紀末から 16 世紀後葉の資料である。硯 (S-1,2) はそれぞれ幅が 8.2cm、9.1cm のやや大型の方形のものである。

329SE (図 24) 天目茶碗 (192,193)、灰釉縁釉小皿 (194)、焼締灯明皿 (195)、錆釉播鉢 (196 ~ 198) など 15 世紀末から 16 世紀前葉の資料がある。そのほか使用痕が認められるホルンフェルス円礫

(S-3) やフイゴの羽口 (199,200) があり、ここからも鉄滓が出土している (表 3)。

330SK (図 24) 315SD 構築に先行する遺構と考えられるもので、錆釉播鉢 (198)、灰釉丸皿または端反皿 (202)、鉄釉・灰釉二重掛する徳利 (203) がある。大窯第 1,2 段階、16 世紀半ば頃の資料である。鉄滓はここでも出土している (M-1, 表 3)。

包含層出土遺物 (図 24) 天目茶碗 (204,208) は 16 世紀初め (大窯 Ia 期)、錆釉仏具 (205) は古瀬戸後期の 15 世紀後半に位置付けられる。

### 2 江戸時代以降の出土遺物

#### a. 土器・陶磁器類

301SE (図 19,20) 西側の屋敷地の井戸出土資料である。大量の瓦や井戸枠に使われたタタキ片と陶磁器では大型の器種がやや目立つ。馬の目皿 (33) は高台内に「表」の墨書がある。輪高台の織部向付 (34) は把手部分を欠損している。鉄釉播鉢 (35) 内面は使用による摩滅が著しい。青花皿 (36)、瀬戸窯の染付徳利 (37)、常滑窯産大甕 (39)、鉄釉甕 (40)、鉄釉火鉢 (41) などがあり、18 世紀末から 19 世紀初めを中心とする資料である。大型の鉢底部 (38) や大型の盥状の盤は鉄釉が厚くかかる。近代の資料の可能性もある。

302SE (図 20) 西側の屋敷地の井戸 (掘りかた) の出土資料である。肥前磁器小坏 (43)、肥前陶器京焼風碗 (46)、瀬戸・美濃窯産鉄釉碗 (44)、笠原鉢 (48) があり、土器では焼塩壺 (45)、底部に穿孔のあるロクロ成形土師器皿 (47) がある。17 世紀代を中心とした資料である。

303SE (図 20) 西側の屋敷地の井戸出土資料である。京焼の碗 (49) は上絵付が施されている。(50) と平碗 (51) は産地不明、(52) は瀬戸・美濃窯製品。肥前染付碗 (53)。土師器皿 (54)。

305SX (図 20)・311SE (図 21) 西側の屋敷地の井戸群の出土資料である。半球形内耳鍋 (57) と手づくね土師器皿 (58) がある。戦国期の井戸が重複している可能性も考えられる。(95) は瓦質火鉢である。

306SE (図 20,21) 西側の屋敷地の井戸出土資

料である。尾呂茶碗(59～62)、妬器広東碗(64)、肥前染付では碗(65,66,69)、猪口(68)がある。鉄釉播鉢(70)、鍔釉播鉢(71)は産地不明。陶器人形(73)は京焼の可能性ある。鉄釉で布袋の着物を彩色。土器では焼塩壺(72)、内耳鍋(74,75)、焙烙(76)、一部に被熱の痕跡がみられる器種不明棒状製品(77～79)がある。五徳のような使用法であろうか。以上の時期は判別できるものでは17世紀代から19世紀前半までの幅広い年代が示される。埋土土壌には貝や骨など動物遺体が多く含まれており(第5章1)、この付近に台所や炊事場が固定的に存在していた可能性も考えられる。

308SE(図21) 西側の屋敷地の井戸出土資料である。瀬戸・美濃窯産の灰釉皿(80)、鉄釉筒形碗(81)、鉄釉播鉢(87)では17世紀後半の年代が示される。磁器では肥前染付碗(82～84)、上絵付碗(85)、染付鉢(86)などがあり、土器では焼塩壺蓋と身(88,89)、内耳鍋(90)、ロクロ成形土師器皿(91～94)がある。

313SE(図21) 西側の屋敷地の井戸出土資料である。肥前磁器染付碗(96,97)、瀬戸・美濃窯産陶器碗(98)は外面鉄釉、内面灰釉の掛け分け碗がある。土器では(99～102)の手づくね土師器皿、

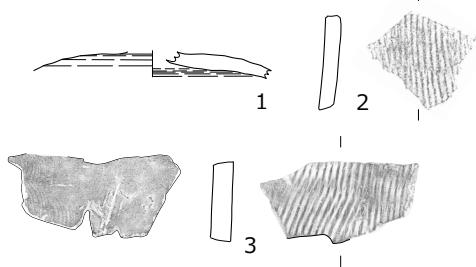
焼塩壺(103)がある。

317SD(図21) 東側の屋敷地内に位置する。315SDの埋土の上からの掘りこまれた遺構で、肥前磁器染付皿(104)、碗(105)、瀬戸・美濃窯産の鍔釉播鉢(109)、鉄釉甕(108)、土器ではロクロ成形土師器皿(106,107)がある。播鉢の時期は17世紀初めに比定される。

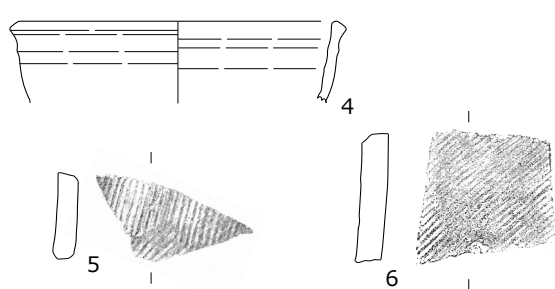
318SK(図22) 東側の屋敷地内に位置する。315SDの廃絶後、埋土の上から掘りこまれた遺構で、瀬戸・美濃窯産では天目茶碗(110)、黄瀬戸釉や鉄釉、練り込みの丸碗(112,113,114)、鉄釉播鉢(116)、灰釉輪禿皿(118)、鬘皿(119)がある。ほか肥前京焼風碗(111)、中国陶磁の白磁型押皿(115)、ロクロ成形土師器皿(120～123)がある。17世紀末頃から18世紀中葉の資料である。

319SX(図22) 東側の屋敷地内に位置する。315SDの廃絶後、埋土の上から掘りこまれた土坑資料である。瀬戸・美濃窯の陶器では碗(124)、皿では志野丸皿(125,130)、鉄絵皿(126,129)、向付(128)、灰釉反り皿(127)、鉄釉徳利(133)、鍔釉播鉢(131,137)がある。磁器では青花(132)、肥前染付碗(134)、土器は内耳鍋(135)がある。16世紀末頃から17世紀前葉に位置付けられる。

315SD



320SE



308SE



324SX

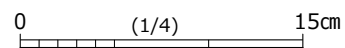
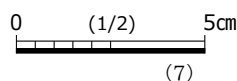


図17 土器・陶磁器・石製品実測図1(縮尺1/4,一部1/2)

324SX (図 23) 東側の屋敷地内に位置する。315SD の廃絶後、埋土の上から掘りこまれた遺構である。瀬戸・美濃窯の陶器では志野丸皿 (157)、厚く長石釉の掛かるひだ皿 (158)、灰釉輪禿皿 (159)、錆釉播鉢 (163,164) などがある。備前焼締大皿 (165) は 17 世紀前葉に位置付けられる。磁器では肥前初期伊万里の染付皿 (160)、青花皿 (161) がある。(162) は土鈴である。16 世紀末から 17 世紀前葉を中心とした資料である。

328SE (図 23,24) 東側の屋敷地の井戸出土資料である。瀬戸・美濃窯産陶器では、灰釉碗 (167)、尾呂茶碗 (166,169)、御室茶碗 (168)、鉄釉灯明皿 (173,174)、蓋 (176)、蓋物身 (177)、鉄絵鉢 (178)、鉄釉徳利 (179)、鉄釉播鉢 (180)、常滑窯産の火鉢 (181,182) など 18 世紀前葉を中心に一部 18 世紀後葉にかかる資料が含まれる。肥前染付碗 (171)、唐津刷毛目輪禿皿 (175) は 17 世紀後半に位置付けられる。土器では、ロクロ成形土師器皿 (183～189)、茶釜型鍋 (190)、焙烙 (191) などがある。

包含層出土遺物 (図 24) 瀬戸・美濃窯産の灰釉碗 (206,207,209,210)、摺絵蓋物 (215)、鉄釉汁次 (217)、植木鉢 (216) がある。(214) は常滑窯産の焼締急須、肥前では京焼風陶器碗 (211)、磁器染付碗 (212) がある。徳利 (218) は、細かく貫入が入る灰釉が施された白く緻密な胎土である。産地不詳。(219,220) は近代の磁器湯呑。旧陸軍に関連する資料である。

#### b. 瓦類 (図 25,26, 表 2)

掲載図の瓦類は全て西側の屋敷地井戸 301SE 出土資料である。(301～303) は鬼瓦の一部である。家紋瓦 (304,305) は、屋敷地居住者の渡辺家家紋「三星一文字」の一部である。唐草文の軒棧瓦 (306,307) は「東海系」と分類されるタイプで名古屋城三の丸遺跡で広く使用されている。刻印があり、丸に「一」、丸に「三」と認められる。丸瓦 (308) にも刻印があり、横印で「三州棚尾壱兵衛」の名が認められる。そのほか刻印のある資料については表 2 に示す通りである。(309) は丸瓦の形状に近い用途不明の製品であり、無釉の焼締、全体は赤褐色を呈する。外面は型押し成形により唐草をベースとしたような文様が陽刻で表現されている。

23B 区出土瓦で認められた刻印は、7 タイプが認められる (表 2)。「棚尾壱兵衛」印は全て横印である。23A 区出土資料では横印・縦印の両者があり、部位は横印は丸瓦凸面、縦印は平瓦端面である。

#### c. 金属製品 (図 25, 表 3)

出土した金属製品は表 3 で示した通りである。鉄滓、椀型滓は主に戦国期の資料と考えられる。椀型滓 (M-1,2) と江戸時代武家屋敷地で出土した寛永通宝 (拓本 M-3.5,7) を図化掲載した。金属製品のうち、鍛冶関連遺物については今回の調査地点での重要な視点を与える資料であり、次に別途詳述する。

#### 【中世・近世陶磁器の時期区分参考資料】

##### 瀬戸・美濃窯製品

井上喜久男, 1992, 『尾張陶磁』ニューサイエンス社  
… (大窯 I～V)

2007, 『愛知県史 別編 窯業 2』中世・近世 瀬戸系  
… (古瀬戸前期～後期)

… (大窯 1～4)

… (連房式登窯第 1～11 小期)

江戸前期：連房第 1～第 4 小期

江戸中期：連房第 5～第 7 小期

江戸後期：連房第 8～第 11 小期

##### 常滑窯製品

2012, 『愛知県史 別編 窯業 3』中世・近世 常滑系

315SD

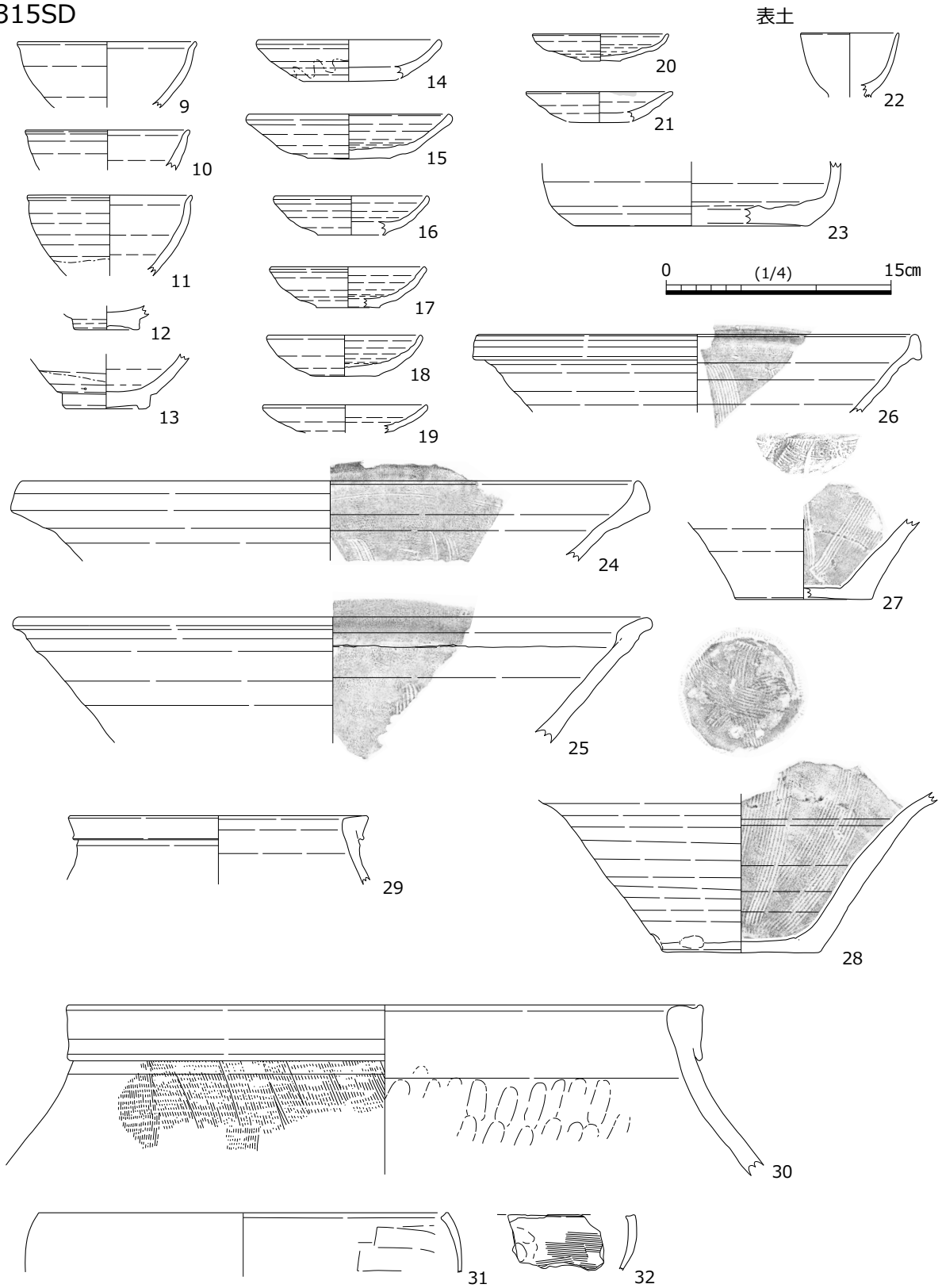


図 18 土器・陶磁器・石製品実測図 2 (縮尺 1/4)

301SE

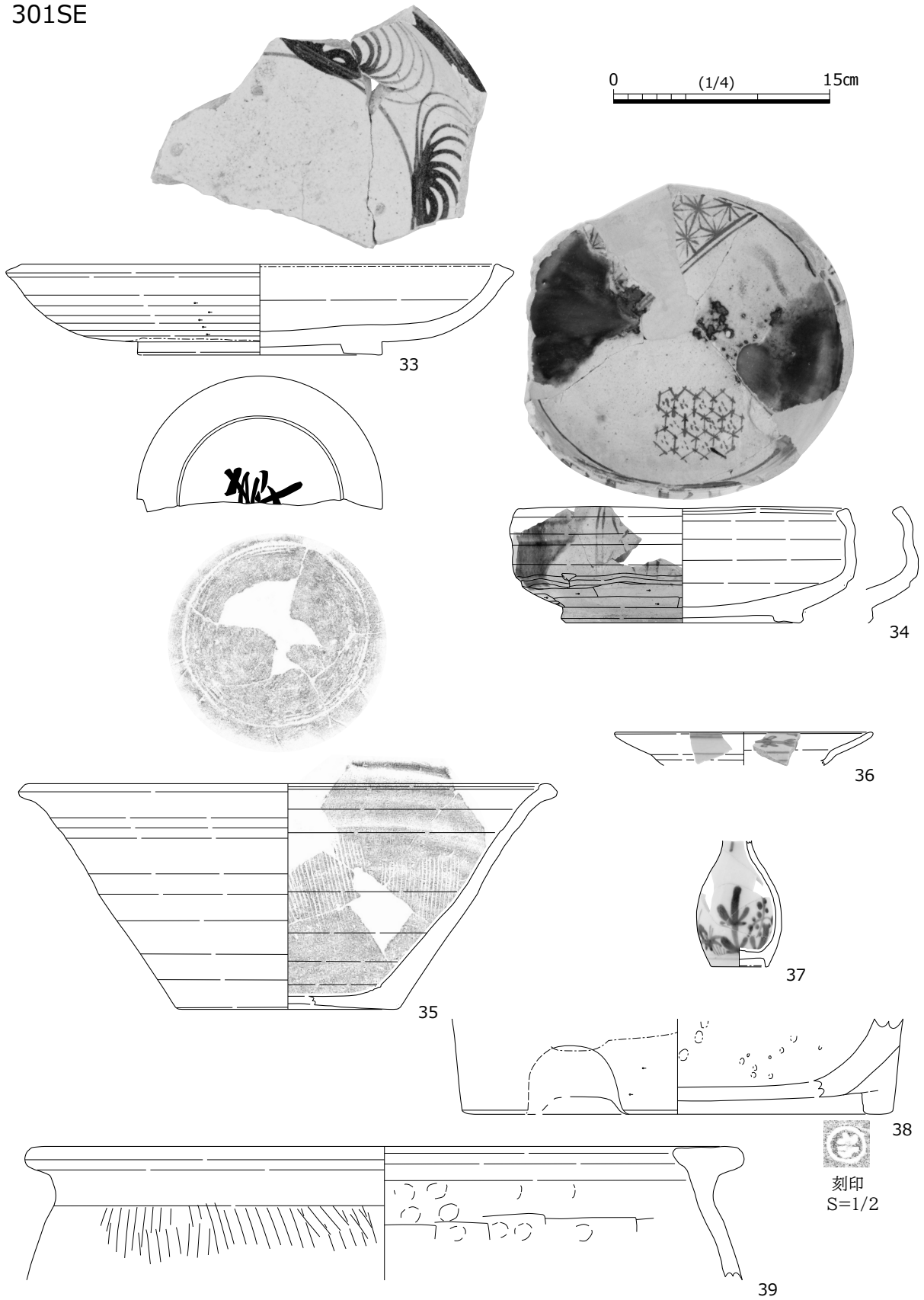


図 19 土器・陶磁器・石製品実測図 3 (縮尺 1/4, 一部 1/2)

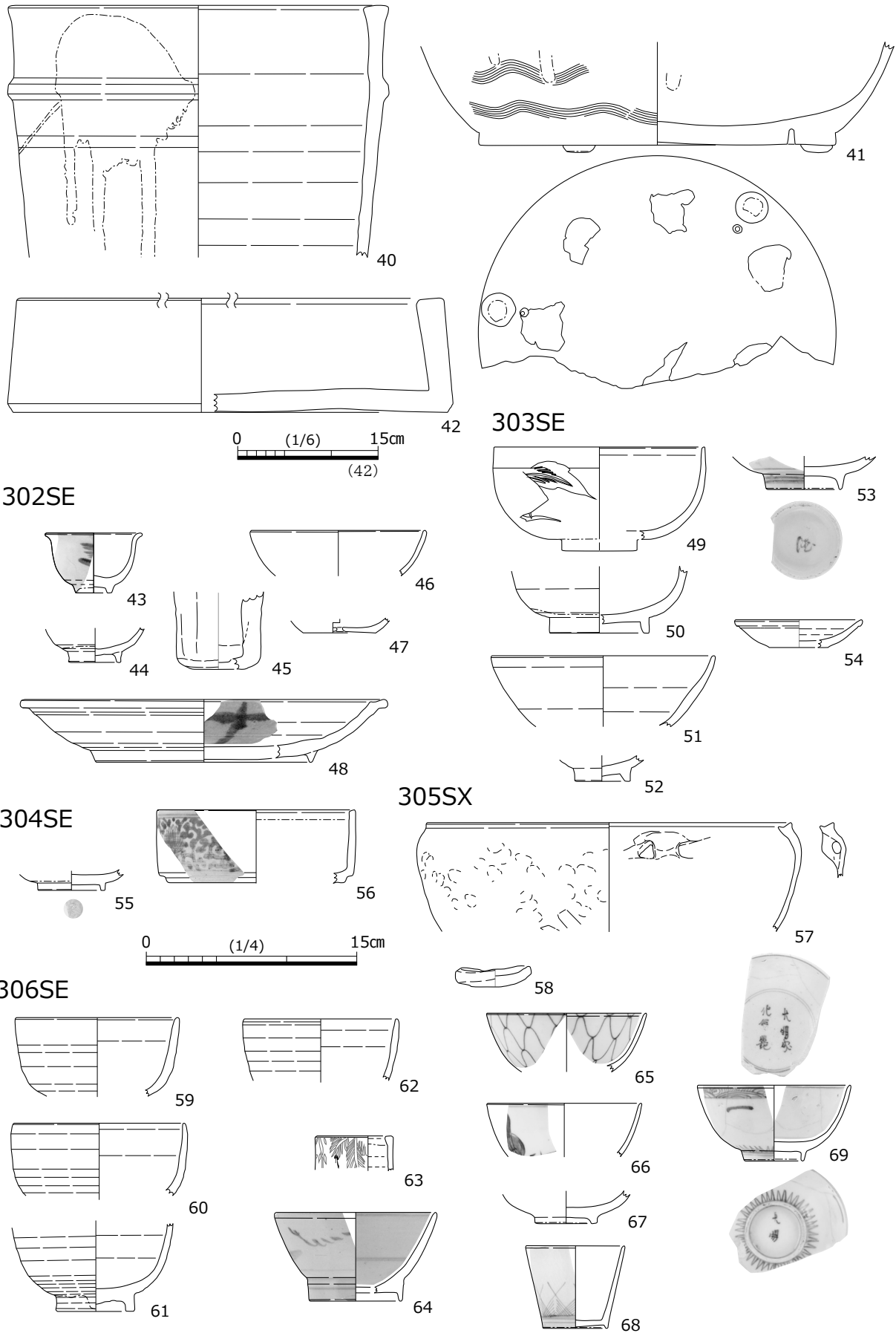


図 20 土器・陶磁器・石製品実測図 4 (縮尺 1/4, 一部 1/6)

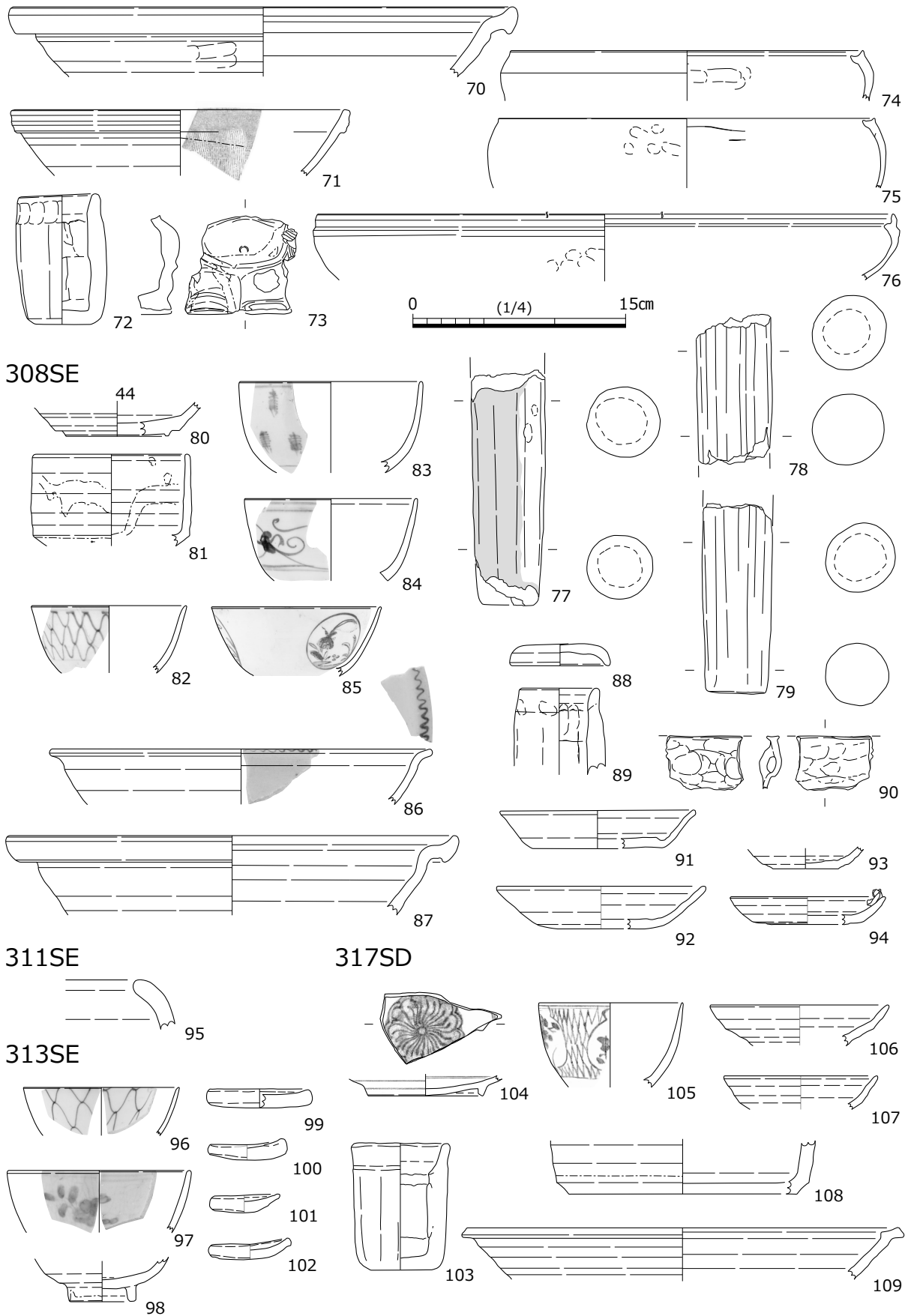


図 21 土器・陶磁器・石製品実測図 5 (縮尺 1/4)

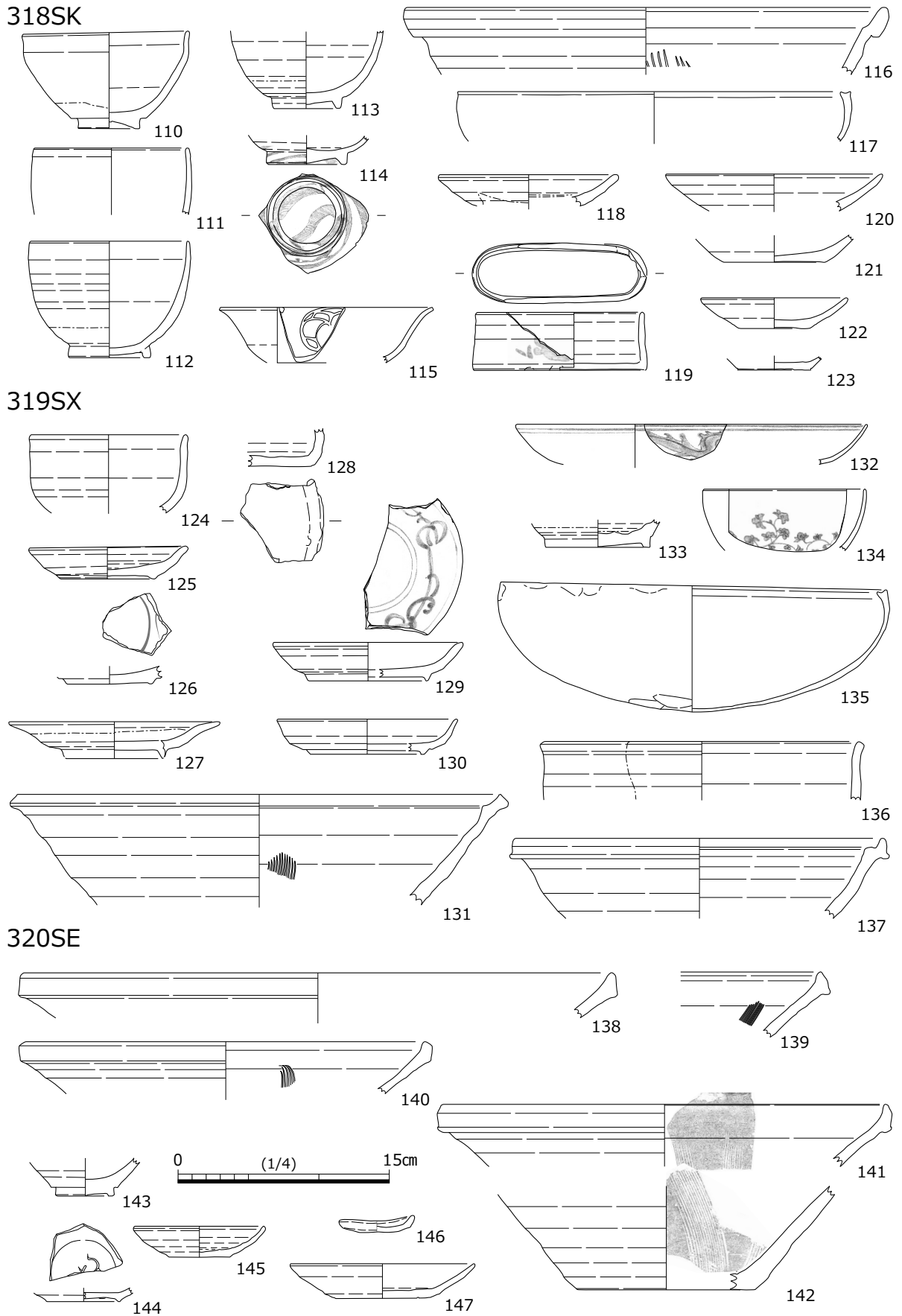


図 22 土器・陶磁器・石製品実測図 6 (縮尺 1/4)

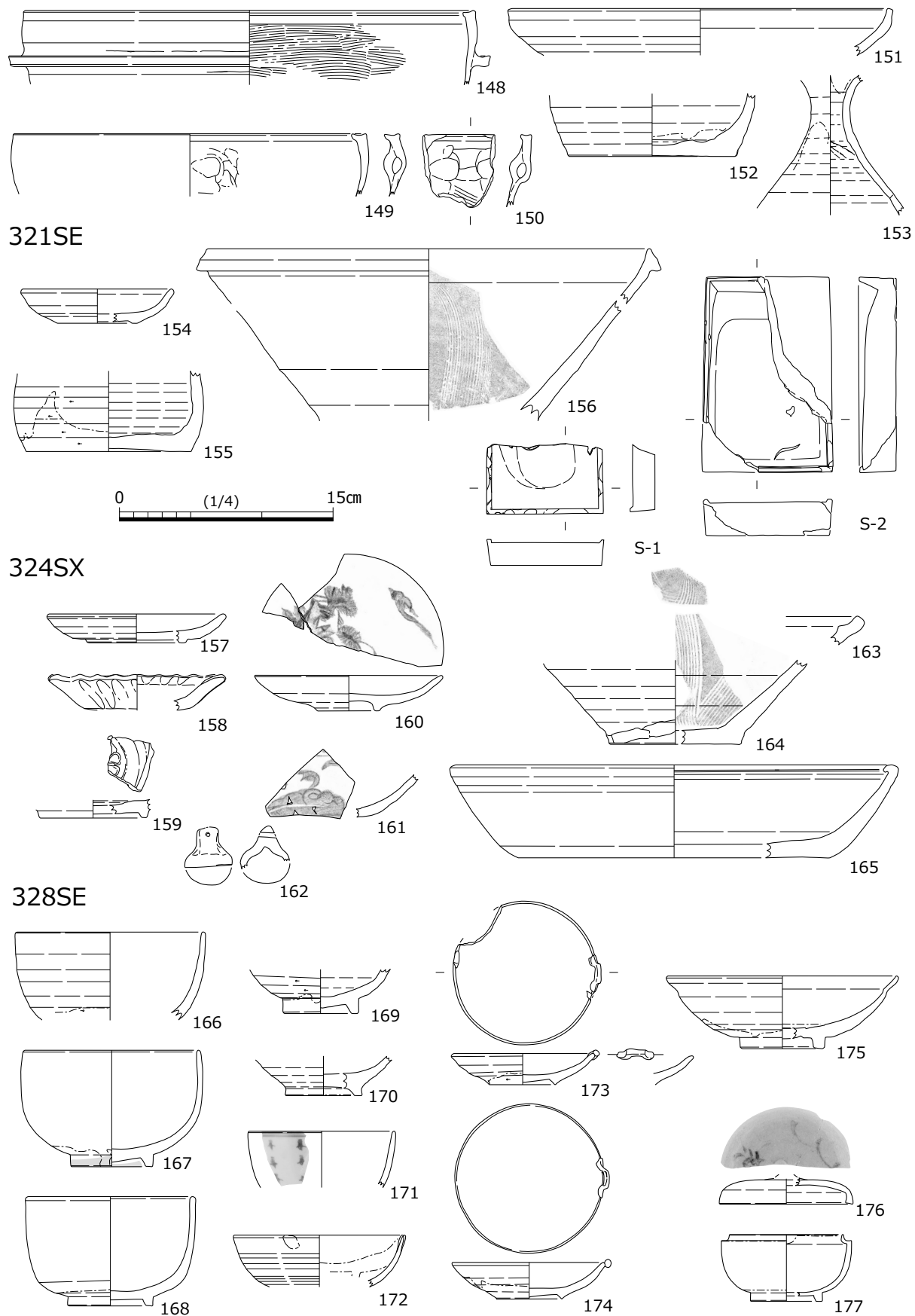


図 23 土器・陶磁器・石製品実測図 7 (縮尺 1/4)

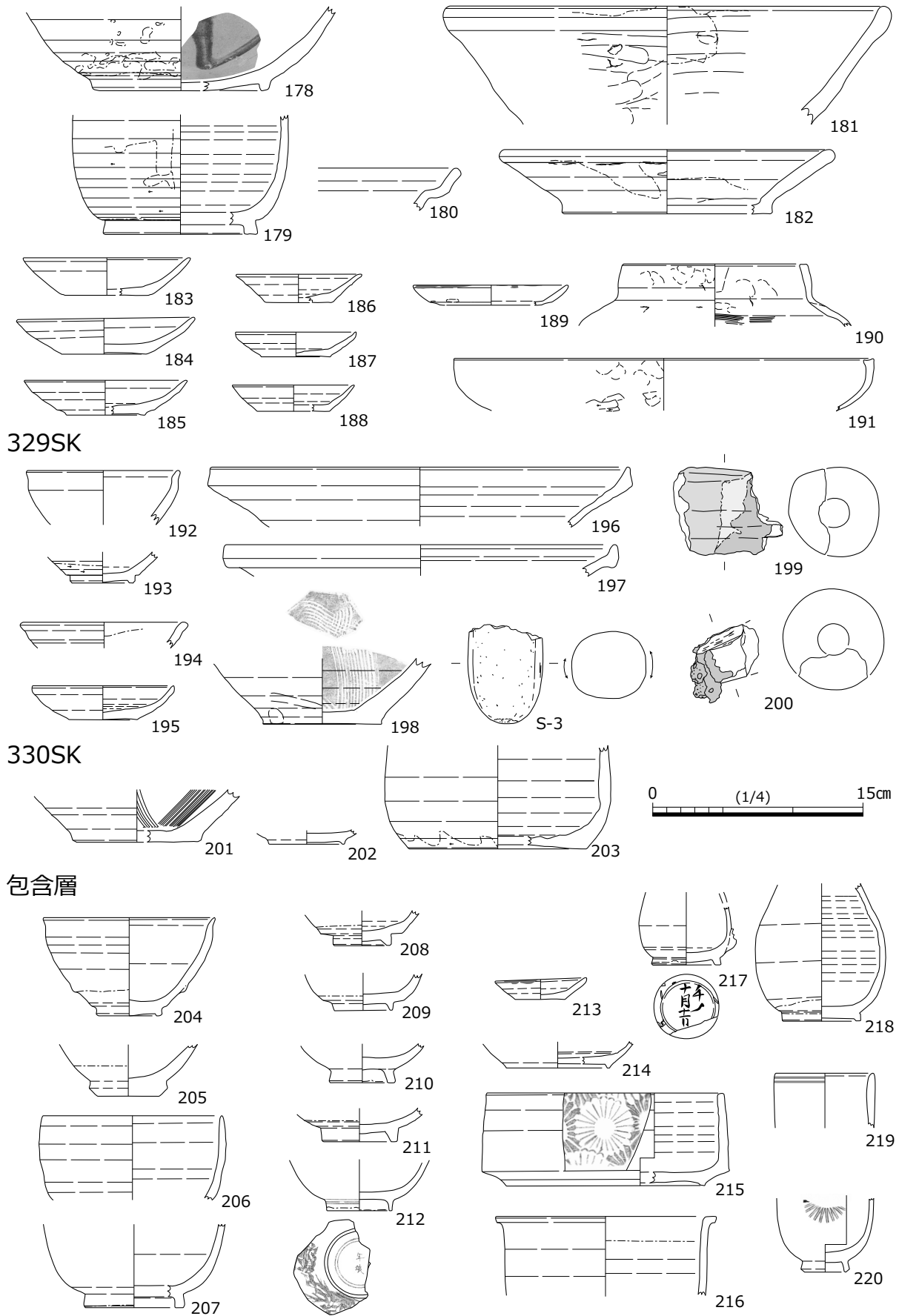


図 24 土器・陶磁器・石製品実測図 8 (縮尺 1/4)

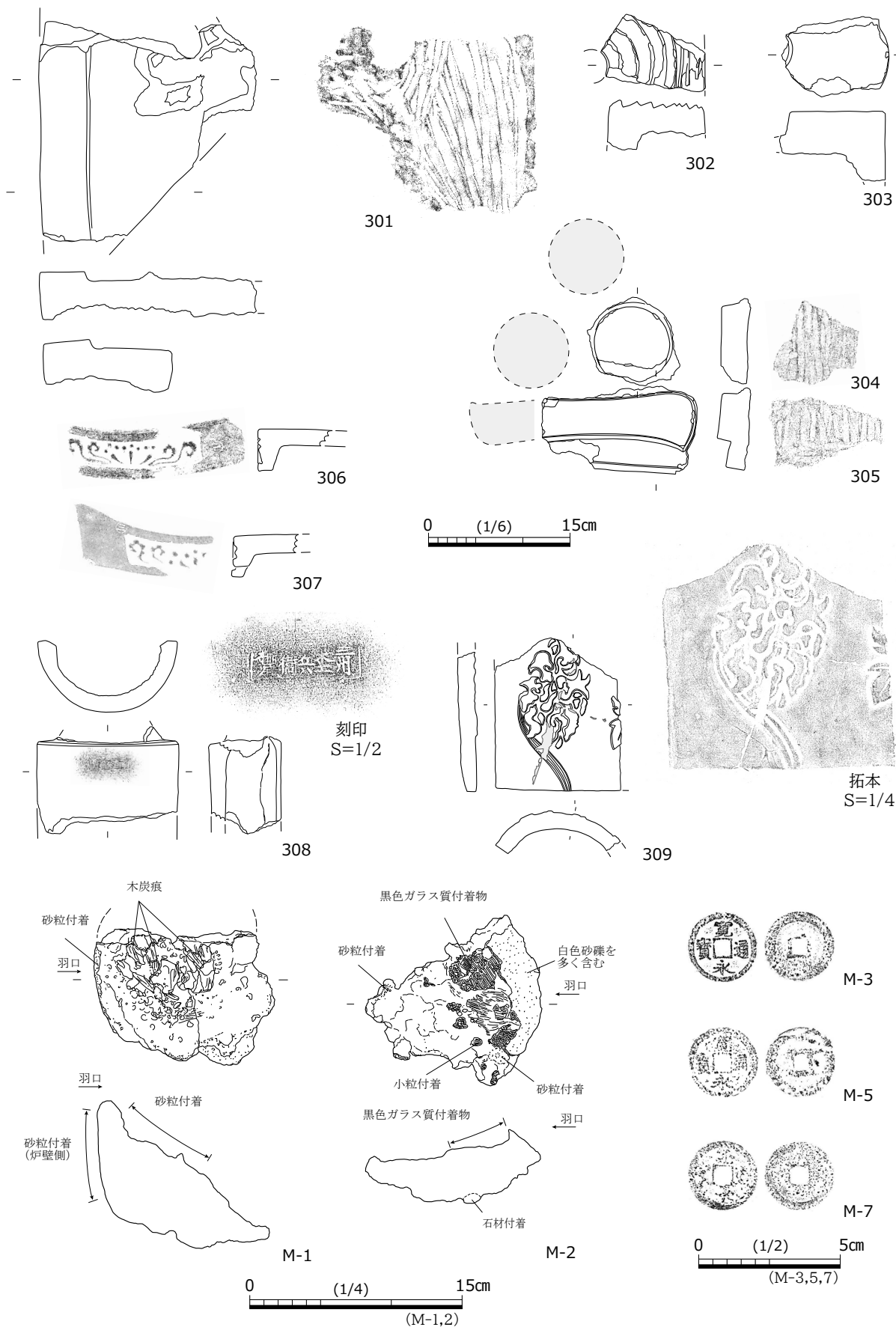


図 25 瓦・鉄滓実測図 (縮尺 1/6,1/4)・銭貨拓本 (縮尺 1/2)

表 2 瓦刻印の種類と部位

刻印タイプ	種別	刻印位置	調査区	遺構番号	E-no.
棚尾左兵衛(ヨコ)	丸瓦	玉縁寄りの凸面	Ba	301SE	310*
棚尾左兵衛(ヨコ)	丸瓦	玉縁寄りの凸面	Ba	301SE	308
○	道具瓦	凸面	Bd	319SK	311*
	平瓦	端面	Be	328SK	312*
○—	軒棧瓦(東海式)	瓦当面の端	Ba	301SE	306
	棧瓦	端面	Ba	301SE	313*
○三	軒棧瓦(東海式)	瓦当面の端	Ba	301SE	314*
	軒棧瓦(東海式)	瓦当面の端	Ba	301SE	307
	軒棧瓦(東海式)	瓦当面の端	Ba	301SE	315*
	平瓦	端面	Ba	301SE	316*
	平瓦	端面	Ba	301SE	317*
	棧瓦	端面	Ba	301SE	318*
	棧瓦	端面	Ba	301SE	319*
	軒棧瓦(東海式)	瓦当面の端	Ba	301SE	320*
軒棧瓦(東海式)	瓦当面の端	Ba	301SE	321*	
○大	棧瓦	端面	Ba	301SE	322*
○上	棧瓦	端面	Ba	301SE	323*
六弁花陰刻	丸瓦	凸面	Ba	301SE	324

\*刻印拓本のみ掲載

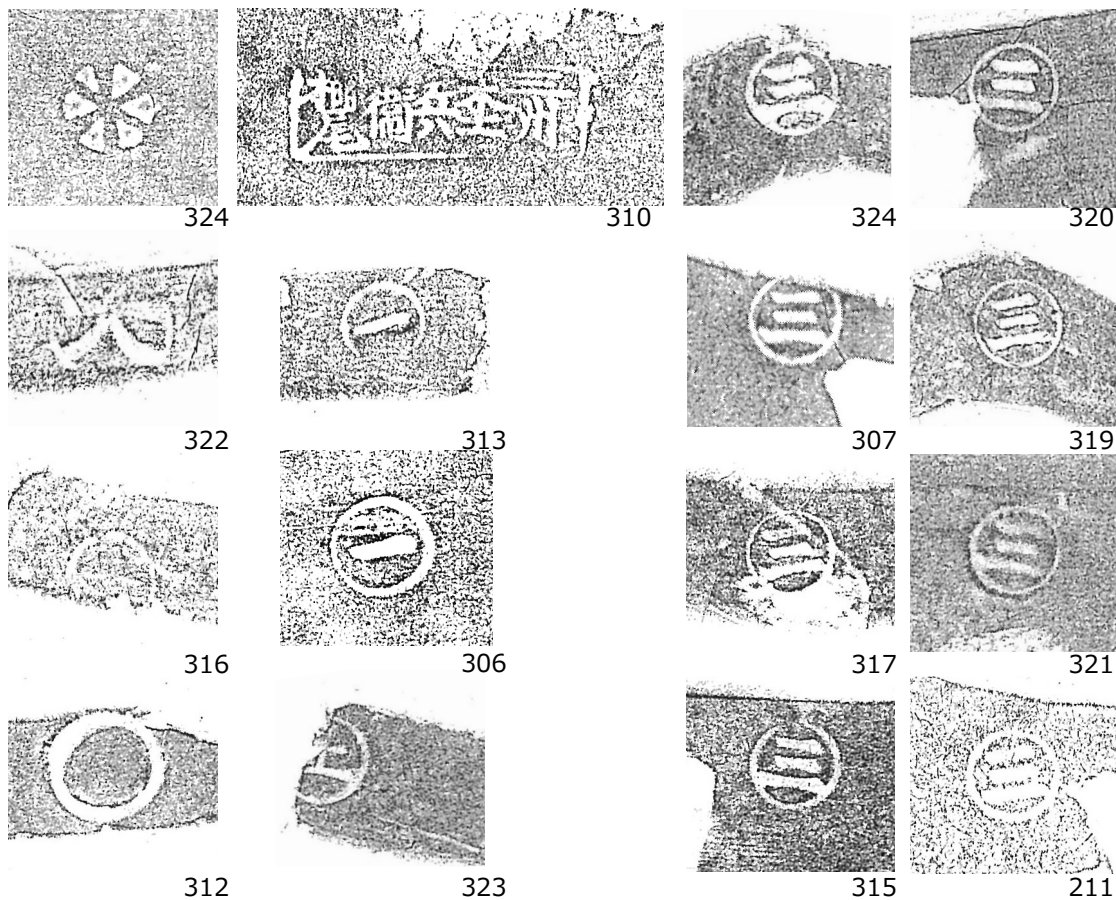


図 26 瓦印拓本(縮尺 1/1)

## d. 鍛冶関連資料 (図 24,25, 表 3)

23B 区では鉄滓の出土が目立った。遺物として採取できた鉄滓は 26 点超、重量は合計 8.26kg である。出土遺構の主体をなす大溝 315SD、井戸 320SE、井戸 329SE や土坑 330SK は、それぞれに相伴する陶磁器から 16 世紀後半までに廃棄されたと考えられる。これに比べると、近世の武家屋敷を中心に調査された 23A 区では鉄滓の出土はごく少量であった。おそらく今回の調査範囲で検出された鉄滓の多くは戦国期に行われた鍛冶作業に伴う痕跡と考えられる。

ここでの鉄滓の特徴は、椀型滓では破片でも大型のものが多くみられることであり、例えば図化資料 M-1 (330SK), M-2 (315SD) は全体の 1/2 以上が残存しているとみられ、羽口の接続位置が推測できるものである。

フイゴの羽口は 329SE から出土した 2 点 (199,200) を掲載した。

鍛造剥片写真は (図 27) は 320SE 埋土の土壌洗別作業で検出したものである。

そのほか、320SE には被熱した割石が大量に廃棄されていた。石材別の総重量では、砂岩 65.654kg、濃飛流紋岩 36.227kg、チャート 31.660kg、ホルンフェルス 14.799kg、花崗岩 7.269kg、泥岩 6.994kg、緑色片岩 2.845kg、凝灰岩 2.015kg である。このうち、砂岩、濃飛流紋岩、チャートには熱を受けて赤変が認められる破片が大量に含まれていた。また、いくつかの砂岩については研磨面や線状のキズが、泥岩にも研磨面が認められた (写真図版 6,S-4)。

329SE と 330SK は、大溝 315SD が構築される以前に機能していた井戸である。大窯第 3 段階までにはここでやや大掛かりな鍛冶作業が行われていたと考えられる。ただし、これらを囲む区画溝が検出されおらず、作業空間が戦国期の屋敷地の内外のどのような場所であったのかは不明である。

表 3 鍛冶関連遺物と近世以降の金属製品

登録番号	調査区	遺構	メモ	重量 (g)	磁石反応 (強弱)	グリット	位置座標			処理番号
							X	Y	Z	
23Ba	308SE		鉄滓, 焼土塊		×	-				23-66
M-2	23Bd	315SD, d-124	椀型滓(羽口片付着)	554.3	○	990150	-90992.273	-24152.279	8.176	23-73
	23Bd	315SD	椀型滓	139.7	○	-				23-79
23Bd	315SD 中層		椀型滓	451.1	◎	-				23-80
23Bd	315SD, d-152	畝④東上層	椀型滓	139.1	○	990150	-90990.688	-24154.175	8.099	23-76
23Bd	315SD	畝⑤西下層	鉄滓	46.8	○弱	-				23-81
23Bd	315SD	畝⑤東中層	鉄滓(小石付着)	111.9	○	-				23-82
23Bd	315SD, d-142	中層	椀型滓	124.0	○	990160	-90991.933	-24161.506	7.786	23-75
23Bd	315SD	斑土	椀型滓	282.6	○	-				23-77
23Bd	315SD	斑土	椀型滓(炉壁付着か)	125.9	○(片面だけ)	-				23-78
23Bd	315SD, d-125		椀型滓	186.7	○	990150	-90992.137	-24151.598	8.034	23-74
23Bd	315SD上層		炉壁か	-	×	-				23-127
23Bd	319SK		鉄滓	523.9	×	985415				23-87
23Bd	319SK		鉄滓	134.6	○弱	-				23-93
23Bd	319SK(南側)		鉄滓	67.6	×	985150				23-85
23Bd	320SE		鉄滓	474.3	○	010170				23-83
23Be	320SE		鉄滓	462.9	○	-				23-100
23Be	320SE		椀型滓	534.7	○一部	-				23-137
23Be	320SE		椀型滓	100.1	○	-				23-138
23Be	320SE		鉄滓	178.7	○	-				23-139
23Be	320SE(北東)		鉄滓	254.6	×	-				23-99
23Be	321SE		鉄滓	160.4/137.5	◎/◎	-				23-103
23Bd	324SX(西)		鉄滓	8.9	○	-				23-90
23Bd	324SX(東)		鉄滓	-	-	-				23-89
23Be	329SE		鉄滓	1954.4/8.5	○/×	-				23-107
23Be	329SE		鉄滓/その他数点	362.2	○	-				23-109
M-1	23Bd	330SK	椀型滓	735.3	×	-				23-136
	23Be	攪乱	炉壁か		-	-				23-108
M-7	23Ba	301SE	銭	3.0		-				23-58
	23Ba	306SE 井筒内	釘多数	61.0	○	-				23-61
M-4~6	23Ba	308SE	釘ほか	13.9(塊)/20.9(棒)	○/○/○	-				23-65
	23Ba	308SE	銭3点, 寛永通宝	4.3/3.7/3.1		-				23-67
23Ba	308SE	釘多数, 貝付着/石付着	54.2	○-◎(1点)	-					23-68
23Ba	308SE 北半	釘	3.2	○	-					23-64
23Ba	313SE	釘	9.1	○	-					23-69
M-3	23Bb	315SD壁面	銭, 寛永通宝	3.1		-				23-72
	23Bd	319SK	釘と炉壁	18.8(炉壁)/25.2	○/×	985415				23-86
23Bd	319SK	釘ほか	35.9(多数)	○弱	-					23-92
M-8	23Bd	319SK	キセル 雁首のつぶれ	0.7	×	-				23-125
	23Bd	324SX(東)	釘ほか	16.4	○	985145				23-88
23Be	328SE	釘	3.5	○	-					23-104
23Be	328SE	釘	5.4/2.4	×/×	-					23-105
23Be	328SE 井筒内	釘	9.5	×	-					23-101

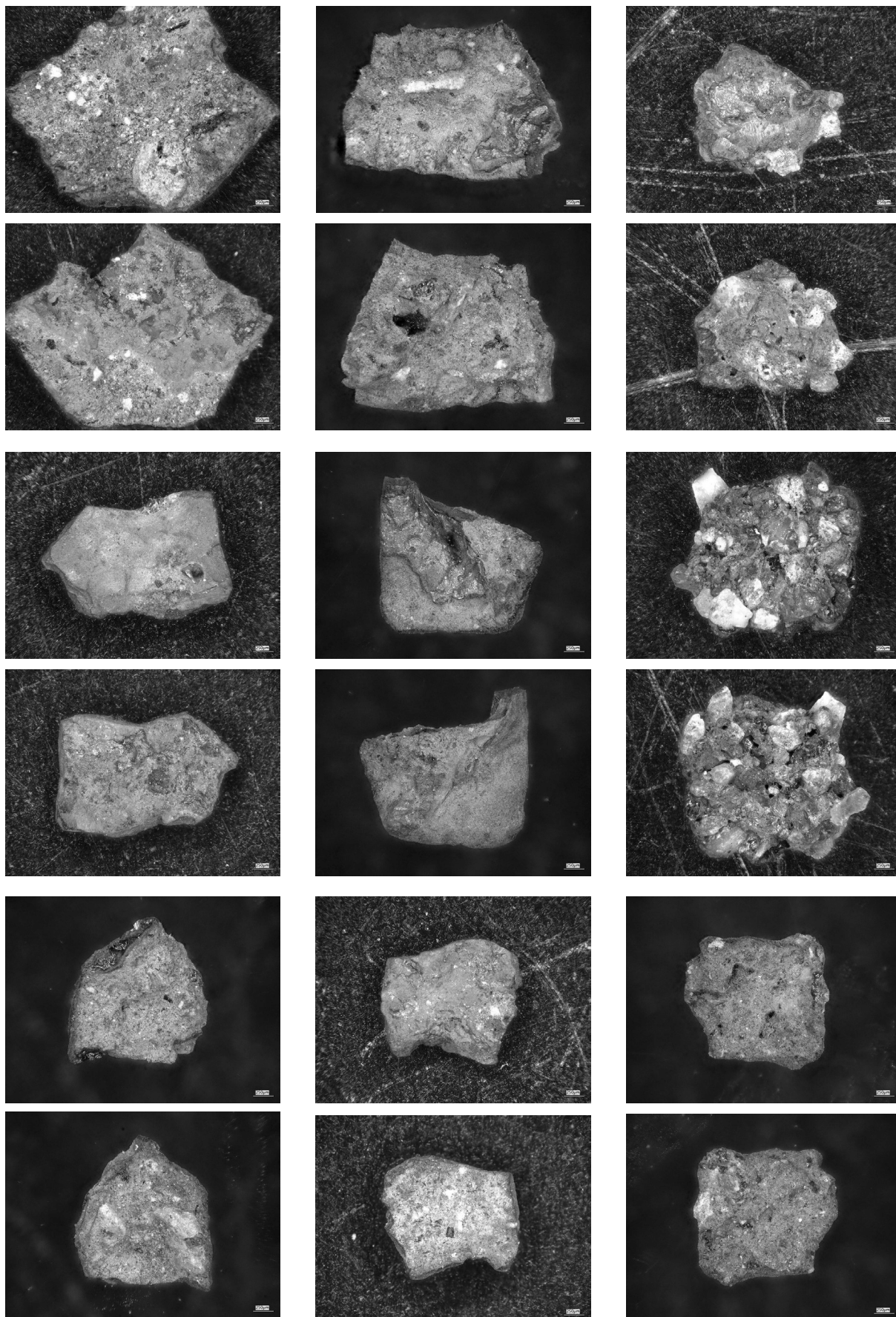


図 27 320SE 出土の鍛造剥片

— 250 $\mu$ m

## 第5章 自然科学分析

### 1 名古屋城三の丸遺跡出土の動物遺体

#### 分析目的と分析結果概要

今回の調査地点には東西に並ぶ2つの武家屋敷が含まれる。これら屋敷地の廃棄土坑などから出土した動物遺体について同定を行った。多くはそれぞれの屋敷地居住者が残した食物残滓、つまり当時の食材の様相の一端を示す資料である。

分析の結果、両屋敷地で共通して検出されたものでは貝類が最も多く、なかでもサザエ、ハマグリ出土量が目立って多い。そのほかには魚類、鳥類があり、哺乳類はほとんど認められなかった。魚類、鳥類については主に西側の屋敷地で確認されており、鳥類では食用となる種以外にタカ科が含まれていたことが注目される。タカは矢羽根の材料であり、近くは城外西の御鷹部屋あるいは下御深井御庭で鷹狩用の鷹や鶴や孔雀などが飼われていたことが明和三年(1766)の記事として『尾州御留守日記』にみられる\*注1。またそれぞれの領地で行われていた鷹狩りと関連する可能性も指摘できる\*注2。

以上の試料は、西側屋敷地では井戸からブロック状に土壌を採取したものであり、一方、東側屋敷地では重複する複数の廃棄土坑と包含層掘削時に遺物として個別に採取したものが多く、代々家老職にあった渡辺家の西側屋敷地と複数の居住者の変遷を経た東側屋敷地からの資料である。それぞれに試料の採取方法が異なることから単純な比較は有効ではないものの、上級藩士の食材の一例として評価できる資料である。屋敷地ごとの試料出土遺構は次の通りである。

屋敷地 1 (23A-001SK,025SK,076SK,063SX,  
(東側) 166SDS,181SK,201SK,202SK,211SD,  
213SK,217SK,221SK,224SK, 包含層)  
屋敷地 2 (23A-104SE,111SX,23B-306SE)  
(西側)

次に、(株)パレオ・ラボによる分析報告を示す。

#### 【注・参考文献】

\*注1 今和泉 大「孔雀の尾が長すぎて遠回り？」名古屋城調査研究センターだより 2023 年第 4 号

\*注2 山崎久豊,2019,「藩士の鷹場と地域：尾張藩土横井家を事例に」『鷹・鷹場・環境研究』Vol. 3,九州大学基幹教育院

#### 「名古屋城三の丸遺跡 23 区出土の動物遺体」

三谷智広(株)パレオ・ラボ,2024

#### (1) 分析方法

貝類については、斧足綱で殻頂部が残存する試料、腹足綱で殻頂部もしくは殻口部が残る試料を、硬骨魚綱や鳥綱では、関節部の残る試料を同定対象とした。肉眼で試料を観察し、現生標本との比較により、部位と分類群の同定を行った。

#### (2) 結果

同定結果を表3,図26,27に示す。同定されたのは、貝類で11分類群、魚類で4分類群、鳥類で4分類群、哺乳類で1分類群であった。以下、各調査区の遺構ごとに概要を示す。

#### 23A 区土坑 (SK)

近世の廃棄土坑では001SKでミミガイ科の殻破片、181SKでサザエの殻軸と斧足綱の殻破片、213SKでサザエの殻軸、近世の水琴窟では025SKでハマグリ左殻とサザエの殻軸、076SKでサザエの殻軸とマガキ左殻、201SKでサザエの殻軸、202SK(202SX)でサザエの殻軸と蓋、217SKでサザエの殻軸とアサリの左殻、ハマグリ左殻、斧足綱の殻破片、221SKでシジミ属の殻破片、224SKでミミガイ科の殻破片が確認された。

#### 23A 区溝 (SD)

戦国時代の溝跡ではSD065でサザエの殻軸、近世の166SDでサザエの殻軸、近世の172SDで斧足綱の殻破片、211SDで斧足綱と腹足綱の殻破片が認められた。

#### 23A 区井戸 (SE)

近世の井戸跡104SEでハイガイの左殻と右殻、サザエの殻軸が認められた。

#### 23A 区その他 (SX)

近世の遺構では063SXでサザエの殻軸、ハマグリ左殻とマガキ右殻、111SXでハマグリ右殻とハイガイ右殻が認められた。

#### 23A 区 包含層等

腹足綱でサザエの殻軸、斧足綱でアサリの左右の殻、シジミ属の左殻、鳥綱でカモ亜科の右鳥口骨が確認された。

## 23B 区土坑 (SK)

近世の井戸跡 306SK からは、腹足綱でオオタニシ、サザエ、ホソウミニナ、ミミガイ科、斧足綱でハマグリ、アサリ、シジミ属、ハイガイ、シオフキが認められた。また、魚類でカレイ科の椎骨や第一血管間棘、メバル科の右前鰓蓋骨、タイ科の左舌顎骨、右主鰓蓋骨が出土している。鳥類では、タカ科の左手根中手骨、カモ亜科の右尺骨と右足根中足骨、ウミスズメ科の右大腿骨、スズメ目の左足根中足骨、哺乳類でネズミ科の左下顎骨が確認された。近世の井戸跡である 308SK では、オオタニシと思われる殻軸、サザエ、ハマグリ、アサリ、シジミ属、カモ亜科の左尺骨が認められた。313SK も構成される種類は同様であるが、スズキ属の右主鰓蓋骨が出土している。

## 23B 区その他 (SX)

近世の廃棄土坑 324SX で、サザエの殻軸が出土している。

## 23B 区 上面検出 (西側)

ハマグリの左殻が出土している。

## (3) 考察

全体的な出土傾向でみると、貝類の出土が最も多い。腹足綱ではサザエ、斧足綱ではハマグリの出土が最も多く、306SK ではオオタニシが比較的まとまって出土している。貝類以外では、出土量は少ないものの、タイ科やカレイ科、メバル科、スズキ属などの魚類、タカ科、カモ亜科、ウミスズメ科などの鳥類が確認された一方で哺乳類の出土はほとんど認められなかった。

サザエやハマグリなどの海産貝類は、沿岸部に生息する貝類が中心であり、貝の採取活動が主に沿岸部の水深の浅い海域で行われたと考えられる。海産魚類も含め、これらの魚貝類は海岸部から遺跡に食用として持ち込まれたものであろう。また、海における採取活動だけでなく、河川や湖沼などの淡水に生息するオオタニシも出土しており、遺跡周辺の淡水域の利用も推定される。

今回確認できた動物種は、食用となる種が大半を占める。殻や骨に人為的な痕跡は確認できなかったものの、食材として利用された後に不要な部位が廃棄されたと考えられる。なお、タカ科については、矢羽根や鷹狩に利用されていた可能性がある(西本・新美編 2010)。タカの種類にもよるため推測の域を出な

いが、鷹狩に用いられたタカだとすれば、306SK から出土したカモ亜科の骨などは、鷹狩の獲物であったかもしれない。出土した動物の中には、鷹狩の獲物が含まれる可能性もあり、動物全てを人の食料とするには注意が必要であろう。今後、周辺遺跡との比較や動物遺体の出土量も見ながら、より詳細に検討すべき課題である。

表 4 名古屋城三の丸遺跡出土の動物遺体一覧

軟体動物門	Mollusca
腹足綱	Gastropoda
	オオタニシ <i>Cipangopaludina japonica</i>
	ホソウミニナ <i>Batillaria attramentaria</i>
	ミミガイ科 <i>Haliotoidea</i> sp.
	サザエ <i>Turbo sazae</i>
斧足綱	Pelecypoda
	シジミ属 <i>Corbicula</i> sp.
	マルスダレガイ科 <i>Veneridae</i> sp.
	ハマグリ <i>Meretrix lusoria</i>
	アサリ <i>Venerupis philippinarum</i>
	マガキ <i>Crassostrea gigas</i>
	ハイガイ <i>Tegillarca granosa</i>
	シオフキ <i>Mactra veneriformis</i>
脊椎動物門	Vertebrata
硬骨魚綱	Osteichthyes
	タイ科 <i>Sparidae</i> sp.
	カレイ科 <i>Pleuronectidae</i> sp.
	メバル科 <i>Sebastinae</i> sp.
	スズキ属 <i>Lateolabrax</i> sp.
鳥綱	Aves
	カモ亜科 <i>Anatinae</i> sp.
	タカ科 <i>Accipitridae</i> sp.
	ウミスズメ科 <i>Alcidae</i> sp.
	スズメ目 <i>Passeriformes</i> sp.
哺乳綱	Mammalia
	ネズミ科 <i>Muridae</i> sp.

## 【引用・参考文献】

- 松井 章 (2008) 動物考古学. 312p, 京都大学学術出版会.  
 西本豊弘・新美倫子編 (2010) 事典 人と動物の考古学. 276p, 吉川弘文館.  
 奥谷喬司編 (1991) 決定版生物大図鑑 貝類. 399p, 世界文化社.  
 奥谷喬司編 (2000) 日本近海産貝類図鑑. 1173p, 東海大学出版会.

表5 動物遺体の同定結果(1)

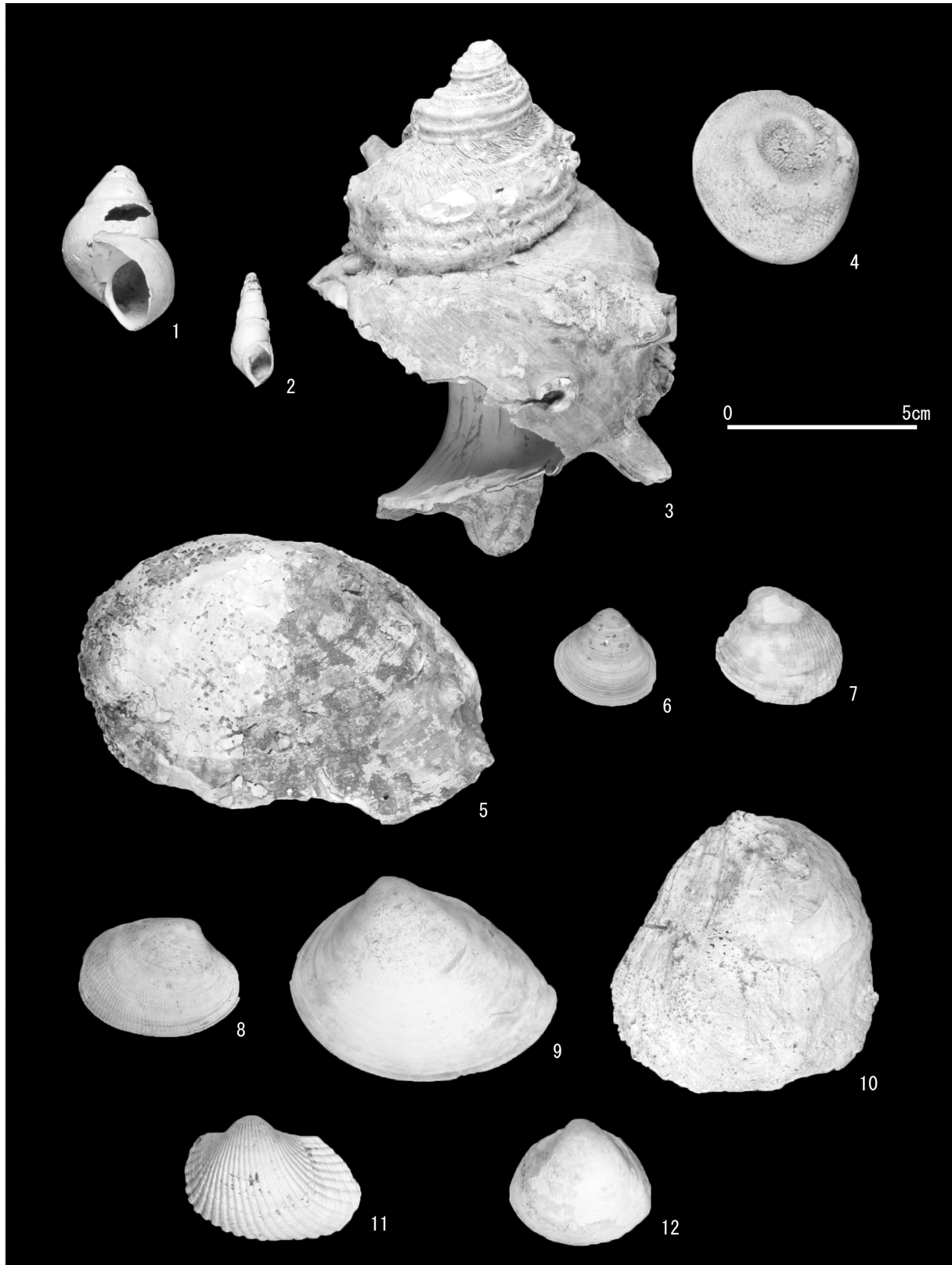
調査区	遺構番号	層位等	種類	部位	状態	左右	点数	備考
23A区	001SK東半		ミミガイ科	殻頂	破片	—	1	
			ミミガイ科	体層	破片	—	10	
	025SK東半		ハマグリ	殻頂	破片	左	1	
	025SK 内壁面		サザエ	殻軸	破片	—	1	
	063SX(黄褐色土の下)		サザエ	殻軸	破片	—	3	
			ハマグリ	殻頂	破片	左	2	
			斧足綱	殻	破片	不明	17	
	063SX南		サザエ	殻軸	破片	—	1	
	063SX南側上部		マガキ	殻頂	破片	右	1	
	065SD	Sec II層	サザエ	殻軸	破片	—	1	
	076SK		マガキ	殻頂	破片	左	1	
	076SK		サザエ	殻軸	破片	—	1	
	104SE		ハイガイ	殻頂	完存	左	1	
				殻頂	完存	右	1	
	104SE		サザエ	殻軸	破片	—	2	
	111SX		ハマグリ	殻頂	ほぼ完存	右	1	
	111SX		ハイガイ	殻頂	完存	右	1	
	166SD		サザエ	殻軸	破片	—	3	
	172SD 真ん中		斧足綱	殻	破片	不明	1	
	172SD		斧足綱	殻	破片	不明	1	
	181SK		サザエ	殻軸	破片	—	1	
	181SK東端		斧足綱	殻	破片	不明	1	
	201SK		サザエ	殻軸	破片	—	1	
	202SK東		サザエ	殻軸	破片	—	1	
	202SX東		サザエ	殻軸	破片	—	1	
			サザエ	蓋	破片	—	1	
	211SD		斧足綱	殻	破片	不明	3	
			腹足綱	殻	破片	—	1	
	211SD		斧足綱	殻	破片	不明	1	
	213SK		サザエ	殻軸	破片	—	1	
	213SK(レンガ建物キソ下)		サザエ	殻軸	破片	—	2	
	217SK		サザエ	殻軸	破片	—	1	
	217SK		斧足綱	殻	破片	不明	1	
				アサリ	殻頂	破片	左	1
	217SK		ハマグリ	殻頂	破片	左	2	
				シジミ属	殻	破片	不明	1
	224SK		ミミガイ科	殻頂	破片	—	1	
				ミミガイ科	体部	破片	—	2
	包含層		サザエ	殻軸	破片	—	2	
	包含層		アサリ	殻頂	破片	右	1	
殻				破片	不明	2		
包含層(北半)		カモ亜科	鳥口骨	完存	右	1	背側面にカットマークあり	
		サザエ	殻軸	破片	—	1		
		アサリ	殻頂	破片	右	1		
		斧足綱	殻	破片	不明	3		
包含層(西半)		サザエ	殻軸	破片	—	1		
北西部包含層		アサリ	殻頂	破片	左	1		
		シジミ属	殻頂	破片	左	1		
		斧足綱	殻	破片	不明	2		
北東部包含層		斧足綱	殻	破片	不明	2		
包含層(064SXに相当か)		サザエ	殻軸	破片	—	1		
南北Tr 西壁沿い		サザエ	殻軸	破片	—	1		
表土掘削AC区東端?10m		腹足綱	殻	破片	—	2		
23B区	306SK		オオタニシ	殻頂・殻口	破片	—	2	
			アサリ	殻頂	破片	左	1	
			ハマグリ	殻頂	破片	左	9	

表 6 動物遺体の同定結果(2)

調査区	遺構番号	層位等	種類	部位	状態	左右	点数	備考	
			ハマグリ	殻頂	破片	右	5		
			斧足綱	殻	破片	不明	48		
	306SK井筒内		オオタニシ	殻頂・殻口	破片	—	5	ミミガイ科破片	
			腹足綱	殻	破片	—	11		
			アサリ	殻頂	ほぼ完存	右	1		
			ハマグリ	殻頂	完存	左	1		
			シジミ属	殻頂	破片	左	1		
			マルスダレガイ科	殻頂	ほぼ完存	左	1		アサリか？
			斧足綱	殻	破片	—	5		
			硬骨魚綱	不明	破片	不明	1		
	306SK井筒内		オオタニシ	殻頂・殻口	破片	—	5		
			サザエ	殻軸	破片	—	2		
			ハマグリ	殻頂	破片	左	8		
			ハマグリ	殻頂	破片	右	12		
			シジミ属	殻頂	破片	左	2		
			シジミ属	殻頂	破片	右	8		
			シジミ属	殻	破片	不明	3		
			ハイガイ	殻頂	破片	左	1		
			斧足綱	殻	破片	不明	12		
			タカ科	手根中手骨	完存	左	1		
			カモ亜科	尺骨	遠位端欠	右	1		
			カモ亜科	足根中足骨	完存	右	1		
			ウミスズメ科	大腿骨	近位端欠	右	1		
	306SK井筒内		サザエ	殻頂	破片	—	1		
			サザエ	殻軸	破片	—	1		
			オオタニシ	殻頂	破片	—	4		
			ホソウミナ	殻	完存	—	1		
			ハマグリ	殻頂	破片	左	3		
			ハマグリ	殻頂	破片	右	2		
			シジミ属	殻	完存	左	1		
			ハイガイ	殻	完存	左	1		
			ハイガイ	殻	完存	右	1		
			斧足綱	殻	破片	不明	3		
	306SK井筒内		サザエ	殻軸	破片	—	2		
			オオタニシ	殻頂・殻口	破片	—	2		
			ミミガイ科	殻頂	破片	—	1		
			腹足綱	殻	破片	—	8		
			ハマグリ	殻頂	破片	左	16		
			ハマグリ	殻頂	破片	右	9		
			シジミ属	殻	完存	左	1		
			シジミ属	殻	完存	右	3		
			シオフキ	殻頂	破片	左	1		
			斧足綱	殻	破片	不明	6		
			タイ科	舌顎骨	破片	左	1		
			硬骨魚綱	背鱗棘	完存	不明	1		
			硬骨魚綱	不明	破片	不明	1		
			カモ亜科	手根中手骨	ほぼ完存	左	1		
	306SK井筒内		スズメ目	足根中足骨	完存	左	1		
			ネズミ科	下顎骨	破片	左	1		
			カレイ科	腹椎	ほぼ完存	—	1		
			カレイ科	尾椎	ほぼ完存	—	1		
			カレイ科	第一血管間棘	破片	—	1		
			メバル科	前鰓蓋骨	ほぼ完存	右	1		
			硬骨魚綱	不明	破片	—	29		
	306SK井戸筒内		タイ科	主鰓蓋骨	ほぼ完存	右	1		
	306SK井戸筒内		サザエ	蓋	ほぼ完存	—	1		

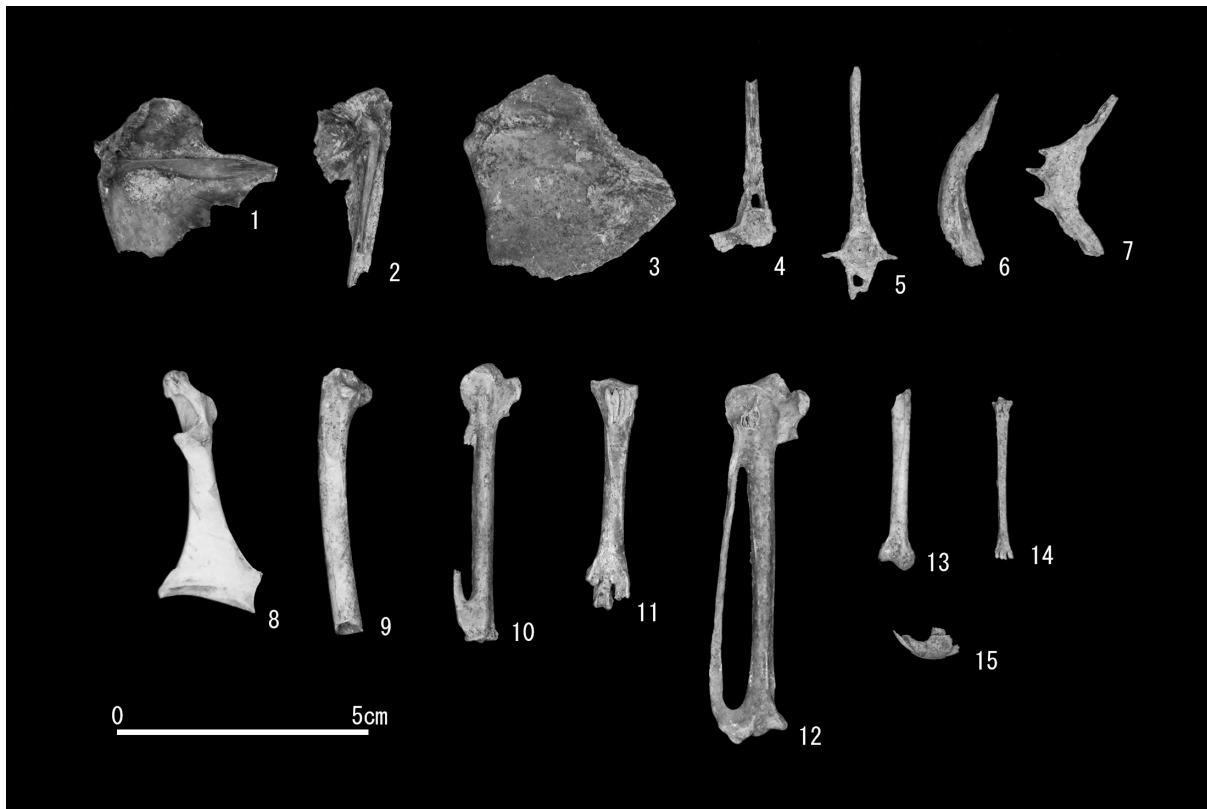
表 7 動物遺体の同定結果 (3)

調査区	遺構番号	層位等	種類	部位	状態	左右	点数	備考
			オオタニシ	殻頂	破片	—	9	
			ハマグリ	殻頂	破片	左	15	
			ハマグリ	殻頂	破片	右	12	
			シジミ属	殻頂	ほぼ完存	右	1	
			アサリ	殻頂	破片	右	2	
			斧足綱	殻	破片	不明	22	
	306SK北半		ハマグリ	殻頂	破片	左	2	
			ハマグリ	殻頂	破片	右	1	
			斧足綱	殻	破片	不明	1	
			腹足綱	殻	破片	—	1	
	308SK		サザエ	蓋	ほぼ完存	—	12	
	308SK		カモ垂科	尺骨	遠位端欠	左	1	
	308SK		サザエ	殻軸	破片	—	3	
			サザエ	蓋	ほぼ完存	—	7	
			腹足綱	殻	破片	—	2	
			ハマグリ	殻頂	破片	左	4	
			ハマグリ	殻頂	破片	右	4	
			ハマグリ	殻	破片	不明	1	
			アサリ	殻頂	破片	左	1	
			アサリ	殻頂	破片	右	2	
			斧足綱	殻	破片	不明	7	
	308SK		サザエ	蓋	ほぼ完存	—	5	
			ハマグリ	殻頂	ほぼ完存	左	3	
			ハマグリ	殻頂	破片	右	3	
			シジミ属	殻	破片	不明	1	
			斧足綱	殻	破片	不明	3	
	308SK		ハマグリ	殻頂	ほぼ完存	左	3	ほぼ完存2 破片1
			ハマグリ	殻頂	ほぼ完存	右	3	
			マルスダレガイ科	殻	ほぼ完存	右	1	アサリか?
			斧足綱	殻	破片	不明	3	
	308SK北半		オオタニシ?	殻軸	破片	—	1	
			ハマグリ	殻頂	破片	左	1	
			アサリ	殻頂	破片	左	1	
			シジミ属	殻頂	破片	右	2	
			斧足綱	殻	破片	不明	4	
	313SK		サザエ	殻軸	破片	—	10	
			サザエ	蓋	—	—	3	内1点完存
			ハマグリ	殻	破片	不明	1	
			シジミ属	殻頂	破片	左	1	
			腹足綱	殻	破片	—	19	
	313SK		スズキ属	主総蓋骨	ほぼ完存	右	1	
	313SK		サザエ	殻軸	破片	—	2	
			ハマグリ	殻頂	破片	右	1	
			腹足綱	殻	破片	—	1	
	313SK		サザエ	殻軸	破片	—	5	
			ミミガイ科	殻	破片	—	1	内側から穿孔? 2箇所あり
			腹足綱	殻	破片	—	6	
	324SX(東)		サザエ	殻軸	破片	—	1	
	上面検出(西側)		ハマグリ	殻頂	破片	左	1	



1～3、6、7、9、11、12：306SK 井筒内 4：308SK 5：001SK 東半 10：063SX 南側上部 8：23A 区包含層  
1. オオタニシ殻 2. ホソウミニナ殻 3. サザエ殻 4. サザエ蓋 5. ミミガイ科殻 6. シジミ属左殻 7. マルスダレガイ科左殻  
8. アサリ右殻 9. ハマグリ左殻 10. マガキ右殻 11. ハイガイ左殻 12. シオフキ左殻

図 28 23A・23B 区出土の動物遺体（貝類）



1：306SK 井戸筒内 2、4～7、10～13～15：306SK 井筒内 9：308SK 3：313SK 8：23A 区包含層  
 1. タイ科右主鰓蓋骨 2. タイ科左舌顎骨 3. スズキ属右主鰓蓋骨 4. カレイ科腹椎 5. カレイ科尾椎 6. カレイ科第一血管間刺  
 7. メバル科右前鰓蓋骨 8. カモ垂科右鳥口骨 9. カモ垂科左尺骨 10. カモ垂科左手根中手骨 11. カモ垂科右足根中足骨  
 12. タカ科左手根中手骨 13. ウミスズメ科左大腿骨 14. スズメ目左足根中足骨 15. ネズミ科左下顎骨

図 29 23A・23B 区出土の動物遺体（魚類・鳥類・哺乳類）

## 2 放射性炭素年代測定結果

### 分析目的と結果概要

名古屋城三の丸遺跡 23B 区で検出された戦国期大溝 315SD の機能・廃絶時期を探るため、採取された3点の試料について加速器質量分析法(AMS 法)による放射性炭素年代測定を委託して行った。分析結果では大溝 315SD に直接関係する年代データは得られなかった。試料の遺存状況は良好ではなく、基本的に大溝内は乾燥した状態が継続した空壕であったと考えられる。

土坑 330SK は戦国期大溝 315SD 構築以前に掘削された遺構であり 16 世紀初頭の瀬戸・美濃窯産陶器が出土している。共伴する板材(試料 No.1)はより古い年代を示した。建物基礎構造物撤去面での 315SD 検出面で採取した板材(試料 No.2)は現代の攪乱遺物の混入である。試料 No.3 は 315SD

壁面の葦簀の痕跡から採取したものであるが、繊維質は既に失われており有効なデータは得られなかった。以下にパレオ・ラボの分析報告を提示する。

### 「放射性炭素年代測定」

AMS 年代測定グループ(伊藤 茂・加藤和浩・佐藤正教・廣田正史・山形秀樹・Zaur Lomtadze・小林克也)  
 (株)パレオ・ラボ

#### (1) 試料と方法

試料は、23B 区 330SK で出土した生材 1 点(試料 No.1: PLD-52730)、23Bd 区 315SD で出土した生材 1 点(試料 No.2: PLD-52731)と、繊維状試料を含む土壌 1 点(試料 No.3: PLD-52732)の、計 3 点である。試料 No.1、2 の生材は、最終形成年輪が残っていないが、辺材部が残っ

表 8 測定試料および処理

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
PLD-52730	試料No. 1 調査区：23B 遺構：330SK 遺物No. d-163	種類：生材 試料の性状：辺材部 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム：1.0 mol/L, 塩酸：1.2 mol/L)
PLD-52731	試料No. 2 調査区：23Bd 遺構：315SD 層位：上層 遺物No. d-	種類：生材 試料の性状：辺材部 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム：1.0 mol/L, 塩酸：1.2 mol/L)
PLD-52732	試料No. 3 調査区：23Bd 遺構：315SD	種類：土壌 状態：dry	湿式篩分：106 μm 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム：1.0 mol/L, 塩酸：1.2 mol/L)

表 9 放射性炭素年代測定および暦年較正結果

測定番号	δ <sup>13</sup> C (‰)	暦年較正用年代 (yrBP ± 1σ)	<sup>14</sup> C 年代 (yrBP ± 1σ)	<sup>14</sup> C年代を暦年代に較正した年代範囲	
				1σ 暦年代範囲	2σ 暦年代範囲
PLD-52730 試料No. 1 330SK	-24.41 ± 0.14	882 ± 18	880 ± 20	1163-1180 cal AD (29.93%) 1187-1211 cal AD (38.34%)	1053-1076 cal AD (7.76%) 1156-1219 cal AD (87.69%)
PLD-52731 試料No. 2 315SD	-25.42 ± 0.13	129 ± 17	130 ± 15	Post-bomb NH <sub>2</sub> curve (Hua et al 2021, Reimer et al 2020): 1688-1700 cal AD (7.59%) 1721-1730 cal AD (5.59%) 1808-1815 cal AD (4.51%) 1834-1890 cal AD (39.21%) 1907-1925 cal AD (11.16%) 1954-1954 cal AD (0.20%)	Post-bomb NH <sub>2</sub> curve (Hua et al 2021, Reimer et al 2020): 1683-1737 cal AD (23.69%) 1755-1761 cal AD (1.17%) 1801-1930 cal AD (68.66%) 1932-1939 cal AD (1.29%) 1953-1955 cal AD (0.64%)
PLD-52732 試料No. 3 315SD	-22.26 ± 0.14	6452 ± 23	6450 ± 25	5473-5468 cal BC (5.97%) 5444-5425 cal BC (21.52%) 5419-5382 cal BC (40.78%)	5475-5373 cal BC (95.45%)

ていた。また試料 No.3 は、繊維状試料の劣化が著しく、土壌扱いとして測定を行った。測定試料の情報、調製データは表 8 のとおりである。

試料は調製後、加速器質量分析計（パレオ・ラボ、コンパクト AMS：NEC 製 1.5SDH）を用いて測定した。得られた <sup>14</sup>C 濃度について同位体分別効果の補正を行った後、<sup>14</sup>C 年代、暦年代を算出した。

(2) 結果

表 9 に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比 (δ<sup>13</sup>C)、同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値と較正によって得られた年代範囲、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した <sup>14</sup>C 年代を示す。暦年較正に用いた年代値は下 1 桁を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が更新され

た際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

<sup>14</sup>C 年代は AD1950 年を基点にして何年前かを示した年代である。<sup>14</sup>C 年代 (yrBP) の算出には、<sup>14</sup>C の半減期として Libby の半減期 5568 年を使用した。また、付記した <sup>14</sup>C 年代誤差 (± 1σ) は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の <sup>14</sup>C 年代がその <sup>14</sup>C 年代誤差内に入る確率が 68.27%であることを示す。

なお、暦年較正の詳細は以下のとおりである。

暦年較正とは、大気中の <sup>14</sup>C 濃度が一定で半減期が 5568 年として算出された <sup>14</sup>C 年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の <sup>14</sup>C 濃度の変動、および半減期の違い (<sup>14</sup>C の半減期

5730 ± 40 年) を較正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。

$^{14}\text{C}$  年代の暦年較正には OxCal4.4 (較正曲線データ: IntCal20、暦年較正結果が 1950 年以降にのびる試料については Post-bomb atmospheric NH2) を使用した。なお、1  $\sigma$  暦年代範囲は、OxCal の確率法を使用して算出された  $^{14}\text{C}$  年代誤差に相当する 68.27% 信頼限界の暦年代範囲であり、同様に 2  $\sigma$  暦年代範囲は 95.45% 信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は  $^{14}\text{C}$  年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。

### (3) 考察

以下、2  $\sigma$  暦年代範囲 (確率 95.45%) に着目して遺構ごとに結果を整理する。なお木材の場合、最終形成年輪部分を測定すると枯死もしくは伐採年代が得られるが、内側の年輪を測定すると、最終形成年輪から内側であるほど古い年代が得られる (古木効果)。試料 No.1、2 は最終形成年輪を含めて測定が行われていないが、辺材部について測定が行われている。そのため、いずれも古木効果の影響を僅かに受けていると考えられ、実際に枯死もしくは伐採された年代は、測定結果よりも僅かに新しい年代であると考えられる。

23B 区 330SK の生材である試料 No.1 (PLD-52730) は、1053-1076 cal AD (7.76%) および 1156-1219 cal AD (87.69%) で、11 世紀中頃～後半および 12 世紀中頃～13 世紀前半の暦年代を示した。これは、平安時代後期～鎌倉時代に相当する。

23Bd 区 315SD の、生材である試料 No.2 (PLD-52731) は、1683-1737 cal AD (23.69%)、1755-1761 cal AD (1.17%)、1801-1930 cal AD (68.66%)、1932-1939 cal AD (1.29%)、1953-1955 cal AD (0.64%) で、17 世紀後半～20 世紀中頃の暦年代を示した。これは、江戸時代前期～昭和時代に相当する。

同じく 23Bd 区 315SD の繊維状試料を含む土壌 (試料 No.3: PLD-52732) は、5475-5373 cal BC (95.45%) となった。これは、繊維状試料の時期ではなく、土壌中の有機質の影響を強く受けた結果と考えられる。

### 【参考文献】

- Bronk Ramsey, C. (2009) Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. *Radiocarbon*, 51(1), 337-360.
- Hua, Q., Turnbull, J., Santos, G., Rakowski, A., Ancapichún, S., De Pol-Holz, Hammer, S., Lehman, S., Levin, I., Miller, J., Palmer, J., Turney, C. (2021) Atmospheric Radiocarbon for the Period 1950-2019. *Radiocarbon*, 64(4), 723-745. doi:10.1017/RDC.2021.95. <https://doi.org/10.1017/RDC.2021.95> (cited 23 November 2021)
- 中村俊夫 (2000) 放射性炭素年代測定法の基礎。日本先史時代の  $^{14}\text{C}$  年代編集委員会編「日本先史時代の  $^{14}\text{C}$  年代」: 3-20, 日本第四紀学会。
- Reimer, P.J., Austin, W.E.N., Bard, E., Bayliss, A., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Butzin, M., Cheng, H., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Hajdas, I., Heaton, T.J., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kromer, B., Manning, S.W., Muscheler, R., Palmer, J.G., Pearson, C., van der Plicht, J., Reimer, R.W., Richards, D.A., Scott, E.M., Southon, J.R., Turney, C.S.M., Wacker, L., Adolphi, F., Büntgen, U., Capano, M., Fahrni, S.M., Fogtmann-Schulz, A., Friedrich, R., Köhler, P., Kudsk, S., Miyake, F., Olsen, J., Reinig, F., Sakamoto, M., Sookdeo, A. and Talamo, S. (2020) The IntCal20 Northern Hemisphere radiocarbon age calibration curve (0-55 cal kBP). *Radiocarbon*, 62(4), 725-757, doi:10.1017/RDC.2020.41. <https://doi.org/10.1017/RDC.2020.41> (cited 12 August 2020)

## 第6章 総括

### 1 戦国期区画溝と「惣構」

23A 区で確認した大型の溝 060SD、120SD-b と 23B 区 315SD は一連の同一遺構であることが明らかとなった。東西方向の溝の検出長はおおよそ 103m、東端の 060SD で北へ折れ曲がる。断面は逆台形をなし上端幅は推定 11.0m、検出面の標高は 12.0m、底面標高は平均して 7.3m であり、深さ 4.7m 規模の大型の溝である。

ここでは名古屋城三の丸遺跡でこれまでに確認されている同程度の規模の 2カ所の遺構について取り上げ詳細を検討する。

まず北側に接する三の丸庁舎地点 (No.8) の南北方向の溝 SD602 は 23A 区 060SD の延長上にあり、同一遺構とみられる。上端幅は推定で 11.2m、底面の標高は 315SD とほぼ同じで、深さは 4.3m である。上層埋土の堆積状況より遺構西側に土塁が想定されたため、逆 L 字状に曲がる大溝の北西側が区画の内側になると考えられる。もう 1カ所は 23A・23B 区から西へ 180m ほど西に離れた簡易家庭裁判所地点 (No.4) の SD501 である。溝の西端が確定し東西方向に 50m、調査区東端で南へ逆 L 字状に折れる 25m の範囲が確認されている。上端幅は 13.0m、深さは 4.0～4.5m、底面の標高は 5.8m であり湧水が認められたという。こちらも上層埋土の堆積状況より遺構の北側に土塁が想定される。この SD501 は 315SD よりも規模が大きく、全体に底面の標高も低くなっている。溝埋土の状況を比較すると、SD501 では標高 10m の辺りでおそらく近世段階の整地による改変が認められる。これは東側の 23A・B 区 (12.0m) や SD602 (11.0m) よりも低く、旧地形の高低が影響している可能性がある<sup>注1</sup>。

次に名古屋城三の丸遺跡で検出された古瀬戸後期～大窯第 3 段階とされる遺構 (溝) の位置と規模を図 30,31 に示す。東西方向の溝 SD501、315SD はほぼ同じ軸線方向であることから、接続する一連の施設である可能性は高いと考えられる。SD501 西端から 23A 区 060SD までは約 350m ほどの距離があり、仮にこれらが一連の施設とするならば、那古野城の中心域を含む広大な領域の南側外縁部を画するいわゆる「惣構」に相当する施設と考えられよう。

この 315SD の構築時期は、23B 区で重複する 329SE と 330SK 出土遺物からは大窯第 2 段階以降と考えられる。また、315SD 埋土の III 層は滞水下の自然堆積によるものであり、一定期間開口していたことを示している。その間も III 層堆積層の乱れや II 層上位の畦状遺構にみられるように人為的な改変があったことは明らかであり、大窯第 3 段階の遺物が検出されている。土塁を伴う防御施設として機能していた期間は 16 世紀第 4 四半期を中心とした時期とみられ、大溝が全て埋め戻されたのはおそらく近世の名古屋城域の整備の際と考えられる。

### 2 鍛冶関連遺物の分布

第 4 章において「鍛冶関連資料」として取り上げた通り、23B 区では、大溝 315SD のほか、井戸 (320SE,321SE,329SE) から戦国期の遺物に混じりフイゴの羽口や多数の鉄滓 (椀型滓) が出土している。それらの井戸の位置は、戦国期の屋敷地区画溝 (23A 区 121SD,122SD) の東側 (屋敷の外側)、かつ大溝 315SD よりも南側 (外側) に相当する。16 世紀前半を中心としたある時期、集中的に鍛冶関連の作業が行われていたことを示す資料と位置付けられる。

### 3 武家屋敷内の空間利用

屋敷地 1 (東側) と屋敷地 2 (西側) 内部空間について、江戸時代の廃棄土坑、井戸、庭園関連遺構などの 23A 区調査成果に井戸を追加したものを示す (図 30)。井戸の配置の様相はそれぞれに異なり、屋敷地 2 では複数の井戸が集中して掘削されている。建物配置があまり変化せず長期に亘り比較的広い空間が確保されていたとみられる。一方、屋敷地 1 では調査範囲内では 1 基と少ない。台地上の井戸の掘削は湧水層までが深く、技術的にも容易ではなかったと思われる。建物配置の変更に伴う制約とともに、井戸の設置件数にも居住者の階層差が現れてくる可能性も考えられる。

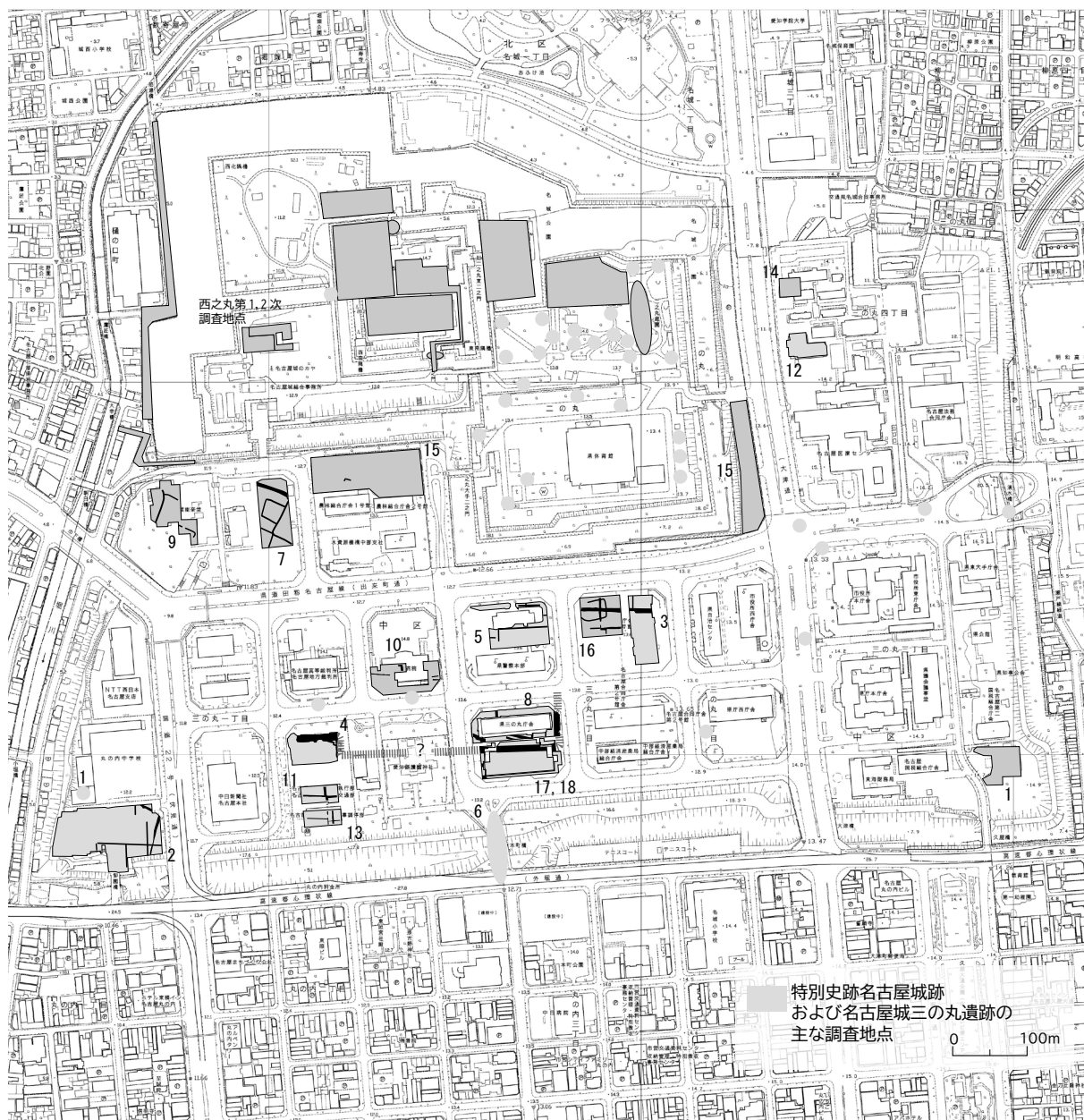


図 30 名古屋城三の丸遺跡の戦国期溝（堀）の分布

【注・参考文献】

注1：No.4 北側の中小路に相当する範囲の東西方向のトレンチ状の調査では、東から西に緩やかに傾斜する近世の整地層が確認されている。小畑直輝編,2002,『名古屋城三の丸遺跡—ガス管理設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—』東邦ガス株式会社  
金子健一編,1992,『名古屋城三の丸遺跡 III』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 37 集  
名古屋市見晴台考古資料館,1994,『名古屋城三の丸遺跡 第4・5次発掘調査—遺構編—』名古屋市教育委員会  
松田 訓編,1995,『名古屋城三の丸遺跡 V』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 60 集  
伊藤厚史,1997,『名古屋城三の丸遺跡 第8・9次発掘調査概要報告書』名古屋市教育委員会

田中城久,2015,『名古屋城三の丸遺跡 金シャチ横丁事業に伴う発掘調査報告書』名古屋市民経済局 名古屋城総合事務所  
木村有作,2016,『特別史跡名古屋城跡発掘調査報告書(名古屋城西之丸発掘調査)』名古屋市教育委員会  
水野裕之,2017,『名古屋城三の丸遺跡 第12次発掘調査報告書(中央新幹線「名城非常口」地点)』名古屋市教育委員会  
野澤剛幸・安孫子雅史,2018,『埋蔵文化財調査報告書 81 特別史跡名古屋城跡西之丸(第2次)』名古屋市教育委員会  
松田 訓,2002,「遺構からみた那古野城の残影」『研究紀要 3』愛知県埋蔵文化財センター  
松田 訓,2006,「尾張の守護所関連遺跡 那古野」『守護所と戦国城下町』高志書院

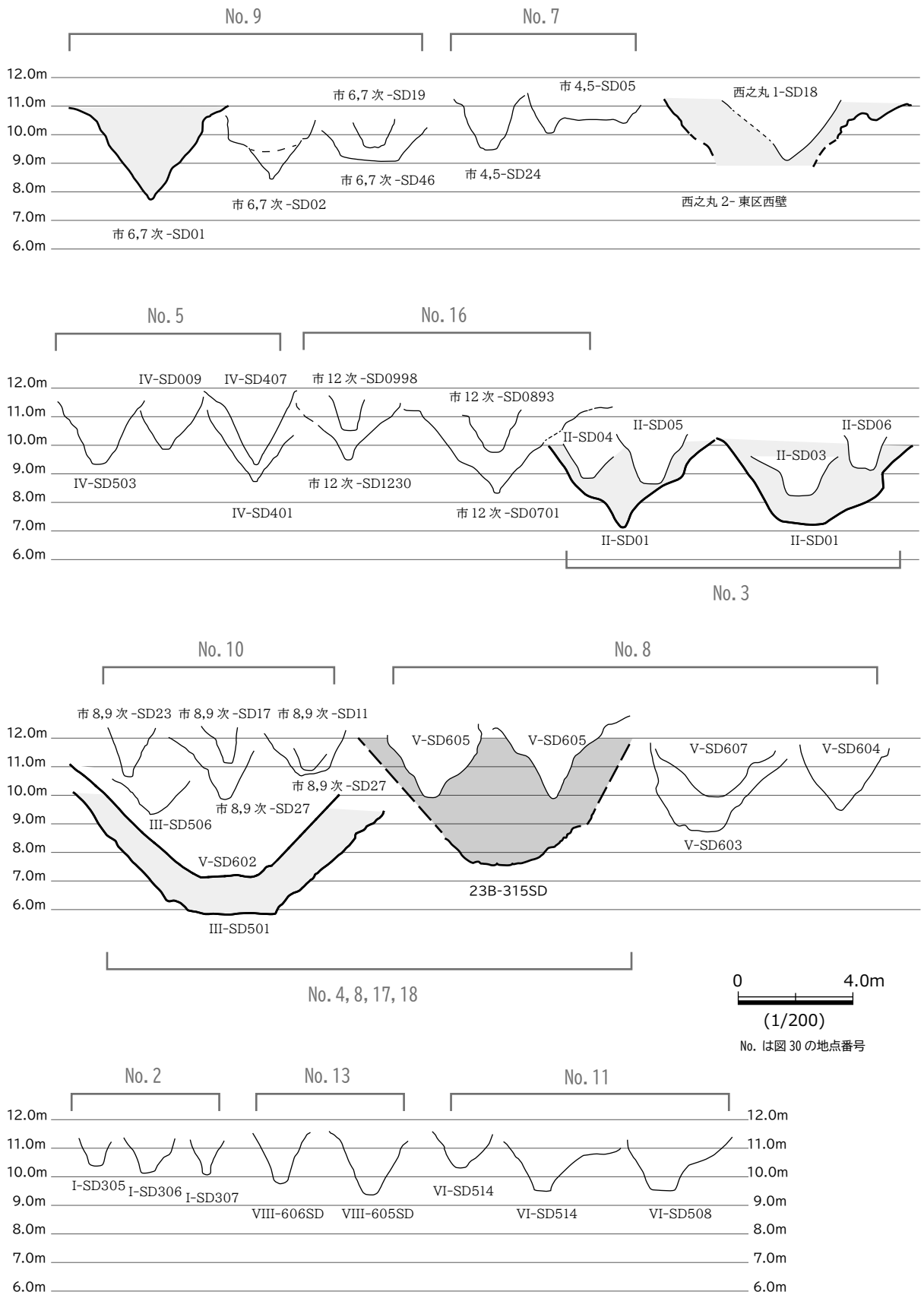


図 31 室町時代から戦国期の溝（堀）断面形状と標高（縮尺 1/200）

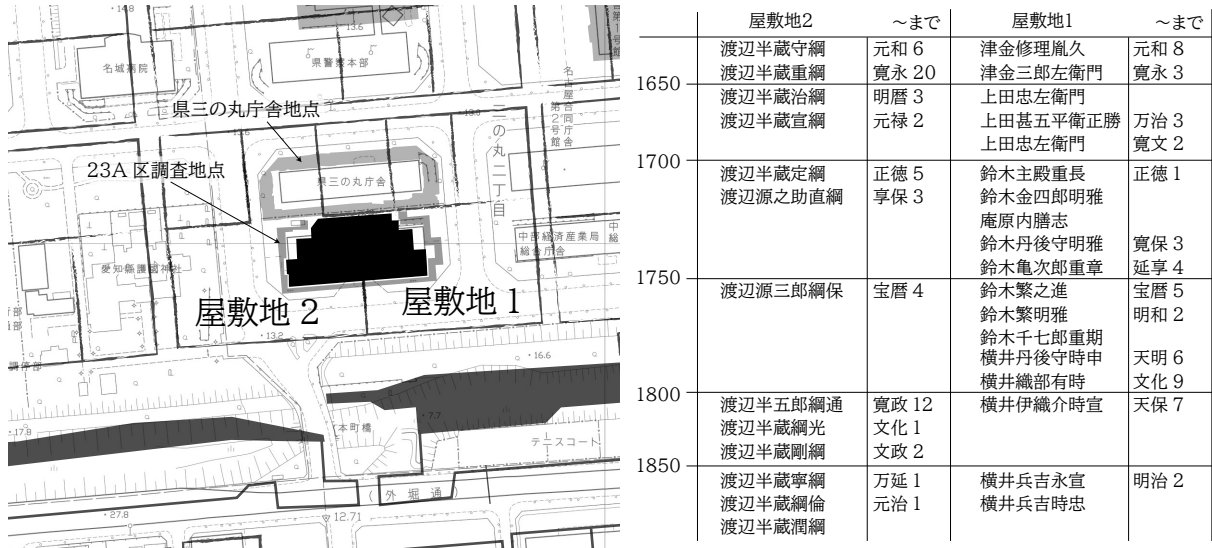


図 32 屋敷割の推定範囲と居住者の変遷

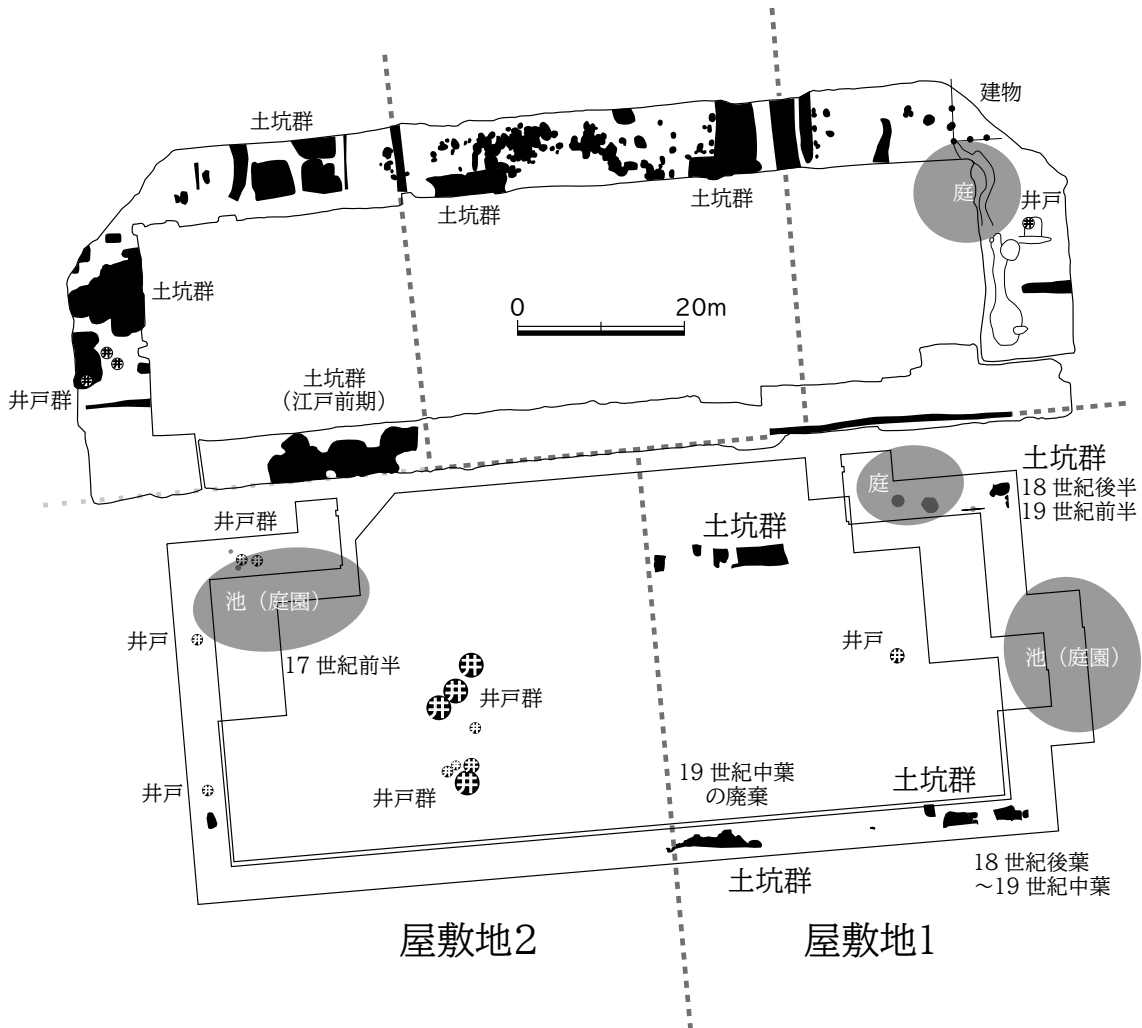


図 33 武家屋敷内の主要遺構配置図 (23A,23B 区および三の丸庁舎地点)

遺構一覧表

調査区	グリッド (5m)	遺構No.	長軸 (m)	単軸 (m)	深さ (m)	底面標高 (T.P.)	土器 陶磁器	瓦	常滑窯 製品	備考
23Ba	000180	301SE	3.52	3.42	-2.42	*6.103	●	●	●	
23Ba	000180_0 05180	302SE	3.03	2.64	-2.62	*5.832	○	○		
23Ba	005180_0 05185	303SE	2.46	2.23	-2.08	*6.359	○	○		
23Ba	005180_0 05175	304SE	1.4	1.31	1.12	7.351	○	○		
23Ba	010180_0 15180	305SX				-	○	○		
23Ba	010180	306SE	1.36	1.34	-	*7.282	●	●	○	
23Ba	010180_0 15180	307SK	2.61	-1	-	-				
23Ba	010180	308SE	1.05	0.89	-0.74	7.749	○	○		
23Ba	005185	309SK	1.12	0.71	0.07	8.310		○		攪乱
23Ba	005200	310SK*	-1.94	1.98	0.27	8.233				攪乱
23Ba	010180	311SE	2.23	-1.37	-	*7.198	○			
23Ba	015180	312SE	1.9	1.07	-	*6.64				
23Ba	015180	313SE	-1.77	1.52	-	-	○	○		
23Ba	010180	314SK	3.17	-	-	-				
23Bb. Bd	南西端 990190_ 北東端 985135	315SD	-57.1	-5.4	-2.7	*7.25	○	○		戦国大溝
23Ba. Bd	990170	315SD畝1	3.45	1.05	高さ0.08	8.106				
23Ba. Bd	990165	315SD畝2	3.15	0.95	高さ0.07	8.095				戦国大溝 埋没直前
23Ba. Bd	990155	315SD畝3		-	-	-				の面
23Ba. Bd	990150	315SD畝4		-	-	8.086				
23Bd	985155	317SD	-1.93	1.2	0.09	10.225	●	●	●	
23Bd	985150	318SK	-1.46	0.99	0.34	10.112	●	●	●	
23Bd	985150	319SX	-2.57	1.74	0.79	9.512				
23Be	010165	320SE	-2.8	2.67	-1.65	*6.761	●			鉄滓
23Be	005125_0 10125_00 5130_010 130	321SE	3.59	3.45	-1.44	*6.595	○			
23Bd	985150	322SD	-2.55	-0.39	0.22	10.2	○	○		
23Bd	985150	323SX	-1.64	-0.38	0.17	10.3				
23Bd	985140_9 85145	324SX	5.71	-2.25	0.7	9.746	●	●	○	
23Be	000130	328SE	1.95	1.8	-1.57	*6.512	○	○		
23Be	995165	329SE	2.45	-1.02	-0.31	*8.055	○			
23Bd	990170	330SK	1.1	0.96	0.53	6.785	○			315SD底面
23Bd	985145	331SK	-1	-0.42	0.18	10.223				上面

\*遺物の有無、多寡：●多い／○あり

【中世・近世陶磁器の時期区分参考資料】

瀬戸・美濃窯製品

井上喜久男,1992,『尾張陶磁』ニューサイエンス社

… (大窯 I ~ V)

2007,『愛知県史 別編 窯業 2』中世・近世 瀬戸系

… (古瀬戸前期~後期)

… (大窯1~4)

… (連房式登窯第1~11小期)

江戸前期：連房第1~第4小期

江戸中期：連房第5~第7小期

江戸後期：連房第8~第11小期

常滑窯製品

2012,『愛知県史 別編 窯業 3』中世・近世 常滑系

## 登録遺物一覧表 (1)

登録 番号	23	遺構No	器種	備考 (時期ほか)	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	残存率		位置座標	グリッド
								口縁	底部		
001	Bd	315SD上層 (畝2東) d-127	須恵器蓋	猿投窯, 8世紀						X -90989.539 Y -24165.953 Z 8.234	985165
002	Bb	315SD表土	須恵器甕	外面タタキ			*4.8				
003	Bd	315SD中層 d-130	須恵器甕	外面タタキ, 軟質の焼成						X -90989.021 Y -24159.265 Z 8.175	985155
004	Be	320SE	須恵器播鉢 (陶白)	猿投窯, 降灰	16.4	-	*4.3	1			010165
005	Be	320SE (南東)	須恵器甕	外面タタキ, 降灰			*4.8				010165
006	Be	320SE	須恵器甕	外面タタキ, 内面摩滅			*6.7				010165
007	Ba	308SE (北半)	土器円筒埴輪	土師質			*4				010165
008	Bd	324SX (東)	須恵器高杯脚	猿投窯, 降灰			*4.6				985145
009	Bd	315SD下層 (畝4東)	陶器天目茶碗	瀬戸・美濃, 鉄釉+灰釉, 1490-1530 (大窯I)	11.8	-	*4.4	2			
010	Bd	315SD下層	陶器天目茶碗	瀬戸・美濃, 鉄釉, 被熱, 1490-1530 (大窯I)	10.8	-	*2.7	2			
011	Bd	315SD中層 (畝5・6間)	陶器天目茶碗	瀬戸・美濃, 鉄釉+灰釉, 腰錆, 1490-1530 (大窯I)	11.0	-	*5.4	2			
012	Bd	315SD (畝5東) d-161	陶器天目茶碗	瀬戸・美濃, 腰錆, 1530-1550 (大窯IIa)		4.4	*1.6		11	X -90989.015 Y -24152.603 Z 8.138	
013	Bd	315SD中層 (畝4西)	陶器天目茶碗	瀬戸・美濃, 鉄釉, 腰錆, 被熱, 1490-1530 (大窯I)		4.0	*2.7		11		990156
014	Bb	315SD	陶器丸皿	瀬戸・美濃, 鉄釉	12	-	*2.6	1			
015	Bd	315SD	陶器丸皿	瀬戸・美濃, 焼締, 1490-1530 (大窯I)	10.0	4.1	2.2	1	11		990160
016	Bd	315SD中層 d-148	陶器丸皿	瀬戸・美濃, 無釉, 灯明皿	10.0	4.5	2.6	5	1	X -90991.704 Y -24159.01 Z 7.724	
017	Bd	315SD中層 d-145	陶器丸皿	瀬戸・美濃, 無釉, 灯明皿	10.2	4.2	2.7	2	3	X -90991.973 Y -24167.807 Z 7.807	
018	Bd	315SD d-133	陶器丸皿	瀬戸・美濃, 焼締, 灯明皿	10.1	4.6	2.8	2	4	X -90990.64 Y -24161.502 Z 7.961	990160
019	Bd	315SD下層	陶器丸皿	瀬戸・美濃, 焼締, 灯明皿	10.8	-	*1.9	2			
020	Bd	315SD中層 (畝5・6間)	山茶碗 (東濃型)	生田, 15世紀第4四半期	9.0	3.6	1.8	2	3		
021	Bd	315SD	土師器皿	ロク口成形	9.8	-	*2	2			
022	Bd	315SD上層 (混入)	磁器小杯	近代	6.4	-	*4.3	3			
023	Bd	315SD下層 (畝4東)	陶器容器	瀬戸・美濃, 外面鉄釉・灰釉/内面錆釉		15.2	*4.3		3		
024	Bd	315SD上層 (畝2) d-126	陶器播鉢	瀬戸・美濃, 錆釉, 1490-1530 (大窯I)	30.8	-	*4.0	1	X -90988.406 Y -24166.881 Z 9.067	985165	
025	Bd	315SD中層	陶器播鉢	瀬戸・美濃, 錆釉, 1570-1580 (大窯III)	31.5	-	*6.3	1			
026	Bd	315SD中層 d-137	陶器播鉢	瀬戸・美濃, 錆釉, 1570-1580 (大窯III)	29.0	-	*5.2	1	X -90991.408 Y -24161.077 Z 7.85	990160	
027	Bd	315SD中層以下 (畝1西)	陶器播鉢	瀬戸・美濃, 錆釉		9.1	*5.4		4		
028	Bd	315SD中層 (畝5東) d-160	陶器播鉢	瀬戸・美濃, 錆釉, 1530-1550 (大窯IIa)		10.6	*10.7		11	X -90990.076 Y -24151.801 Z 7.537	
029	Bd	315SD中層 (畝2西) d-153	陶器甕	瀬戸・美濃, 鉄錆釉, 1490-1510 (大窯IIa)	19.7	-	*4.6	1	X -90991.526 Y -24167.27 Z 8.098	990165	
030	Bd	315SD中層 (畝4ベルト) d-159	陶器大甕	常滑窯, 15世紀後半 (10型式)	42.2	-	*11.4	2	X -90990.07 Y -24159.294 Z 7.612		
031	Bd	315SD上層 d-139	土器内耳鍋	内面上部ハケメ, ほかナデ調整, 外面にスス	27.3	-	*4.1	2	X -90991.94 Y -24167.248 Z 8.154	990165	
032	Bd	315SD中層	土器内耳鍋	内面上部ハケメ, ほかナデ調整, 外面にスス			*3.7	1			990160
033	Ba	301SE井筒内	馬の目皿	瀬戸・美濃, 鉄釉+灰釉, 削り出し高台, 外面高台内墨書「表」	33.0	17.0	6.3	2	7		000180
034	Ba	301SE井筒内	陶器織部鉢	瀬戸, 赤津織部, 18世紀末頃-19世紀初め (連房8, 9小期)	22.8	16.2	8.1	4	12		000180
035	Ba	301SE井筒内	陶器播鉢	瀬戸・美濃, 鉄釉, 19世紀半ば (連房11小期)	36.0	15.2	15.7	2	12		000180
036	Ba	301SE井筒内	青花皿	中国 (漳州窯)	17.6	-	*2.3	2			000180
037	Ba	301SE井筒内	磁器染付徳利	瀬戸, 19世紀第2四半期 (連房10小期)		3.6	*8.7		12		000180
038	Ba	301SE井筒内	陶器容器	外面高台付近を除き鉄釉, 高台内に印		30.0	*6.6		5		000180
039	Ba	301SE井筒内	陶器大甕	常滑, 19世紀	47.2	-	*9.3	4			000180
040	Ba	301SE井筒内	陶器甕	瀬戸・美濃, 半胴甕, 鉄釉, 流し掛け, 江戸中期	26.6	-	*18.0	3			000180
041	Ba	301SE井筒内 d-102	陶器火鉢	外面鉄釉, 内面錆釉, 三足が付く, 江戸後期		25.2	*7.9		8	X -91001.118 Y -24180.268 Z 8.279	000180
042	Ba	301SE井筒内	陶製 (器種不明)	底面を除き鉄釉, 近代か	77.2	79.0	12.1				000180
043	Ba	302SE掘かた	磁器染付小杯	肥前	6.6	2.6	4.3	2	4		005180
044	Ba	302SE掘かた	陶器碗	瀬戸・美濃, 高台付近を除き鉄釉, 貼付高台		3.5	*2.5		7		005180
045	Ba	302SE掘かた	土器焼塩壺	焼塩壺, 輪積み成形, 内面塩焼け, 17世紀		3.8	*2		2		005180
046	Ba	302SE掘かた	陶器碗	肥前, 京焼風碗	12.4	-	*3.3	3			005180
047	Ba	302SE掘かた	土師器皿	ロク口成形, 底面に穿孔1		5	*1		6		005180
048	Ba	302SE掘かた	陶器皿	美濃, 小型笠原鉢, 17世紀第2四半期	25.5	15.3	4.5	2	3		005180
049	Ba	303SE	陶器丸碗	京信楽, 透明釉, 上絵付	11.2	-	*4.9	2			005180
050	Ba	303SE	陶器碗	産地不明, 灰釉		5.3	3.6		3		005180
051	Ba	303SE東半	陶器平碗	産地不明, 灰釉	11.8	-	*3.8	2			005180
052	Ba	303SE東半	陶器碗	瀬戸・美濃, 高台付近を除き灰釉		2.8	*1.4		12		005180

## 登録遺物一覧表(2)

登録 番号	23	遺構No	器種	備考(時期ほか)	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	残存率		位置座標	グリッド
								口縁	底部		
053	Ba	303SE掘かた	磁器染付碗	肥前	-	3.8	*1.7	-	11		005180
054	Ba	303SE掘かた	土師器皿	ロクロ成形	8.5	4	2.1	2	3		005180
055	Ba	304SE d-101	陶器碗	肥前,京焼風碗,高台内印「小松吉」	-	4.8	*1.4	-	7	X -91008.598 Y -24180.388 Z 8.406	005180
056	Ba	304SE井筒内	磁器染付蓋付鉢	肥前,花唐草文,18世紀末-19世紀半ば	14.0	-	*5.3	3	-		005180
057	Ba	305SX南西部	土器内耳鍋	外面にスス	26.0	-	*7.8	5	-		005180
058	Ba	305SXトレンチ (黒色土層)	土師器皿	手づくね	5	4.8	1.4	11	10		005180
059	Ba	306SE井筒内	陶器丸碗	瀬戸・美濃,鉄釉+灰釉,尾呂茶碗,江戸中期	11.4	-	*5.3	1	-		010180
060	Ba	306SE井筒内	陶器丸碗	瀬戸・美濃,鉄釉+ウノフ釉,尾呂茶碗, 江戸中期	12	-	*5.2	1	-		010180
061	Ba	306SE井筒内	陶器丸碗	瀬戸・美濃,鉄釉+灰釉,尾呂茶碗,江戸中期	-	5.4	*6.25	-	12		010180
062	Ba	306SE(北半)	陶器丸碗	瀬戸・美濃,鉄釉+ウノフ釉,尾呂茶碗, 江戸中期	10.9	-	*4.4	3	-		010180
063	Ba	306SE	陶器容器	産地・器種不明,灰釉,上絵付(赤)	5.2	-	*2.5	3	-		010180
064	Ba	306SE	陶器広東碗	瀬戸・美濃,陶胎染付,19世紀第2四半期 (連房10小期)	11.4	6.6	6.3	3	5		010180
065	Ba	306SE井筒内	磁器染付丸碗	肥前	11.3	-	*4.2	4	-		010180
066	Ba	306SE井筒内	磁器染付碗	肥前	10.9	-	*3.8	2	-		010180
067	Ba	306SE	陶器碗	瀬戸・美濃,長石釉総釉	-	4.4	*2.3	-	10		010180
068	Ba	306SE	磁器染付猪口	肥前,18世紀	7.0	4.4	5.9	3	8		010180
069	Ba	306SE井筒内	磁器染付碗	肥前,「大明成化年製」「大明」銘	10.9	4.1	5.4	3	12		010180
070	Ba	306SE	陶器播鉢	瀬戸・美濃,鉄釉,17世紀第3四半期後半 (連房4小期)	35.2	-	*4.9	2	-		010180
071	Ba	306SE	陶器播鉢	錆釉	23.2	-	*4.6	2	-		010180
072	Ba	306SE井筒内	土器焼塩壺	焼塩壺,輪積み成形,内面塩焼け,17世紀	5.2	4.0	9.2	12	12		010180
073	Be	306SE井筒内	陶器人形	京,鉄釉,透明釉,布袋	高(7.0)	幅(8.0)	厚(2.9)				010180
074	Ba	306SE井筒内	土器内耳鍋	18世紀末	24.8	-	*3.3	1	-		010180
075	Ba	306SE井筒内	土器内耳鍋	18世紀末	24.8	-	*5.0	1	-		010180
076	Ba	306SE	土器ホウロク	19世紀	-	-	*4.7	2	-		010180
077	Ba	306SE	円棒状土製品	器種不明,スス附着	*16.4	-	径*5.0				010180
078	Ba	306SE	円棒状土製品	器種不明	*10.4	-	径*5.2				010180
079	Ba	306SE	円棒状土製品	器種不明	*13.2	4.0	径*4.9				010180
080	Ba	308SE(北半)	陶器皿	瀬戸・美濃,灰釉+白濁釉,17世紀中葉	-	7.2	*2.4	-	4		010180
081	Ba	308SE	陶器筒形碗	瀬戸・美濃,鉄釉流し掛け,江戸中期	10.6	-	*6.5	1	-		010180
082	Ba	308SE(北半)	磁器染付碗	肥前	10.8	-	*4.8	2	-		010180
083	Ba	308SE d-108	磁器染付碗	肥前	12.7	-	*6.4	1	-	X -91013.153 Y -24182.209 Z 8.109	010180
084	Ba	308SE(北半)	磁器染付碗	肥前	12	-	*5.8	1	-		010180
085	Ba	308SE d-110	磁器碗	肥前,白磁に上絵付	11.9	-	*4.9	5	-	X -91013.342 Y -24182.361 Z 8.098	010180
086	Ba	308SE	磁器染付鉢	肥前	26.6	-	*3.9				010180
087	Ba	308SE(北半)	陶器播鉢	瀬戸・美濃,鉄釉,17世紀第4四半期 (連房4小期)	31.4	-	*5.6	1	-		010180
088	Ba	308SE(北半)	土器焼塩壺蓋	焼塩壺蓋,17世紀	6.8	-	1.5	9	-		010180
089	Ba	308SE d-111	土器焼塩壺	焼塩壺身,輪積み成形,内面塩焼け,17世紀	5.2	-	*6.1	1	-	X -91013.224 Y -24182.225 Z 8.09	010180
090	Ba	308SE(北半)	土器内耳鍋	外面にスス	-	-	*3.8	1	-		010180
091	Ba	308SE	土師器皿	ロクロ成形	13.6	9	2.7	2	4		010180
092	Ba	308SE	土師器皿	ロクロ成形	14.7	7	3	1	4		010180
093	Ba	308SE(北半)	土師器皿	ロクロ成形,スス附着	-	4.6	*1.3	-	5		010180
094	Ba	308SE(北半)	土師器皿	ロクロ成形,鉄錆附着	11	5.2	*2	2	-		010180
095	Ba	311SE西側砂層	瓦貫火鉢	-	-	-	*3.5	1	-		010180
096	Ba	313SE	磁器染付碗	肥前	10.9	-	*3.4	2	-		010180
097	Ba	313SE	磁器染付碗	肥前	12.8	-	*4.4	2	-		010180
098	Ba	313SE	陶器碗	外面鉄釉,内面灰釉,貼付高台	-	4.5	*3.1	-	9		010180
099	Ba	313SE	土師器皿	手づくね	5.2	5.0	1.0	7	7		010180
100	Ba	313SE	土師器皿	手づくね	5	4.8	1.5	12	12		010180
101	Ba	313SE	土師器皿	手づくね	4.6	4.4	1.3	8	10		010180
102	Ba	313SE	土師器皿	手づくね	5.1	5	1.5	10	10		010180
103	Ba	313SE	土器焼塩壺	焼塩壺,輪積み成形,内面塩焼け,17世紀	6.6	4.6	8.9	3	12		010180
104	Bd	317SD(黒斑層)	磁器染付皿	肥前	-	8.0	*1.4	-	1		985115
105	Bd	317SD(黒斑層)	磁器染付碗	肥前	10.2	-	*6	4	-		985115
106	Bd	317SD(黒斑層)	土師器皿	ロクロ成形	12.5	-	*2.8	2	-		985115
107	Bd	317SD(黒斑層)	土師器皿	ロクロ成形	10.7	-	*2.4	2	-		985115
108	Bd	317SD(南半)	陶器容器	瀬戸・美濃,外面鉄釉,内面錆釉	-	16.0	*3.8	1	-		985115
109	Bd	317SD(黒斑層)	陶器播鉢	瀬戸・美濃,錆釉,17世紀初め(連房1小期)	30.5	-	*3.7	1	-		985115
110	Be	318SK(北半)	陶器天目茶碗	瀬戸・美濃,鉄釉,江戸前期	11.7	4.3	6.9	7	12		985150
111	Bd	318SK(北半)	陶器碗	肥前,透明釉,京焼風碗	10.8	-	*4.75	2	-		985150
112	Be	318SK	陶器丸碗	瀬戸・美濃,黄瀬戸,腰鉢,16世紀末頃 (大窯末)	11.2	5.6	8.3	3	12		985150
113	Be	318SK	陶器丸碗	瀬戸・美濃,鉄釉,腰鉢,尾呂茶碗,江戸中期	-	4.7	*5.5	-	12		985150
114	Bd	318SK(一括)	陶器碗	瀬戸・美濃,練り込み,江戸中期	-	5.4	*2	-	12		985150
115	Bd	318SK(一括)	白磁鉢	中国	15	-	*3.9	2	-		985150
116	Be	318SK	陶器播鉢	瀬戸・美濃,鉄釉,17世紀末頃(連房5小期)	34	-	*4.8	1	-		985150
117	Bd	318SK(北半)	土器内耳鍋	外面にスス	28	-	*3.5	2	-		985150
118	Bd	318SK(北半)	陶器皿	瀬戸・美濃,灰釉,輪壳皿,江戸中期	12.6	-	*2.25	2	-		985150
119	Be	318SK	陶器餐盤	瀬戸・美濃,灰釉,江戸中期	長12.4	幅4.3	4.1	3	12		985150
120	Be	318SK	土師器皿	ロクロ成形	15.2	-	*2.7	1	-		985150

## 登録遺物一覧表(3)

登録 番号	23	遺構No	器種	備考(時期ほか)	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	残存率		位置座標	グリッド
								口縁	底部		
121	Bd	318SK(北半)	土師器皿	ロクロ成形	-	7	*2	-	7		985150
122	Be	318SK	土師器皿	ロクロ成形	10.1	4.8	2.2	2	7		985150
123	Be	318SK	土師器皿	ロクロ成形	-	5.2	*1	-	8		985150
124	Bd	319SX下層	陶器丸碗	瀬戸・美濃, 灰釉, 江戸中期	11	-	*5.6	2	-		985150
125	Bd	319SX下層	陶器丸皿	瀬戸・美濃, 志野, 16世紀末頃(大窯末)	11.1	6.6	2.3	7	12		985150
126	Bd	319SX	陶器鉄絵皿	瀬戸・美濃, 灰釉, 鉄絵, 江戸前期	-	6	*1.25	-	3		985150
127	Bd	319SX下層	陶器皿	瀬戸・美濃, 灰釉, 江戸前期	15	-	*2.5	2	-		985150
128	Bd	319SX下層	陶器向付	瀬戸・美濃, 志野, 鉄絵, 16世紀末頃(大窯末)	-	-	*2.7	-	-		985150
129	Bd	319SX下層	陶器鉄絵皿	瀬戸・美濃, 志野, 鉄絵, 17世紀前葉(連房初期)	13.2	8.2	2.6	4	6		985150
130	Bd	319SX下層	陶器丸皿	瀬戸・美濃, 志野, 灯明皿に使用, 16世紀末頃(大窯末)	12.6	8	2.5	2	2		985150
131	Bd	319SX(区画3)	陶器播鉢	瀬戸・美濃, 錆釉, 17世紀初め(連房1小期)	34	-	*7.8	2	-		985150
132	Bd	319SX下層	青花皿	中国	24.7	-	*2.9	1	-		985150
133	Bd	319SX(区画1)	陶器徳利か花瓶	瀬戸・美濃, 鉄釉	-	7.4	*2	-	9		985150
134	Bd	319SX下層	磁器染付碗	肥前	11.4	-	*4.4	4	-		985150
135	Bd	319SX(区画2)	土器内耳鍋	外面底面ケズリ調整, 外面スス, 17世紀	27.3	-	8.7	8	12		985150
136	Bd	319SX(区画3)	陶器容器	瀬戸・美濃, 灰釉+緑釉, 江戸後期	22.6	-	*4.2	2	-		985150
137	Bd	319SX	陶器播鉢	瀬戸・美濃, 錆釉, 16世紀	26	-	*5.7	1	-		985150
138	Be	320SE	陶器播鉢	瀬戸・美濃, 錆釉, 15世紀末~16世紀初(大窯1)	42	-	*3.3	1	-		010165
139	Be	320SE	陶器播鉢	瀬戸・美濃, 錆釉, 15世紀末~16世紀初(大窯1)	-	-	*4.7	1	-		010165
140	Be	320SE南北バルト	陶器播鉢	瀬戸・美濃, 錆釉, 15世紀末~16世紀初(大窯1)	28.4	-	*3.7	1	-		010165
141	Be	320SE(北東)	陶器播鉢	瀬戸・美濃, 錆釉, 16世紀半ば(大窯2)	31.2	-	*4.4	1	-		010165
142	Be	320SE(南西)	陶器播鉢	瀬戸・美濃, 錆釉, 15世紀末~16世紀初(大窯1)	-	12.6	*7.4	-	2		010165
143	Be	320SE	陶器天目茶碗	瀬戸・美濃, 錆釉, 1490-1510(大窯1a)	-	4.2	*2.7	-	11		010165
144	Be	320SE	陶器皿	灰釉, 見込に印花	-	5	*0.95	-	4		010165
145	Be	320SE	陶器灯明皿	瀬戸・美濃, 焼締, 灯明皿	9.1	4.3	2.2	1	4		010165
146	Be	320SE(北西)	土師器皿	手づくね	5	4.6	1.2	11	12		010165
147	Be	320SE	土師器皿	ロクロ成形	12.8	6.6	2.5	2	6		010165
148	Be	320SE(南東)	土器羽付鍋	内面上部ハケ, 外面スス	31.4	-	*5.2	1	-		010165
149	Be	320SE	土器内耳鍋	外面スス	24.6	-	*4.4	1	-		010165
150	Be	320SE	土器内耳鍋	外面スス	-	-	*5.1	1	-		010165
151	Be	320SE	陶器大皿	瀬戸・美濃, 錆釉, 16世紀第3四半期(大窯3)	26.3	-	*3.3	1	-		010165
152	Be	320SE	陶器徳利	瀬戸・美濃, 鉄釉二重掛け	-	11.6	*4.4	-	4		010165
153	Be	320SE d-155	陶器徳利	瀬戸・美濃, 鉄釉+灰釉	-	-	*9.8	-	X Y Z	-91012.454 -24168.19 7.66	010165
154	Be	321SE(南半)	陶器丸皿	瀬戸・美濃, 鉄釉, 1550-1570(大窯11b)	10.4	5.6	2.4	2	2		010125
155	Be	321SE(北半暗褐色土層)	陶器徳利	瀬戸・美濃, 錆釉+鉄釉	-	11.5	*5.7	-	7		010125
156	Be	321SE(北半暗褐色土層)	陶器播鉢	瀬戸・美濃, 鉄釉, 15世紀末~16世紀初(大窯1)	30.9	-	*12.1	1	-		010125
157	Bd	324SX(東)	陶器丸皿	瀬戸・美濃, 志野, 16世紀末頃(大窯末)	12.4	6.4	2.05	2	2		985145
158	Bd	324SX(東)	陶器皿	産地不明, 厚い長石釉, 貫入顕著	12.2	-	*2.5	2	-		985145
159	Bd	324SX(西)	陶器皿	灰釉, 印花	-	7.4	*1.2	-	2		985145
160	Bd	324SX(東)	磁器染付皿	初期伊万里, 17世紀初頭	13.2	4.3	1.5	4	6		985140
161	Bd	324SX(東)	青花皿	中国	-	-	*2.7	-	-		985140
162	Bd	324SX(西)	土鈴		最大径3.4		*2.9				985145
163	Bd	324SX	陶器播鉢	瀬戸・美濃, 錆釉, 16世紀末~17世紀初め	-	-	2.1	1	-		985140
164	Bd	324SX(東)	陶器播鉢	瀬戸・美濃, 錆釉	-	9	*5.9	-	3		985140
165	Bd	324SX(東)	陶器大皿	備前, 焼締, 17世紀前葉	27	22	6.5	1	2		985140
166	Be	328SE	陶器丸碗	瀬戸・美濃, うのふ釉, 江戸中期	13.3	-	*6.2	3	-		000130
167	Be	328SE	陶器碗	瀬戸・美濃, 灰釉, 高台周辺スス付着, 江戸中期	12.2	5.6	6.2	4	10		995125
168	Be	328SE	陶器碗	瀬戸・美濃, 灰釉, 御室茶碗, 江戸中期	11.6	5.8	7.7	6	6		995125
169	Be	328SE	陶器碗	瀬戸・美濃, 鉄釉, 尾呂茶碗, 江戸中期	-	5.2	*3.1	-	12		995125
170	Be	328SE	陶器碗	産地不明, 長石釉	-	5.2	*2.8	-	4		995125
171	Be	328SE	磁器染付碗	肥前	10.2	-	*4.0	2	-		995125
172	Be	328SE	陶器浅碗	瀬戸・美濃, 灰釉+鉄釉, 江戸中期	12.0	-	*3.7	2	-		995125
173	Be	328SE	陶器灯明皿	瀬戸・美濃, 鉄釉二重掛け, 碁笥底, 江戸中期	9.8	4.6	2.5	11	11		995125
174	Be	328SE(一括)	陶器灯明皿	瀬戸・美濃, 鉄釉+灰釉, 碁笥底, 江戸中期	10.4	4.6	2.4	12	12		995125
175	Be	328SE	陶器皿	唐津, 刷毛目輪軸皿, 17世紀後半	16.1	5.6	5.1	2	2		995125
176	Be	328SE	陶器容器蓋	瀬戸・美濃, 灰釉, 呉須絵	9.2	-	*1.8	5	-		995125
177	Be	328SE掘かた	陶器容器蓋	瀬戸・美濃, 灰釉	8.0	5.0	4.7	4	4		995125
178	Be	328SE	陶器鉢	瀬戸・美濃, 笠原鉢, 江戸前期	-	12.5	*6.0	-	2		995125
179	Be	328SE	陶器徳利	瀬戸・美濃, 徳利, 江戸中期	-	10.7	*8.5	-	2		995125
180	Be	328SE(西半)	陶器播鉢	瀬戸・美濃, 鉄釉, 18世紀第4四半期(連房8小期)	-	-	*3	1	-		915225
181	Be	328SE	土器火鉢	常滑, 18世紀	31.0	-	*8.4	1	-		995125
182	Be	328SE	土器火鉢	常滑, 18世紀	23.2	14.8	4.6	2	2		995125
183	Be	328SE井筒内	土師器皿	ロクロ成形, 内面黒色	12	6	2.7	2	6		995125
184	Be	328SE	土師器皿	ロクロ成形, 内外面黒色	12.6	6	2.8	6	12		998125
185	Be	328SE	土師器皿	ロクロ成形	11.5	5.4	2.5	1	5		995125
186	Be	328SE(東半)	土師器皿	ロクロ成形	9	5	2	2	5		995125
187	Be	328SE	土師器皿	ロクロ成形	8.4	4.9	1.8	1	5		995125
188	Be	328SE	土師器皿	ロクロ成形	8.7	5	1.9	3	2		995125

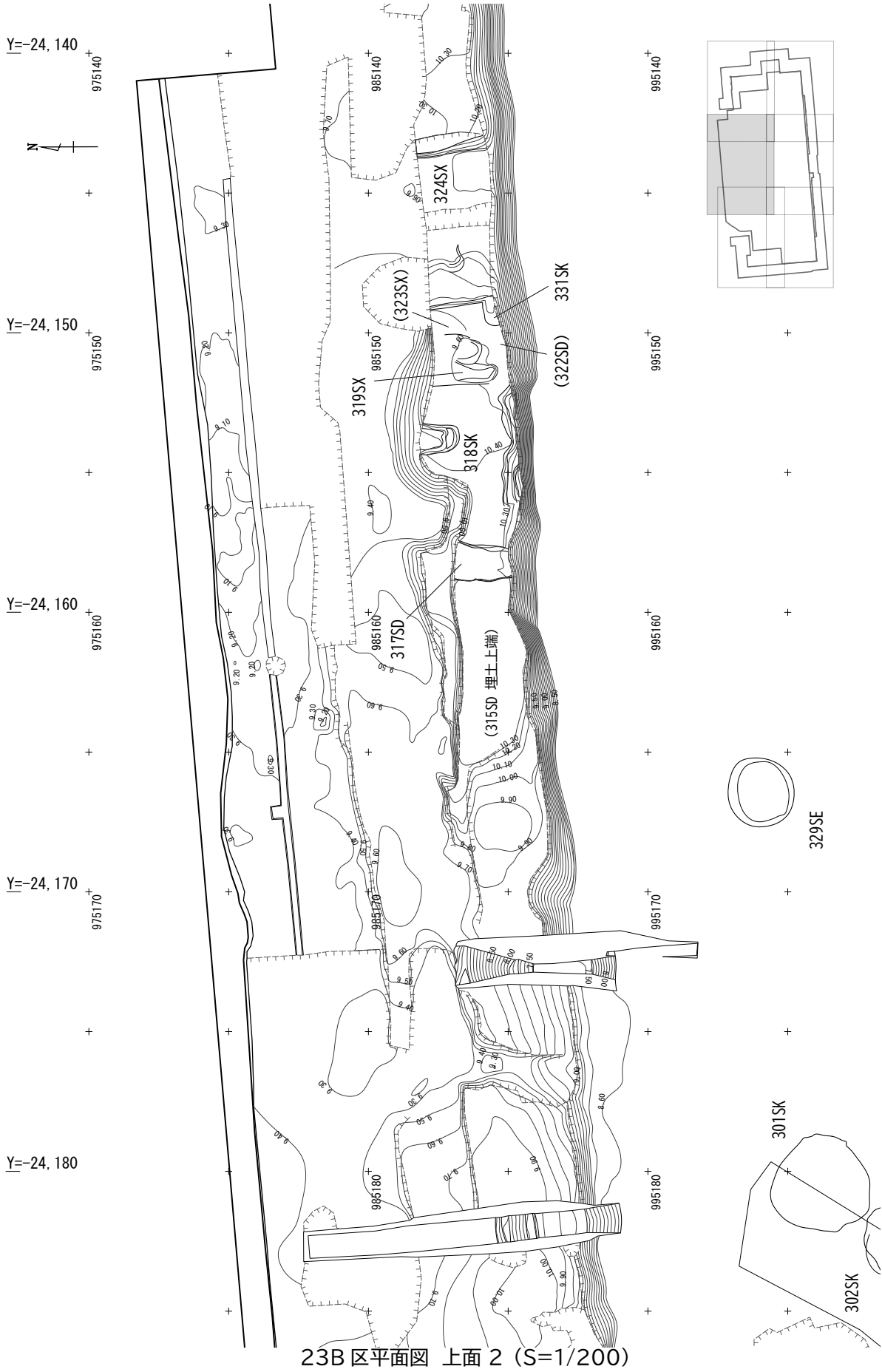
登録遺物一覧表(4)

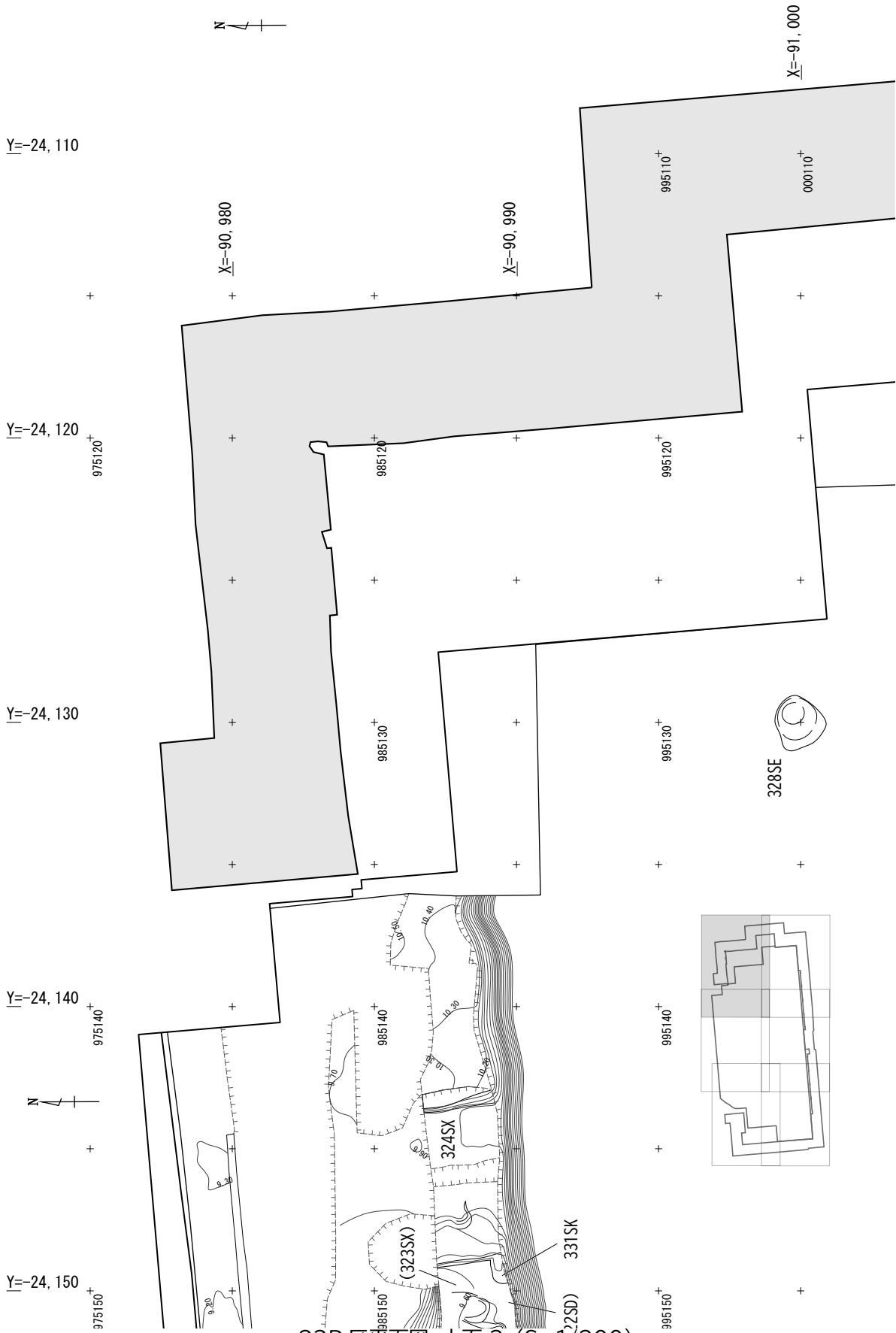
登録 番号	23	遺構No	器種	備考(時期ほか)	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	残存率		位置座標	グリッド
								口縁	底部		
189	Be	328SE	土師器皿	ロクロ成形, 灯明皿に使用	10.6	-	*1.5	2	-		995125
190	Be	328SE	土器釜		13.0	-	*4.5	3	-		995125
191	Be	328SE	土器鍋	焙烙, 外面スス	29.8	-	*3.7	1	-		995125
192	Be	329SE	陶器天目茶碗	瀬戸・美濃, 錆釉, 1490-1530(大窯I)	10.8	-	*3.9	1	-		995165
193	Be	329SE	陶器天目茶碗	瀬戸・美濃, 錆釉, 1490-1530(大窯I)	-	4.4	*2.2	-	4		995165
194	Be	329SE	陶器緑釉皿小皿	瀬戸・美濃, 灰釉緑釉小皿, 15世紀末頃	12.0	-	*1.9	1	-		995165
195	Be	329SE	陶器皿	焼締, 灯明皿	10.0	4.8	2.5	4	7		995165
196	Be	329SE	陶器播鉢	瀬戸・美濃, 錆釉, 15世紀末~16世紀初(大窯I)	29.8	-	*4.3	1	-		995165
197	Be	329SE	陶器播鉢	瀬戸・美濃, 錆釉	28.0	-	*2.3	2	-		995165
198	Be	329SE	陶器播鉢	瀬戸・美濃, 錆釉	-	8.4	*4.7	-	5		995165
199	Be	329SE	フイゴの羽口		長(7.8)	径(6.5)					995165
200	Be	329SE	フイゴの羽口		長(5.6)	径(7.2)					995165
201	Bd	330SK	陶器播鉢	瀬戸・美濃, 錆釉, 1490-1530(大窯I)	-	9.0	*3.8				990170
202	Bd	330SK	陶器皿	瀬戸・美濃, 灰釉丸皿か端反皿, 15世紀末~16世紀半ば(大窯1・2)	-	5.2	*1.0		4		990170
203	Bd	330SK d-164	陶器德利	瀬戸・美濃, 外面錆釉+灰釉, 内面錆釉, 底面被熱	-	12.6	*7.4	-	5	X Y Z -90991.445 -24171.52 6.832	990170
204	Be	攪乱	陶器天目茶碗	瀬戸・美濃, 鉄釉, 腰錆, 1490-1510(大窯1a)	12.0	4.4	7	4	12		
205	Be	攪乱	陶器仏具	瀬戸・美濃, 錆釉, (古瀬戸中期~大窯)	-	4.3	*3.75	-	12		
206	Bb	包含層(中央上段)	陶器丸碗	灰釉	12.8	-	*6	1	-		
207	Bb	包含層(中央上段)	陶器丸碗	灰釉	-	7	*6	-	4		
208	Bc	包含層	陶器天目茶碗	鉄釉	-	4	*2.5	-	12		
209	B	表探(調査区西側)	陶器碗	灰釉	-	4.2	*2.6	-	12		
210	Bd	攪乱(東側)	陶器碗	肥前, 透明釉呉器手碗	-	4.6	*2.8	-	12		985145
211	Ba	包含層	陶器碗	肥前, 京焼風碗, 江戸前期後半	-	5.2	*2.5	-	12		
212	Bc	包含層(H鋼北側)	磁器染付碗	肥前, 高台内「年製」	-	4.6	*3.6	-	4		
213	B	表探(調査区西側)	土師器皿	ロクロ成形, 灯明皿に使用	6.5	3.6	1.6	12	12		
214	Bb	包含層(中央上段)	陶器急須	常滑, 19世紀半ば	-	7.3	*1.9	-	3		
215	Bc	包含層(H鋼北側)	陶器容器	美濃, 灰釉, 鉄摺絵, 蓋物, 江戸中期(5,6小期)	16.8	14.2	6.6	3	3		
216	B	包含層(調査区西側)	陶器植木鉢	瀬戸・美濃, 鉄釉, 江戸後期	14.8	-	*5.7	2	-		
217	Bb	包含層(調査区西側)	陶器汁次	瀬戸・美濃, 鉄釉, 底面に墨書「口ノ 十月十一日」	-	4.5	*5.2	-	9		
218	Bc	包含層(H鋼北側)	陶器徳利か花瓶	産地不明, 灰釉	-	5.5	*9.8	-	12		
219	B	表探	磁器湯呑	緑色圏線2条, 近代	6.8	-	*4	3	-		
220	B	表探	磁器湯呑	青色プリント, 近代	-	3	*5.2	-	9		
301	Ba1	301SE井筒内	鬼瓦								
302	Ba	301SE井筒内	鬼瓦								
303	Ba	301SE井筒内	鬼瓦								
304	Ba	301SE井筒内	不明	家紋の一部(渡辺家家紋)							
305	Ba	301SE井筒内	鬼瓦か	家紋の一部(渡辺家家紋)							
306	Ba	301SE井筒内	軒棧瓦か	○に「一」刻印							
307	Ba	301SE井筒内	軒平瓦か	○に「三」刻印							
308	Ba	301SE井筒内	丸瓦	「三州棚尾奎兵衛」刻印							
309	Ba	301SE井筒内	丸瓦か								
S-001	Be	321SE(一括)	硯	泥岩	長*4.9	幅8.2	1.8				010125
S-002	Be	321SE(一括)	硯	泥岩	長*13.75	幅9.1	2.6				010125
S-003	Be	329SE	砥石	ホルンフェルス, 重量292.5g	長*6.9	幅5.3	4.8				
S-004	Be	320SE	砥石	線状の擦痕, 砂岩, 重量1011.0g							
S-005	Bd	330SK	台石か	砂岩, 28.6kg							
M-1	Bd	330SK	椀型滓	重量735.3g							
M-2	Bd	315SD	椀型滓	羽口片付着, 重量554.3g							
M-3	Bd	315SD	銭貨	寛永通宝, 3.1g	タテ2.4	ヨコ2.4	厚0.14				
*M-4	Ba	308SE	銭貨	寛永通宝, 3.7g	タテ2.4	ヨコ2.4	厚0.2				
M-5	Ba	308SE	銭貨	寛永通宝, 4.3g	タテ2.5	ヨコ2.4	厚0.165				
*M-6	Ba	308SE	銭貨	寛永通宝, 3.1g	タテ2.4	ヨコ2.4	厚0.2				
M-7	Ba	301SE	銭貨	寛永通宝, 2.9g	タテ2.4	ヨコ2.4	厚0.1				
*M-8	Bd	319SX	キセル(雁首の潰れ)	重量0.7g							
*310	Ba	301SE井筒内	丸瓦	「三州棚尾奎兵衛」刻印							
*311	Bd	319SX	棧瓦	○刻印							
*312	Be	328SE(西半)	不明	○刻印							
*313	Ba	301SE井筒内	棧瓦	○に「一」刻印							
*314	Ba	301SE井筒内	棧瓦	○に「三」刻印							
*315	Ba	301SE井筒内	軒棧瓦	○に「三」刻印							
*316	Ba	301SE井筒内	棧瓦	○に「三」刻印							
*317	Ba	301SE井筒内	棧瓦	○に「三」刻印							
*318	Ba	301SE井筒内	棧瓦	○に「三」刻印							
*319	Ba	301SE井筒内	棧瓦	○に「三」刻印							
*320	Ba	301SE井筒内	軒棧瓦	○に「三」刻印							
*321	Ba	301SE井筒内	軒棧瓦	○に「三」刻印							
*322	Ba	301SE井筒内	棧瓦	○に「大」刻印							
*323	Ba	301SE井筒内	棧瓦	○に「二」刻印							
*324	Ba	301SE井筒内	丸瓦	中央に刻印							



23B 区平面図 上面 1 (S=1/200)

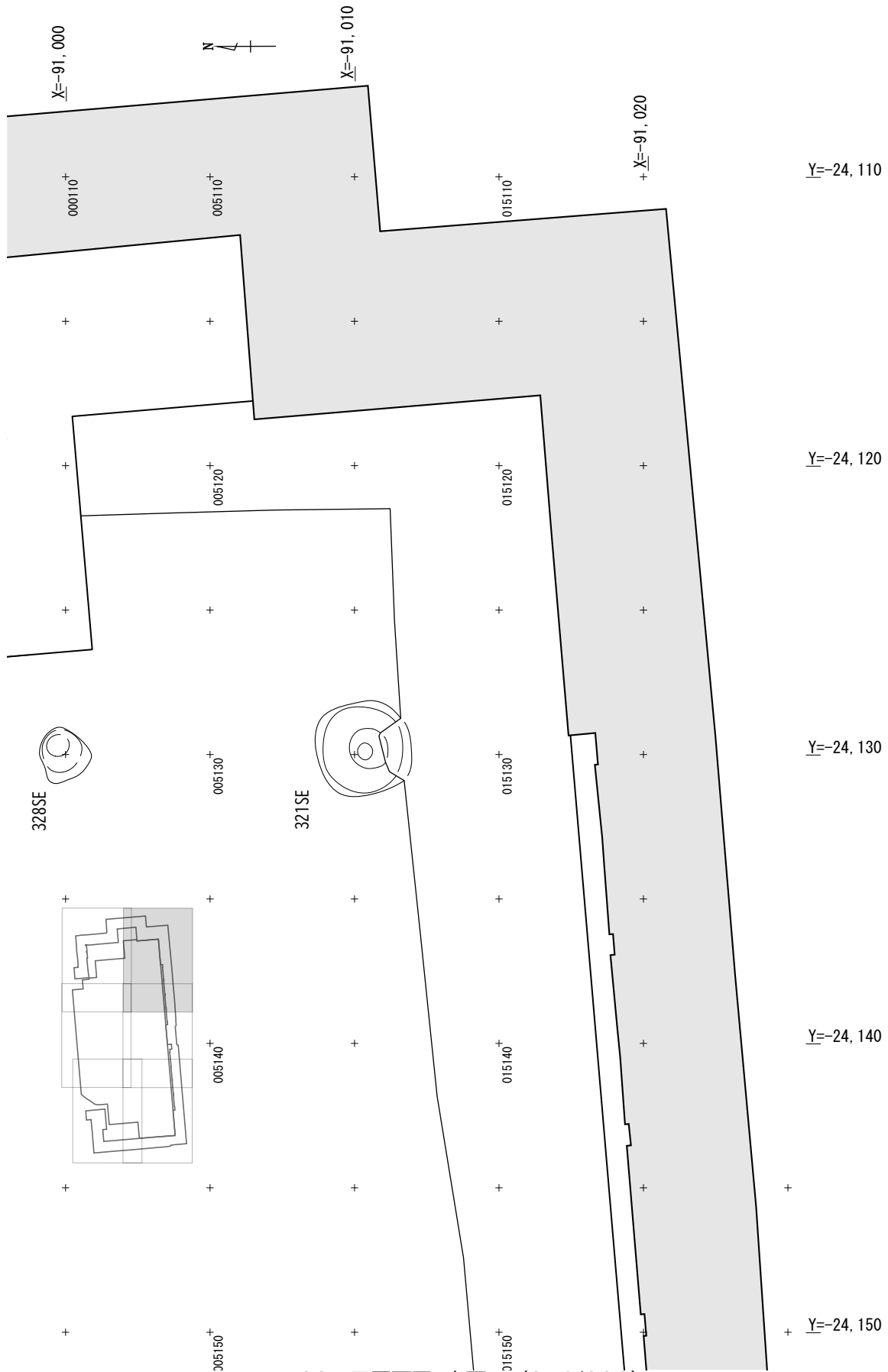
基本平面図





23B 区平面図 上面 3 (S=1/200)

基本平面図  
4

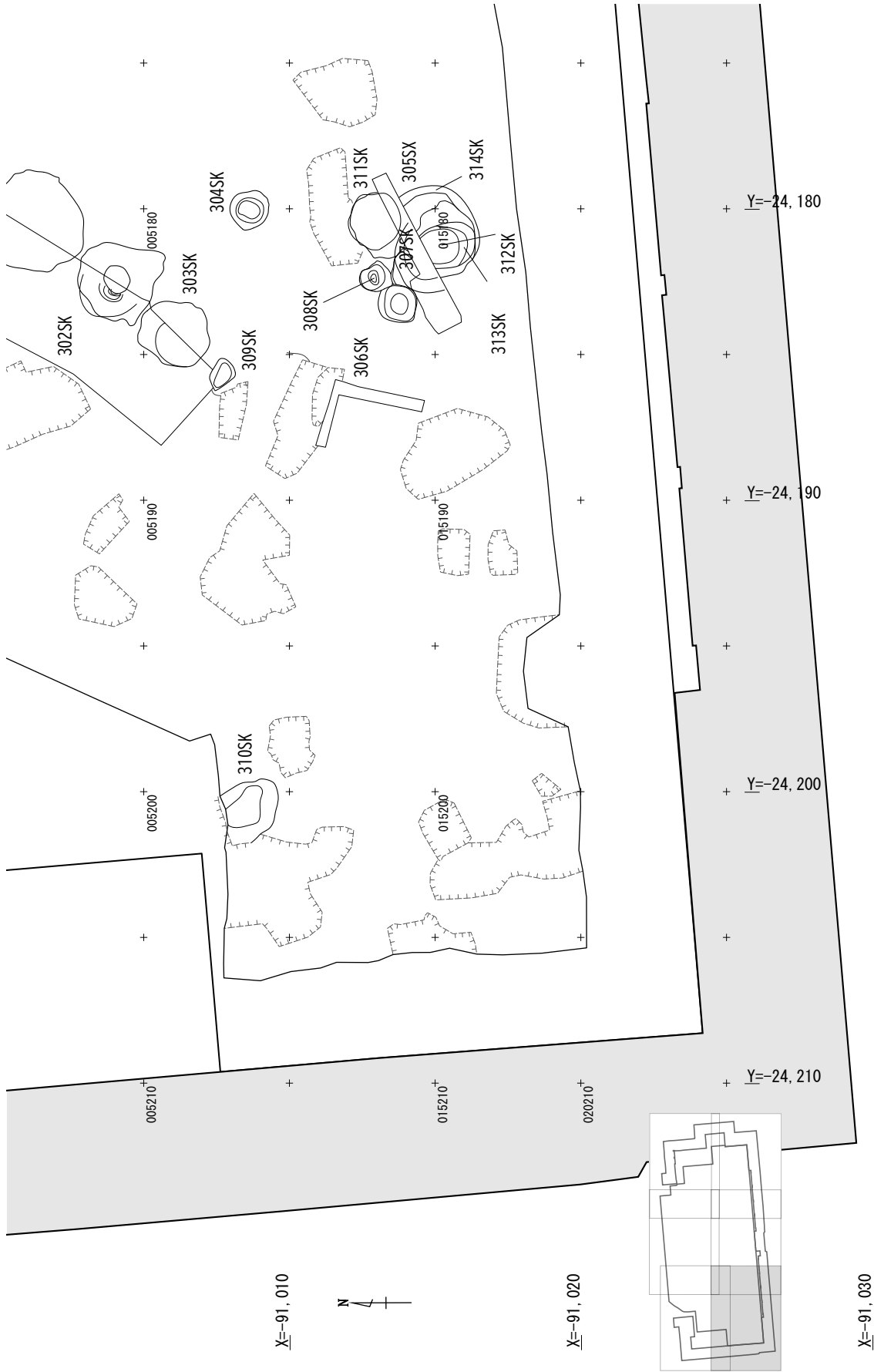


23B区平面図 上面 4 (S=1/200)



23B区平面図 上面 3 (S=1/200)

基本平面図 6



23B区平面図 上面 6 (S=1/200)



23B 区全景 (南西から)



大溝 315SD 埋土残存部の検出状況 (西から)



愛知県護国神社方向へ延びる大溝 315SD (東から)



大溝 315SD 埋積層の各種断面 (南西から)



大溝 315SD 埋土断面 (東から)



大溝 315SD 埋土断面 (西から)



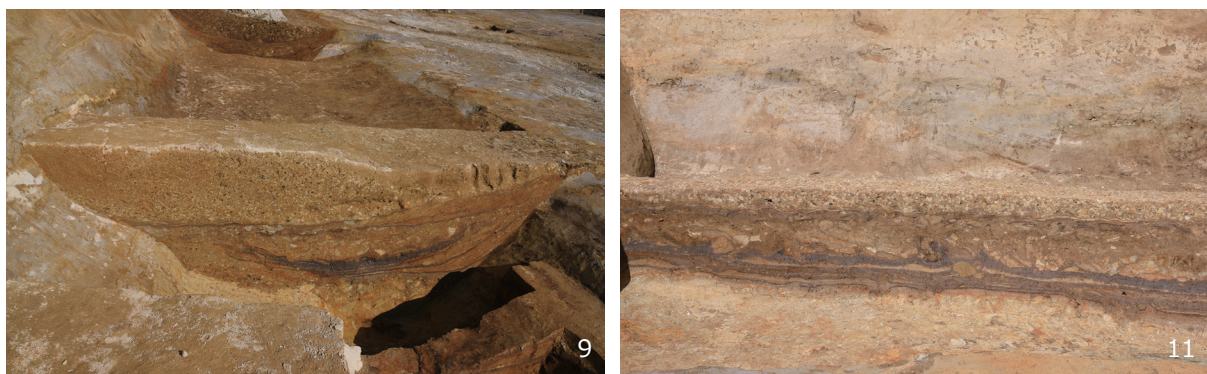
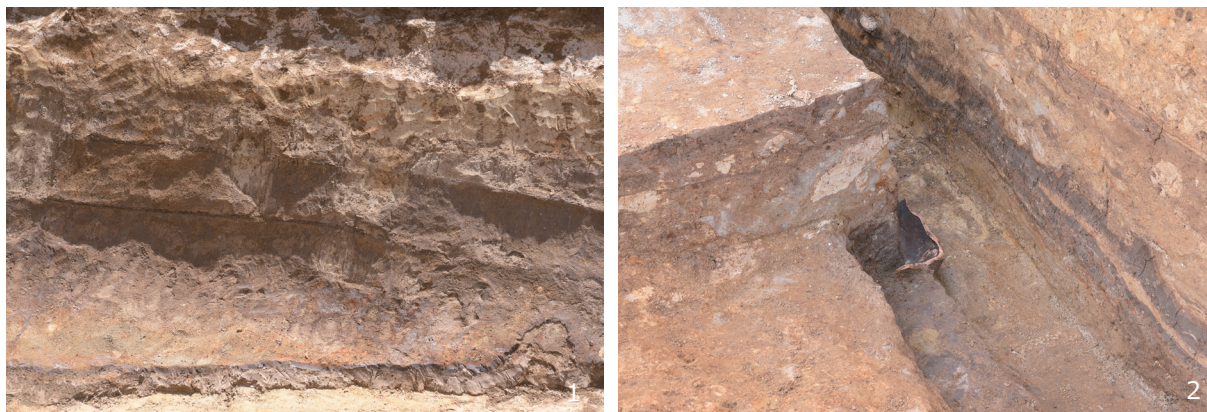
23B 区全景 (画面上が北)



大溝 315SD 断面にみえる上層埋積層の単位 (東から)



1. 大溝 315SD と畦状遺構観察用ベルト（西から）／ 2. 大溝 315SD 断面 埋土上層（奥）と中・下層（手前）（西から）／ 3 と 4. 大溝 315SD 断面（東から）／ 5. 大溝 315SD 埋土上層の断面（南から）／ 6. 大溝 315SD の埋土上層のみを掘削した段階の南側肩部分／ 7 と 8. 大溝 315SD 中層上位の畦 2 検出状況と断面（南東から，南から）／ 9. 大溝 315SD 中層上位の畦 4 検出状況（南西から）／ 10. 大溝 315SD 中層上の畦 4 検出状況と断面（南から）



1,3,4,5. 大溝 315SD 南側内壁 簾状遺物の痕跡 (北から) / 2.315SD 下層 挿鉢出土状況 (東から) / 6,7.315SD 北側内壁 棒状遺物列の検出状況 (南西から) / 8. 前記遺物の埋積状況断面 (南西から) / 9.315SD 中層・下層断面 (西から) / 10.315SD 中層・下層・最下層断面 (西から, オルソ画像) / 11.315SD 中層・下層の縦方向断面 (南から)

10



井戸 320SE 遺物出土状況 (南西から)



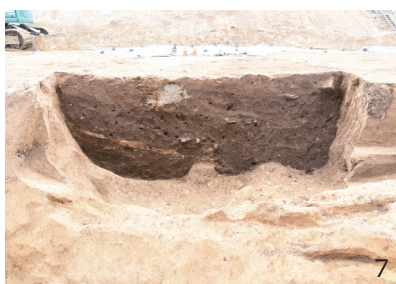
井戸 320SE 遺物出土状況 (礫・陶磁器)



手前から井戸 301,302,303SE 検出状況 (北東から)



奥から井戸 301SE,302SE 断面 (南から)



1. 井戸 303SE 断面 (西から) / 2. 井戸の重複 305SX 付近 (北から) / 3. 井戸 306SE 遺物出土状況 (北から) / 4. 井戸 304SE 最下層断面 (南から) / 5. 井戸 321SE 最下層付近断面 / 6. 井戸 328SE 検出状況 (南から) / 7. 土坑 319SX 断面 (北から) / 8. 土坑 330SK 断面 (南東から)





110



204



7



28



M-1



S-4



168



129



88



167



125



72



174



114



184



218



217



34



176



215



213



165



33



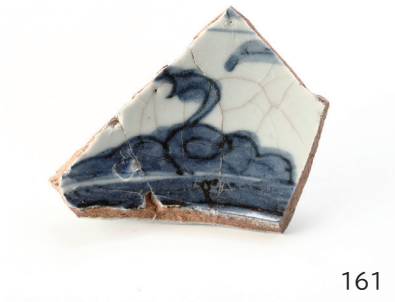
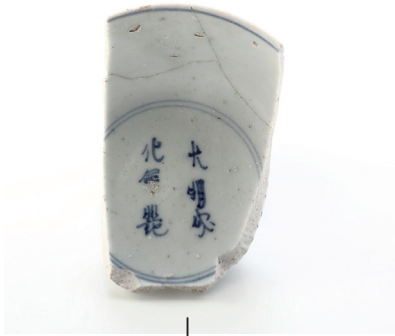
199



135



30



161

85

69

212

134

68

56

160

104

1007

1009

S-2

1008

42

73

## 報告書抄録

ふりがな	なごやじょうさんのまるいせき 10							
書名	名古屋城三の丸遺跡 X							
副書名								
巻次								
シリーズ名	愛知県埋蔵文化財センター調査報告書							
シリーズ番号	第236集							
編著者名	武部真木							
編集機関	公益財団法人 愛知県教育・スポーツ振興財団 愛知県埋蔵文化財センター							
所在地	〒498-0017 愛知県弥富市前ヶ須町野方802-24 TEL 0567(67)4161							
発行年月日	西暦 2026年 3月 31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
なごやじょう 名古屋城 さんのまるいせき 三の丸遺跡	あいちけん なごやし 愛知県名古屋市 なかくさんのまる 中区三の丸2丁目	23106	007027	35度 10分 45秒	136度 54分 4秒	2024.01.09~ 2024.03.22	3,344	名古屋第4 地方合同庁舎 整備等事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
名古屋城 三の丸遺跡	城郭	戦国時代 ~ 江戸時代	溝(堀)、井戸  溝、土坑、井戸		国内産陶磁器、 金属製品、石製品等  土師器(皿・鍋・人形)、 国内産陶磁器、 輸入陶磁器、 金属製品、石製品等		那古野城の南辺を 画する大溝を確認	
文書番号	発掘届出(5埋セ第3号 2023.4.5) 通知(5文芸第94-1号 2023.4.11) 終了届・保管証・発見届(5埋セ第149号 2024.3.21) 鑑定結果通知(6文芸第130号 2024.4.15)							
要約	調査地点は、名古屋城三の丸尾張藩武家屋敷のうちでも本町御門に最も近い重臣屋敷の一角にあたり、広大な敷地を継続して保有した渡邊半蔵家とその東側屋敷地のそれぞれ一部が含まれる。建物基礎撤去後の旧地表面より約3m 下からの調査において、江戸時代と戦国期の井戸計14基のほか、幅約12m 規模の大溝の底面を確認した。大溝は深さ約4m、土塁を伴い東西方向に103m 以上延びることが判明し、戦国期那古野城の南辺を画するいわゆる「惣構」と想定される重要遺構の発見となった。							

愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第236集

## 名古屋城三の丸遺跡X

2026年3月31日

発行 公益財団法人 愛知県教育・スポーツ振興財団

愛知県埋蔵文化財センター

印刷 西濃印刷株式会社